箱　崎　6

－箱崎遺跡群第10次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集

1998

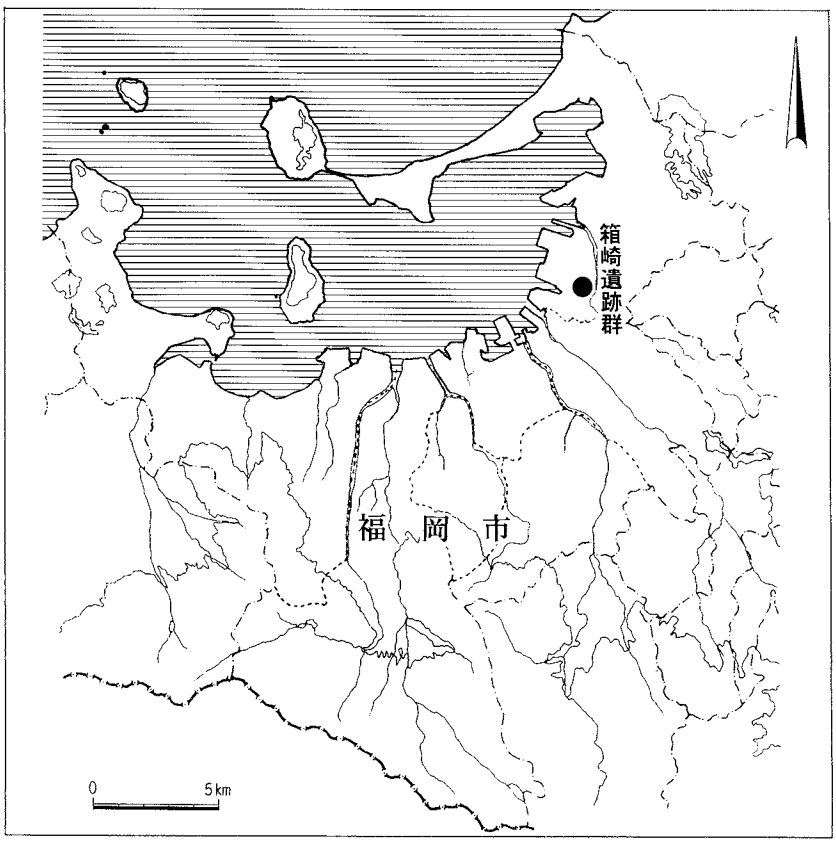
福岡市教育委員会

はこ　ざき

箱崎 6

－箱崎遺跡群第10次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集



調査番号　9646
調査略号　HKZ-10

1998
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします箱崎遺跡群は、筥崎宮を中心に発達したところで、「博多」と並ぶ、中世の国際貿易都市といえます。この調査では、多数の輸入陶磁器や鋳造関係の遺物など貴重な発見が相次ぎました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

平成10年３月31日

福岡市教育委員会
教育長 **町　田　英　俊**

例　言

1．本書は、福岡市東区箱崎３丁目地内の道路建設に伴い、福岡市教育委員会が1996（平成８）年11月11日から1997（平成９）年３月31日にかけて発掘調査を実施した箱崎（はこざき）遺跡群第10次調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、建物→ＳＢ、溝→ＳＤ、井戸→ＳＥ、土坑→ＳＫ、その他→ＳＸ、ピット→ＳＰとした。遺構番号はピット以外を種類に関係なく連番とした。ピットは別に番号を付けた。

3．本書に使用した遺構実測図は長家伸、瀬戸啓治、藤野雅基、中野美穂子、西山めぐみ、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は田中克子、平川敬治、橋本幸樹、甲斐田嘉子、森部順子、田上が作成した。また、製図には田中、木村良子、丸井節子、田上があたった。

4．本書に使用した写真は田上が撮影した。

5．本書に使用した標高は海抜高である。

6．本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し６°20′西偏する。

7．出土した陶磁器の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊　福岡市教育委員会　1984）による。

8．出土した動物骨について鹿児島大学の西中川駿氏に玉稿を頂いた。

9．本書の執筆はⅣを除いて田上が、編集は田上が行なった。

10．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	９６４６		遺跡略号	ＨＫＺ－１０	
調査地地籍	東区箱崎３丁目地内		分布地図番号	箱崎　３４	
開発面積	16,250㎡	調査対象面積	1,850㎡	調査面積	1,020㎡
調査期間	1996年（平成８年）11月11日～1997年（平成９年）３月31日				

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査にいたる経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査地点の立地と環境 …… 1
Ⅱ　調査の記録 …… 5
　1．調査の経過 …… 5
　2．調査の概要 …… 5
　3．発見された遺構と遺物 …… 14
　　（1）　建物 …… 14
　　（2）　溝 …… 14
　　（3）　井戸 …… 18
　　（4）　土坑 …… 27
　　（5）　その他の遺構 …… 47
　　（6）　包含層 …… 49
　　（7）　抽出した遺物 …… 51
Ⅲ　まとめ …… 63
Ⅳ　福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体 …… 71

挿図目次

Fig. 1　箱崎遺跡群の位置 …… 2
Fig. 2　箱崎遺跡群調査地点位置図 …… 4
Fig. 3　調査区位置図 …… 6
Fig. 4　調査区域図 …… 7
Fig. 5　遺構分布図　1 …… 8
Fig. 6　遺構分布図　2 …… 9
Fig. 7　遺構分布図　3 …… 10
Fig. 8　SB51 …… 14
Fig. 9　溝断面図 …… 15
Fig. 10　溝出土遺物 …… 17
Fig. 11　SE73 …… 18
Fig. 12　SE73出土遺物 …… 18
Fig. 13　SE77 …… 19
Fig. 14　SE77出土遺物 …… 19
Fig. 15　SE107 …… 20
Fig. 16　SE107出土遺物 …… 20
Fig. 17　SE108 …… 21
Fig. 18　SE108出土遺物 …… 21
Fig. 19　SE109 …… 22
Fig. 20　SE109出土遺物 …… 22
Fig. 21　SE239 …… 22
Fig. 22　SE239出土遺物 …… 22
Fig. 23　SE260・263 …… 23
Fig. 24　SE260出土遺物 …… 23
Fig. 25　SE156 …… 23
Fig. 26　SE156出土遺物 …… 23
Fig. 27　SE180 …… 24
Fig. 28　SE180出土遺物 …… 24
Fig. 29　SE196・202・203 …… 24
Fig. 30　SE196・202出土遺物 …… 25
Fig. 31　SE197・204 …… 25
Fig. 32　SE197・204出土遺物 …… 25
Fig. 33　SE198・205 …… 26
Fig. 34　SE205出土遺物 …… 26
Fig. 35　SE235 …… 26
Fig. 36　SE235出土遺物 …… 26
Fig. 37　SK01 …… 27
Fig. 38　SK01出土土師器法量グラフ …… 28
Fig. 39　SK01出土遺物　1 …… 28
Fig. 40　SK01出土遺物　2 …… 29
Fig. 41　SK02 …… 30
Fig. 42　SK02出土土師器法量グラフ …… 31
Fig. 43　SK02出土遺物　1 …… 31
Fig. 44　SK02出土遺物　2 …… 33
Fig. 45　SK04 …… 34
Fig. 46　SK04出土土師器法量グラフ …… 34
Fig. 47　SK04出土遺物 …… 35
Fig. 48　SK05 …… 35
Fig. 49　SK05出土遺物 …… 36
Fig. 50　SK06 …… 36

Fig. 51　SK06出土土師器法量グラフ ……37
Fig. 52　SK06出土遺物 ……37
Fig. 53　SK08 ……37
Fig. 54　SK08出土土師器法量グラフ ……38
Fig. 55　SK08出土遺物 ……39
Fig. 56　SK09 ……40
Fig. 57　SK09出土土師器法量グラフ ……40
Fig. 58　SK09出土遺物 ……40
Fig. 59　SK17 ……41
Fig. 60　SK17出土土師器法量グラフ ……41
Fig. 61　SK17出土遺物 ……41
Fig. 62　SK18 ……42
Fig. 63　SK18出土土師器法量グラフ ……42
Fig. 64　SK18出土遺物 ……42
Fig. 65　SK20 ……43
Fig. 66　SK20出土土師器法量グラフ ……44
Fig. 67　SK20出土遺物 ……44
Fig. 68　SK30 ……45
Fig. 69　SK30出土遺物 ……45
Fig. 70　SK87 ……45
Fig. 71　SK87出土遺物 ……45
Fig. 72　SK240 ……46
Fig. 73　SK240出土土師器法量グラフ ……46
Fig. 74　SK240出土遺物 ……46
Fig. 75　SK190 ……47
Fig. 76　SX200 ……48
Fig. 77　SX200 出土遺物 ……49
Fig. 78　発掘区東端南壁土層 ……49
Fig. 79　包含層出土遺物 ……50
Fig. 80　抽出した遺物　1 ……52
Fig. 81　抽出した遺物　2 ……53
Fig. 82　墨書陶磁器 ……53
Fig. 83　生産関連遺物 ……55
Fig. 84　SD158緡銭出土位置 ……58
Fig. 85　SD158緡銭出土状況 ……58
Fig. 86　SD158出土緡銭拓影　1 ……59
Fig. 87　SD158出土緡銭拓影　2 ……60
Fig. 88　SD158出土緡銭拓影　3 ……61
Fig. 89　出土銭拓影 ……62

図版目次

PL. 1　調査区全景 ……6
PL. 2　Ⅰ区全景 ……11
PL. 3　Ⅱ区全景 ……11
PL. 4　Ⅲ区全景 ……12
PL. 5　Ⅳ区全景 ……12
PL. 6　Ⅴ区全景 ……13
PL. 7　Ⅵ区全景 ……13
PL. 8　SB51 ……14
PL. 9　SD23 ……16
PL. 10　SD74 ……16
PL. 11　SD82・84 ……16
PL. 12　SD158 ……16
PL. 13　SD50出土遺物 ……16
PL. 14　SE73 ……18
PL. 15　SE77 ……19
PL. 16　SE107・108・109・239・260・263 ……19
PL. 17　SE107 ……20
PL. 18　SE108 ……21
PL. 19　SE109 ……22
PL. 20　SE109出土遺物 ……22
PL. 21　SE239 ……22
PL. 22　SE156 ……23
PL. 23　SE180 ……24
PL. 24　SE196・202・203 ……24
PL. 25　SE197・204 ……25
PL. 26　SE198・205 ……26
PL. 27　SE205出土遺物 ……26
PL. 28　SE235 ……26
PL. 29　SK01 ……27
PL. 30　SK01出土遺物 ……29
PL. 31　SK02 ……30
PL. 32　SK02出土遺物 ……32
PL. 33　SK04 ……34
PL. 34　SK04出土遺物 ……34
PL. 35　SK05 ……35
PL. 36　SK05出土遺物 ……36
PL. 37　SK06 ……37
PL. 38　SK08出土遺物 ……39
PL. 39　SK09 ……40
PL. 40　SK17 ……41
PL. 41　SK18 ……42
PL. 42　SK20 ……43
PL. 43　SK20出土遺物 ……44
PL. 44　SK30 ……45
PL. 45　SK30出土遺物 ……45
PL. 46　SK240 ……46
PL. 47　SK190 ……47
PL. 48　SX200 ……48
PL. 49　発掘区東端南壁土層 ……49
PL. 50　包含層出土遺物 ……50
PL. 51　抽出した遺物 ……51
PL. 52　墨書陶磁器 ……54
PL. 53　生産関連遺物 ……56
PL. 54　石製品・土製品 ……57
PL. 55　SD158緡銭出土状況 ……58

表目次

Tab. 1　箱崎遺跡群調査一覧 ……3
Tab. 2　鋳造関連出土遺構一覧 ……55
Tab. 3　SD158出土緡銭一覧 ……61
Tab. 4　SD158出土緡銭銭貨名一覧 ……62
Tab. 5　出土銭一覧 ……62
Tab. 6　遺構一覧 ……64

Ⅰ　はじめに

1．調査にいたる経緯

1995年（平成７年）７月24日付文書（土筥第62号）で、土木局筥崎連続立体開発事務所から埋蔵文化財課へ、福岡市東区箱崎３丁目～原田２丁目における都市計画道路箱崎阿恵線道路整備事業に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。当該地のうち、箱崎３丁目地内が箱崎遺跡群の範囲にかかるため、埋蔵文化財課では、1995年（平成７年）８月１日と1996年（平成８年）４月23日・５月８日に試掘調査を行ない、1850㎡について発掘調査が必要である旨を回答した。その後の協議により発掘調査を実施することとなり、1996年11月11日より1997年３月31日まで調査を行なった。整理作業と報告書の刊行は1997年度（平成９年度）に行なった。

2．調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託　福岡市土木局筥崎連続立体開発事務所
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊
調査総括　埋蔵文化財課　　課長　　荒巻輝勝　　第２係長　山口譲治
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　　内野保基
調査担当　埋蔵文化財課第１係　　浜石哲也　杉山富雄　榎本義嗣　（試掘調査）
　　埋蔵文化財課第２係　　田上勇一郎　（本調査）
調査補助　瀬戸啓治
調査作業　石橋テル子　今別府序子　岡部静江　金子國雄　金子澄子　唐島栄子　境フジ子
　　酒井康恵　坂田武　杉村百合子　高崎秀巳　高田勲　辻美佐江　中野美穂子　永松伊都子
　　永松トミ子　西山めぐみ　布江孝子　日尾野典子　藤野雅基　森本勇夫　吉住政光
整理補助　田中克子　平川敬治
整理作業　木村良子　丸井節子　甲斐田嘉子　森部順子

また、本調査の開始から報告書刊行にいたるまで次の方々にご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
西中川駿（鹿児島大学）、中橋孝博（九州大学）、櫻木晋一（下関大学）、中山光夫（日本鉱業史研究会会員）

3．調査地点の立地と環境

箱崎遺跡群は博多湾東岸に形成された南北に長い砂丘上に立地する。この砂丘上には箱崎遺跡群のほかに堅粕遺跡、吉塚遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡が知られている。

今回調査した箱崎遺跡群は砂丘の北端にあたり、旧糟屋郡に属する箱崎から旧那珂郡に属する馬出にかけての地域に所在する。中心には923年創建の筥崎宮が鎮座する。西は博多湾に臨み、東を多々良川の支流、宇美川により画されている。北側は多々良川の河口があるが、かつてはここから筥崎宮の東側まで海が深くはいり込み、「箱崎ノ津」と呼ばれる筥崎宮の私港があった。

筥崎宮は921年（延喜21年）、大宰府観世音寺の巫女に八幡大菩薩の託宣があり、それによって、923年（延長元年）に、穂波郡にあった大分宮を現在の地に遷座・創建したものである。その理由として、

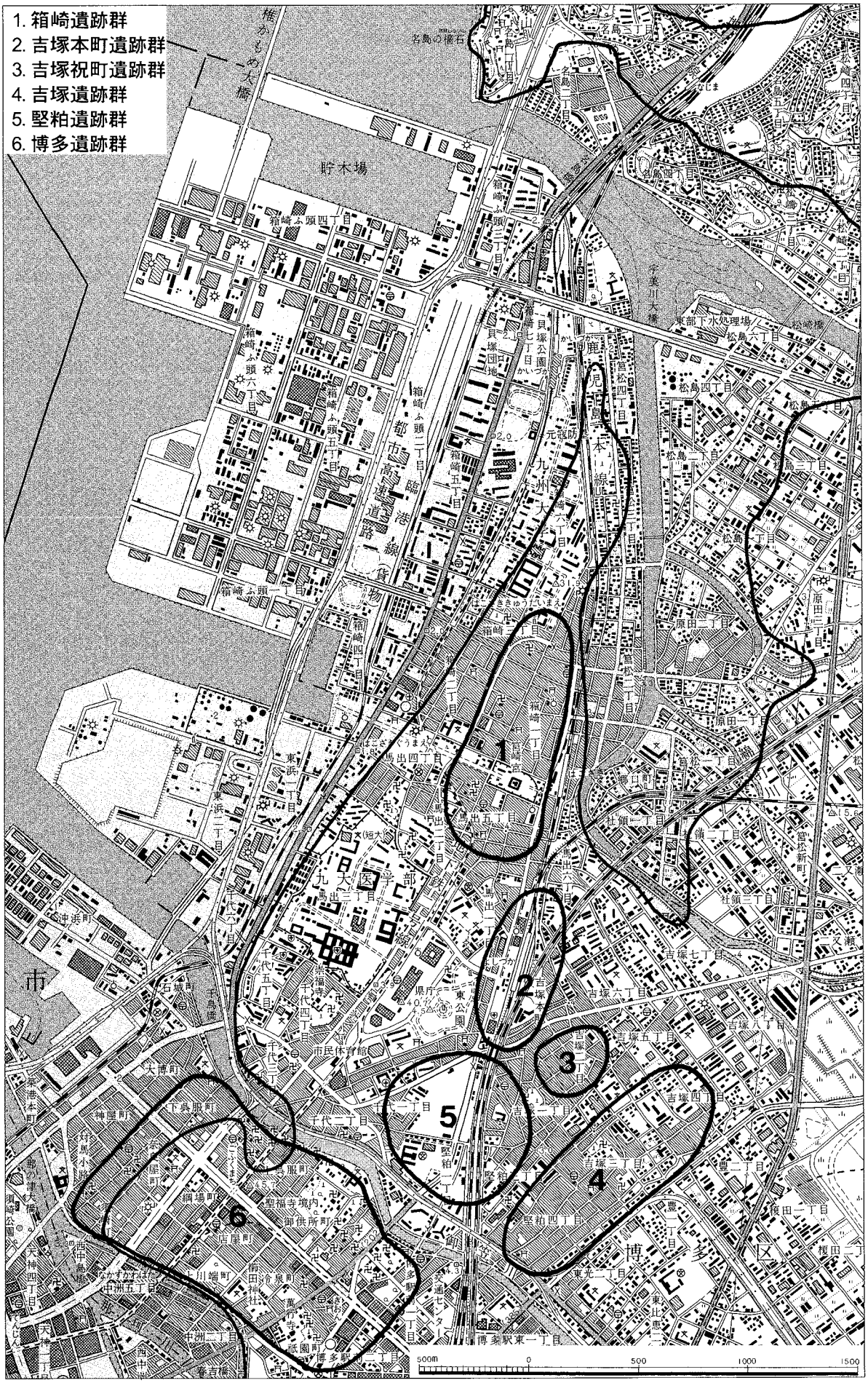


Fig. 1　箱崎遺跡群の位置（1/25,000）

八幡大菩薩の重要行事の一つ放生会の最適地であること、新羅の来寇を防ぐことなどがあげられている。1140年（保延６年）、筥崎宮・香椎宮などの神人らが大宰府以下屋舎数十家屋を焼き払う事件が発生、筥崎宮は香椎宮とともに大宰府の府領となる。1151年（仁平元年）には大宰府官人による筥崎・博多の大追捕があり、宋人王昇の後家をはじめ千六百家の資材物を運び取り、筥崎宮にも乱入している。これらは筥崎宮と大宰府、日宋貿易との関係を物語る事件である。1274年（文永11年）、元寇により筥崎宮は消失している。1587年（天正15年）には、豊臣秀吉は島津氏攻略の帰途、筥崎宮を本陣とし、箱崎松原で茶会を催している。

考古学的な調査は1983年の地下鉄２号線（箱崎線）建設に先がけて実施されたのが最初であり、現在まで13次にわたり調査が行なわれている。

これまでの調査で時期的に遡るのは６次調査で出土した石斧で、縄文時代晩期から弥生時代初頭に属するものと考えられるが、中世の遺構から出土しているため、この時期から人々が生活していたかどうかは確実性に乏しい。

確実に生活痕跡が認められるのは８次調査で発見された古墳時代初頭の竪穴住居と土坑である。イイダコ壺が多数出土しており、博多湾で漁業を営む集団が生活していたようである。

奈良時代の遺構・遺物は今回の10次調査で土師器の甕が出土しているにとどまる。これは近代の井戸の堀方から出土したもので、明瞭な生活痕跡を示すものではない。

筥崎宮の創建のころの遺構としては、２次調査で検出した10世紀後半の溝くらいで、現在のところ不明である。

11世紀後半ごろから遺構・遺物が増加する。多量に出土する輸入陶磁器から、博多とともに箱崎が対外貿易の拠点であったことが裏付けられている。

２次調査地点では1274年の文永の役による火災の後の整地と見られる整地層が発見されている。

14世紀から15世紀の頃、筥崎宮周辺の１次、２次、３次調査地点などでは定型化した集落が形成されはじめ、この頃、筥崎宮の門前町として栄えたようである。

今回の10次調査地点は、箱崎遺跡群の北部の東端にあたる。標高は3.8m～2.5mで、東に緩やかに傾斜している。道路を隔てた向かい側には６次調査地点が所在する。

Tab. 1　箱崎遺跡群調査一覧

調査次数	調査年	所　在　地	調査原因	文　献
第１次調査	1983年	馬出２丁目、５丁目地内	地下鉄建設	市報193集（1988）
第２次調査	1986年	箱崎１丁目18-32外	福岡県粕屋総合庁舎建設	県報79集（1987）
第３次調査	1990年	箱崎１丁目2731-1、4	共同住宅建設	市報262集（1991）
第４次調査	1990年	箱崎１丁目2761	筥崎宮放生池掘削	市年報Vol.４（1991）
第５次調査	1991年	箱崎１丁目25、27	共同住宅建設	市報273集（1992）
第６次調査	1994年	箱崎３丁目8-31	共同住宅建設	市報459集（1996）
第７次調査	1994年	箱崎１丁目2711外４筆	共同住宅建設	市報459集（1996）
第８次調査	1996年	箱崎１丁目2549-1外	共同住宅建設	未報告
第９次調査	1996年	箱崎１丁目1935-1	共同住宅建設	市報550集（1998）
第10次調査	**1996年**	**箱崎３丁目地内**	**道路建設**	**本書**
第11次調査	1997年	箱崎３丁目3264-3	病院建設	未報告
第12次調査	1997年	箱崎１丁目2606-3-1	個人住宅建築	未報告
第13次調査	1997年	馬出５丁目520、521	共同住宅建設	未報告

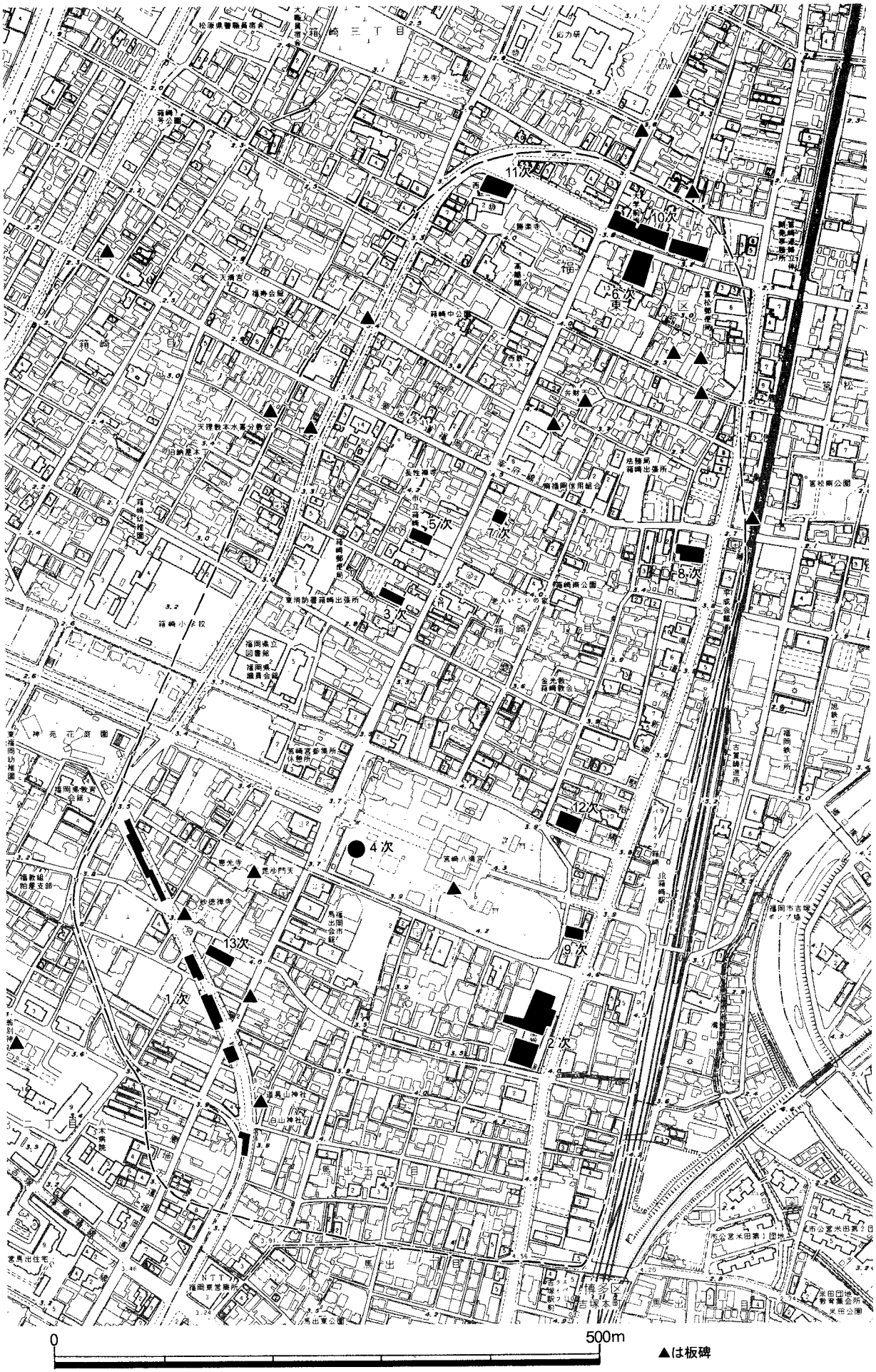


Fig. 2　箱崎遺跡群調査地点位置図（1/5,000）

Ⅱ　調査の記録

1．調査の経過

調査地は20m×100mの細長い道路予定地で、現在使用されている道路と民家の間にある。そのため、道路と民家の間に生活道路の確保が必要となり、未調査区を残したり、生活道路を切り替えたりすることになった。また、調査地内に排土を置く必要があったため、5区画にわけて調査を行なうこととした。各調査区を西からⅠ区・Ⅱ区…Ⅴ区と名付けた。調査区全体には予定道路の軸に沿った2m方眼のグリッドを設けることとし、名称を北から南へA・B…J、西から東へ1・2…48とした。グリッドの南北方向の軸は磁北に対して30°37″東に振れている。

1996年11月11日、発掘調査機材を搬入し、11月18日、Ⅰ区から表土除去に着手した。予想以上の遺構密度の濃さと遺物の量に予定していた期間をオーバーして12月23日に調査を終了し、25日に埋め戻しを完了した。年が明けて、1月7日、Ⅱ区の表土除去を開始した。Ⅱ区の西半の北側ではマンションの建設が行われており、そのための資材や器械の置き場の関係から北半が調査できず「L」字型の調査区となった。1月24日に調査を終了し、1月30日までにⅡ区の埋め戻しと、Ⅲ区の表土除去を行なった。Ⅲ区は遺構確認面まで浅く、また、遺構の密度もあまり濃くなく、順調に調査が進み2月13日に終了し、2月15日までに埋め戻した。この間、2月3日にマンションの建設業者と協議し、2月17日から3月12日まで、未調査になっていたⅡ区西半の北側部分の調査ができることになり、Ⅵ区と名付け、Ⅴ区と平行して調査することにした。2月17日から20日までⅤ区とⅥ区の表土除去を行ない、Ⅴ区では砂丘の東の落ち際を確認し、Ⅵ区ではⅡ区で半分調査した井戸3基の反対側と、さらにそれと切り合う井戸3基を調査した。3月10日までにⅥ区、16日までにⅤ区の調査を終え、埋め戻した。Ⅳ区は3月20・22日に表土除去を行ない、24日より調査を開始した。水道管やガス管が入っており、調査が困難であったが、28日には調査を終了、29日に埋め戻しを完了させた。31日には柵を張り直し、発掘機材を撤収し、調査をすべて完了した。

2．調査の概要

調査地点は東西に長く、場所により状況が異なるが基本的に現在の整地土を除去すると暗褐色砂質土があり、これを下げると黄褐色の砂が現れる。この砂が現れる面で遺構の検出を行なった。現地表面は東に緩やかに傾斜しているが、砂の面はI−24グリッド周辺の標高2.8mを最高に東西に緩やかに傾斜する。西側のI−1グリッド、東側のI−44グリッドで標高2.6mを測る。また、F〜I−45〜48グリッドには、この遺構検出面より下に12世紀前半の遺物包含層が形成されている。この包含層を取り除くと、I−47グリッドで、標高0.5mまで下がる。

遺構は建物1棟、溝15条、井戸24基、土坑222基、馬の埋葬土壙1基、馬の骨と人骨が集積した遺構1基、ピット多数を検出した。12世紀から近代までの遺構がある。中世の遺構・遺物は12世紀後半のものがほとんどであり、発掘区の西側に集中する。13世紀代の遺物は数えるほどしか出土していない。中世後期の遺構は、溝といくつかの土坑が見られる程度である。近世・近代になると発掘区中央から東にかけて遺構が増加する。

今回の報告では紙面の関係から近世の遺構にはふれることができず、中世の遺構についても主なものしか掲載することができなかった。個別に説明できなかった遺構については遺構全体図と遺構一覧表を参照されたい。

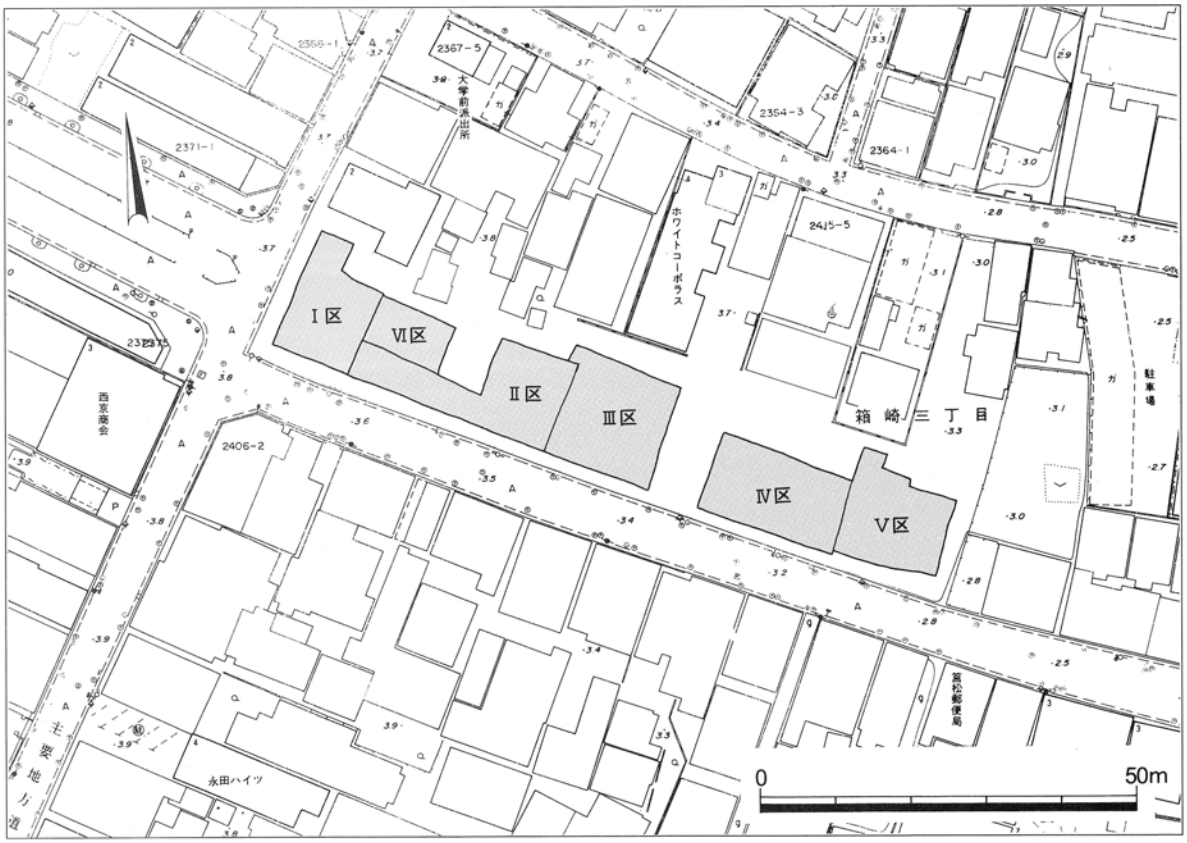


Fig. 3　調査区位置図（1/1,000）

PL. 1　調査区全景（東から）

Fig. 4　調査区域図（1/500）

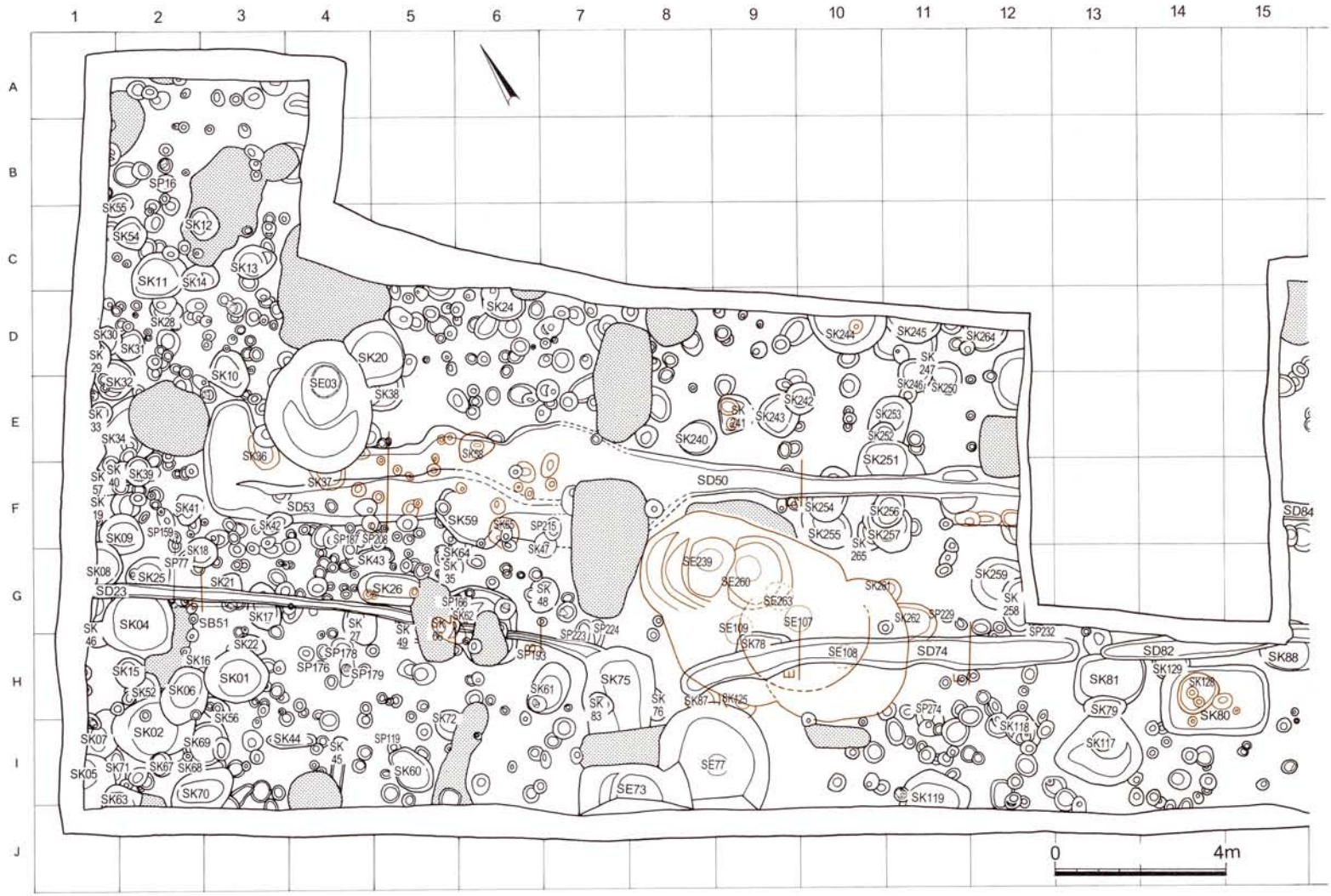


Fig. 5　遺構分布図 1 (1/150)

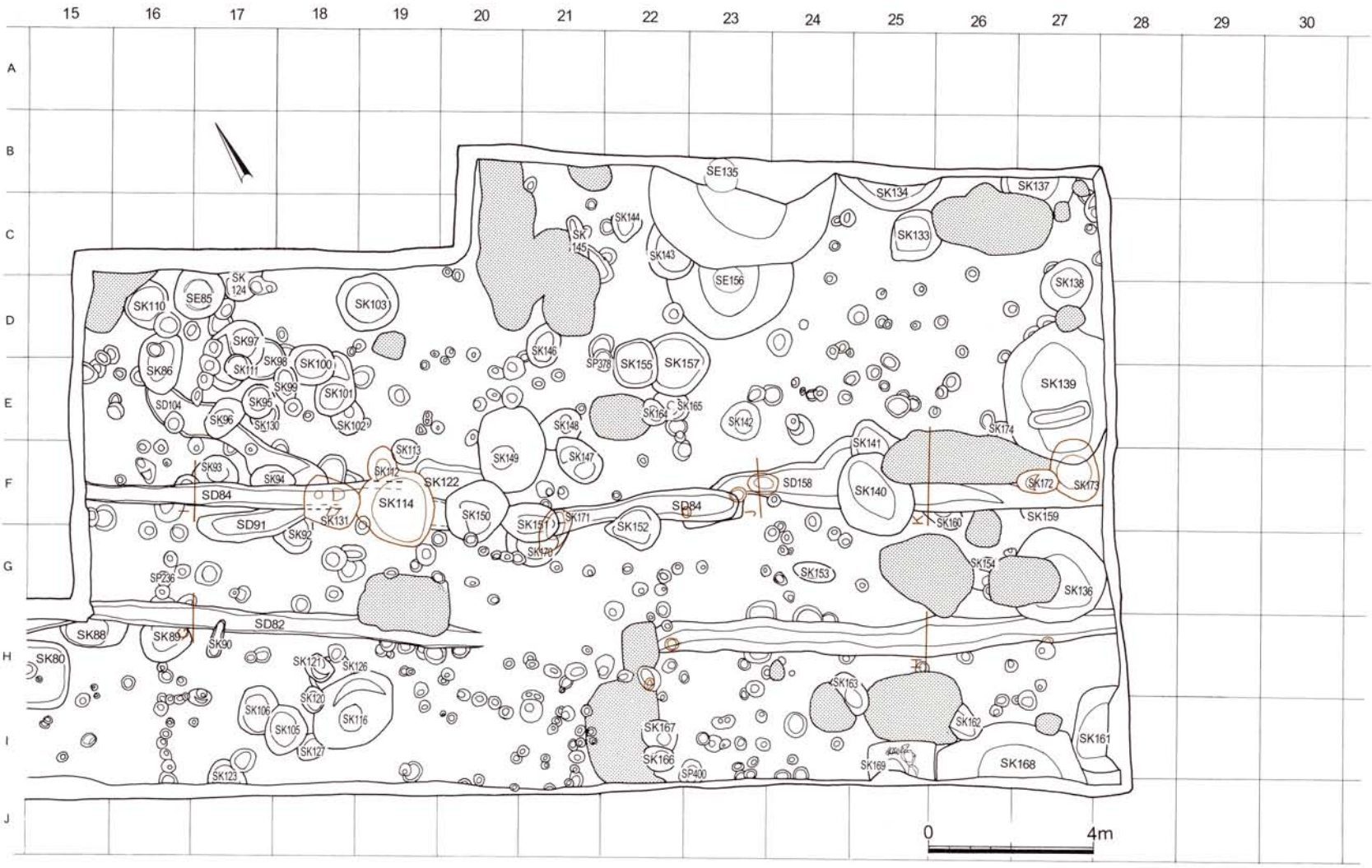


Fig. 6　遺構分布図 2 (1/150)

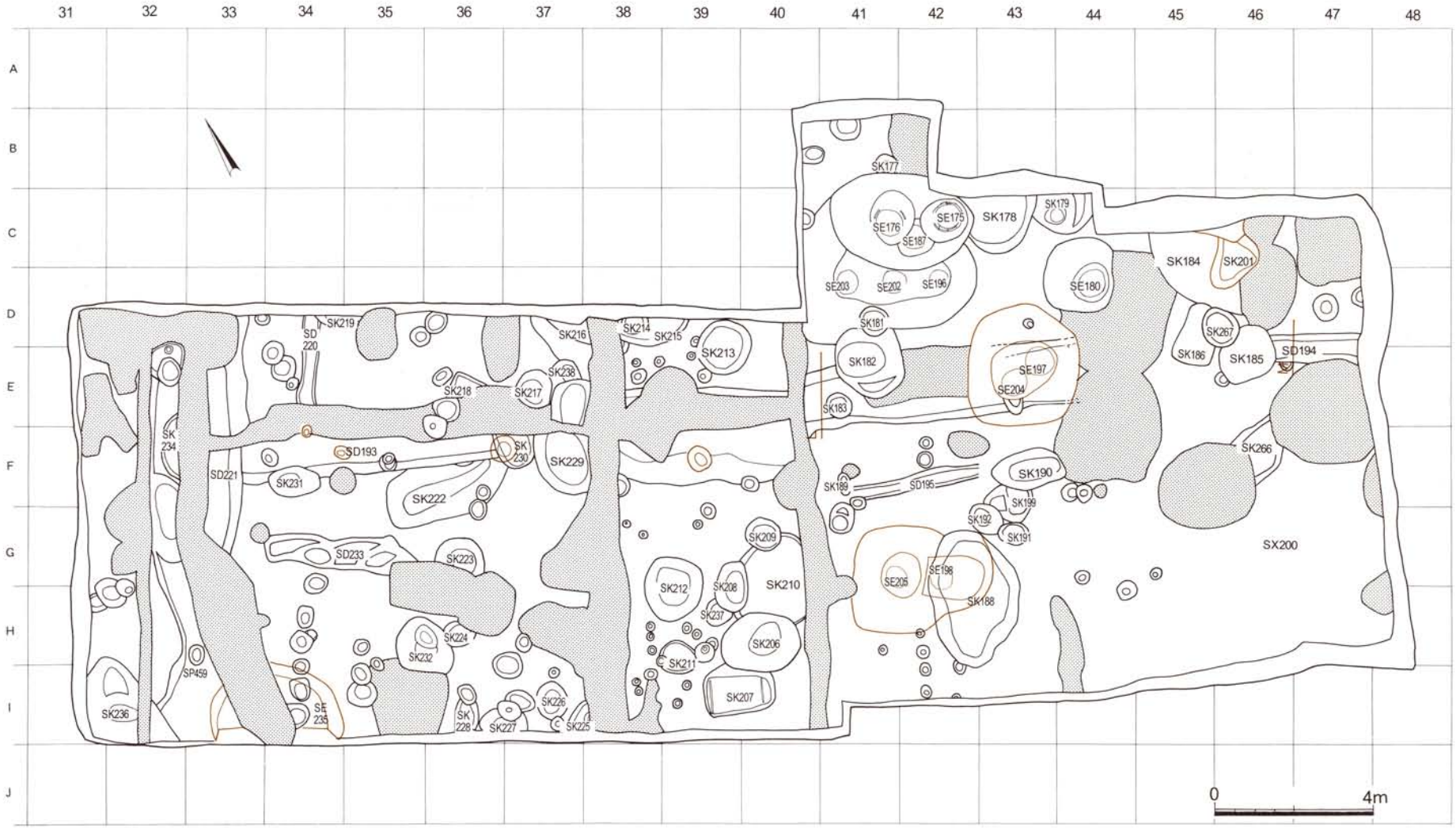
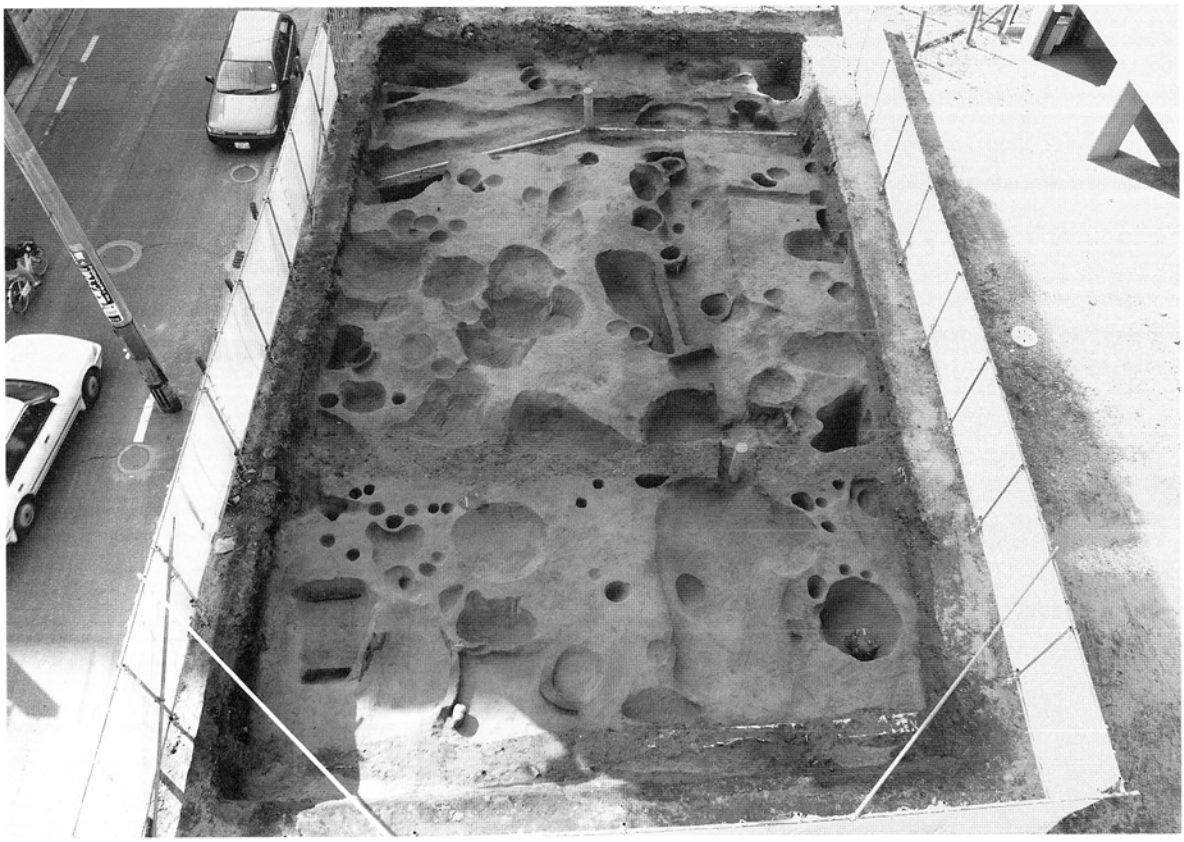


Fig. 7　遺構分布図 3 (1/150)

PL. 2　Ⅰ区全景（東から）

PL. 3　Ⅱ区全景（北から）

PL. 4　Ⅲ区全景（南から）



PL. 5　Ⅳ区全景（東から）

PL. 6　Ⅴ区全景（西から）

PL. 7　Ⅶ区全景（北から）

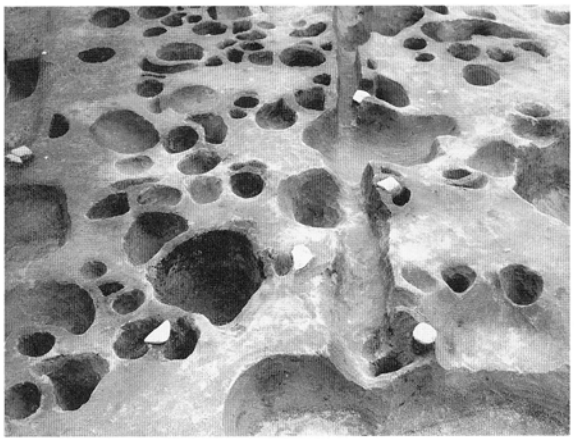
3．発見された遺構と遺物

（1）建物

本調査では多数のピットを検出したが建物としてまとめることができたのは1棟だけであった。

SB51

F・G－2～4で1×2間分確認した。扁平な礫を礎板とするが、礫のレベルは一定ではない。SD23に切られる。出土遺物がなく、はっきりしないが、12世紀代の建物と考えている。



PL. 8　SB51（西から）

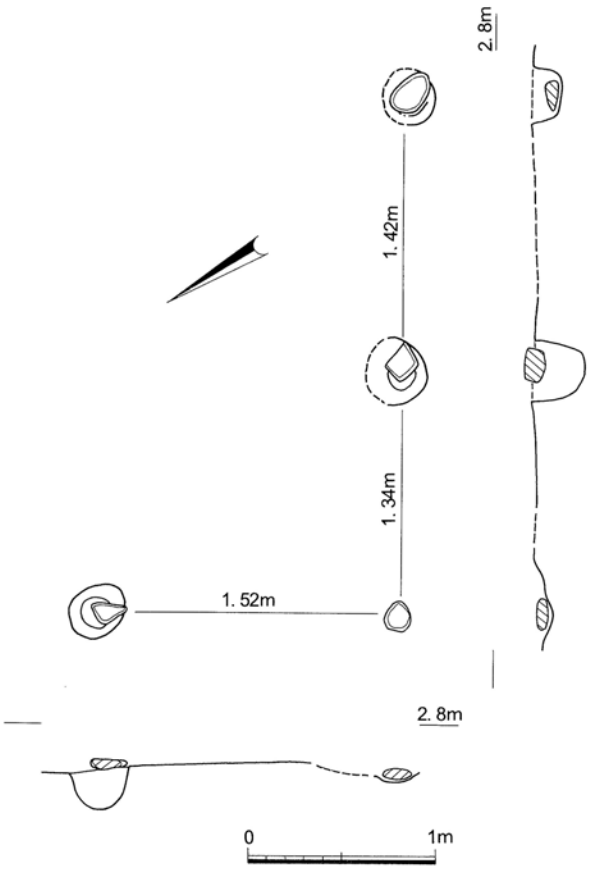


Fig. 8　SB51（1/40）

（2）溝

溝は15条確認した。このうち SD23、SD74、SD82と SD50、SD84、SD158、SD193、SD194はそれぞれほぼ一直線になり、2本の平行した溝となる。また、ほぼ現在の地割に沿っている。これらは12～13世紀代の土坑を切り、近世以降の土坑に切られている。

SD23

G－1～6、H－6・7で確認した東西方向の溝で、12m確認した。西側は発掘区外に伸び、東側は SK75と重複して途切れる。SK75との切り合いはつかめなかった。幅は0.3m前後と狭く、深さは0.2mである。SK04、SK08、SK17、SK21、SK25、SK27、SK46、SK49、SK62を切る。9は中国陶器C群の壺である。濃い暗緑色の不透明釉が内面、外面ともにかかる。10は龍泉窯青磁碗V類である。そのほか同安窯系青磁碗、糸切りの土師器坏や鞴の羽口などが出土している。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD50

E・F－3～12で19m確認した東西方向の溝で SD23と平行する。東側は未調査地を隔てて SD84に接続するものと見られる。幅は0.5～1.7m、深さは0.2m前後である。SK251、SK254、SK256を切る。11は口禿の白磁碗である。12は龍泉窯系青磁碗II類である。13は中国陶器B群の壺である。上半2分の1を欠損する。そのほか龍泉窯系青磁碗I類、II類、同安窯系青磁碗、白磁碗、白磁水注、東播系捏鉢、瓦質擂鉢、瓦などが出土している。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD53

F－３～７で確認した溝である。SD50に切られる。幅1.6～2.5m、深さ0.3m前後である。糸切りの土師器坏、青磁碗・皿、白磁碗・皿、瓦などが出土している。はっきりしないが13世紀ごろの溝と考えられる。

SD74

H－８～13で確認した東西方向の溝である。全長9.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.1m前後である。SK78、SK87、SE107、SE108、SE109、SK258、SK262を切る。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗、白磁碗、中国陶器C群の捏鉢、土鍋、瓦が出土している。12世紀後半代の遺物が多いが、切り合いや覆土の状況から16世紀前後の溝と考えられる。

SD82

H－13～28で確認した東西方向の溝である。SD84と平行している。東側は発掘区外に伸びる。途中途切れるが、30m確認した。幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mである。SK81、SK88、SK89、SK129を切り、SK90、SK136に切られる。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗・皿、瓦などが出土している。１～３は土師器の皿である。12世紀後半代の遺物が多いが、16世紀前後の溝と考えられる。

SD84

F－15～23で16m確認した東西方向の溝で、SD82と平行して走る。西側は発掘区外に伸びるが SD50に接続すると思われる。ヘラ切りの土師器坏、糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同安窯

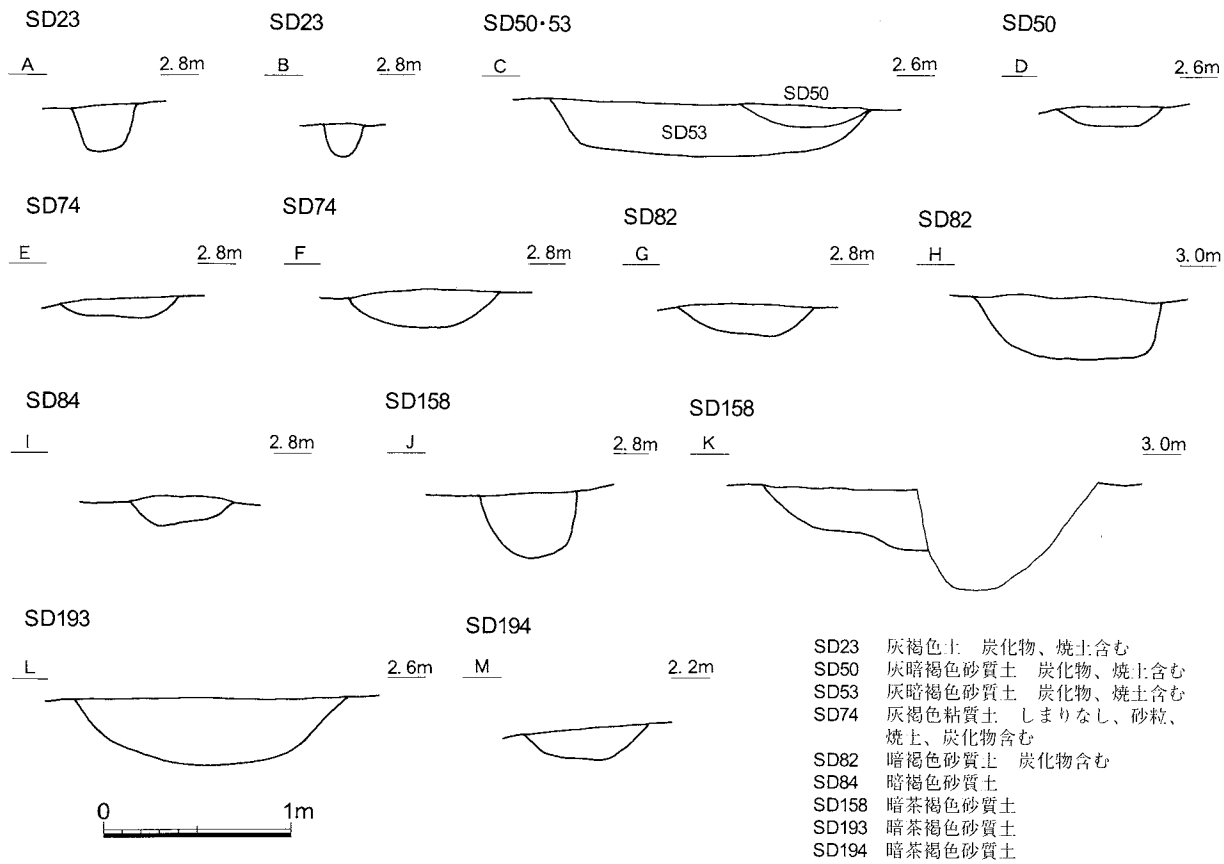
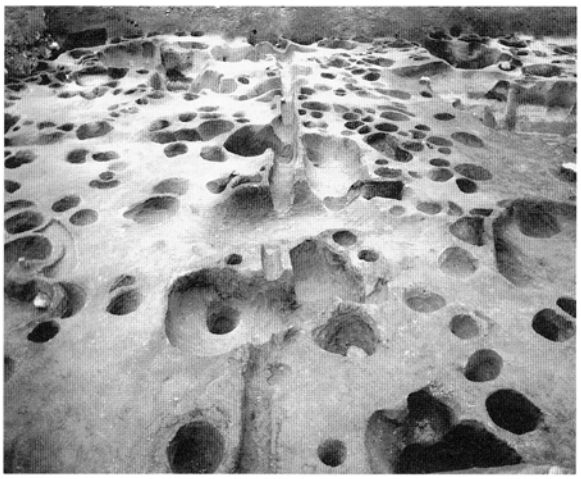
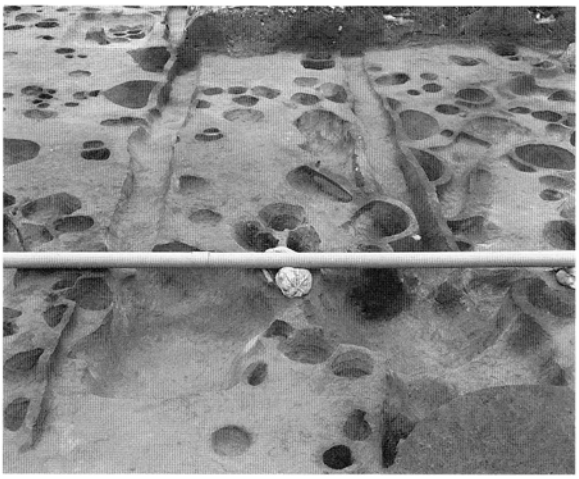


Fig. 9　溝断面図（1/40）



PL. 9　SD23（東から）

PL. 10　SD74（西から）



PL. 11　SD82・84（東から）

PL. 12　SD158（西から）

系青磁碗、白磁碗・皿、瓦器椀などが出土している。4は土師器の皿である。12～13世紀の遺物が多いが、16世紀前後の溝であると考えられる。

SD158

F－23～28で10m確認した東西方向の溝である。東側は発掘区外に伸びる。攪乱を受けてはっきりしないが、幅1.0m前後、深さ0.3mである。後述（58ページ）の緡銭が出土している。そのほかに龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗、瓦質擂鉢、火舎、瓦、糸切りの土師器の坏などが出土した。5～7は土師器の坏である。白っぽい胎土、薄手の作りで、他の遺構で出土した土師器とは明らかに異なる。搬入品であろう。大内系の土器か。16世紀ごろの溝と考えられる。

PL. 13　SD50出土遺物（約1/4）

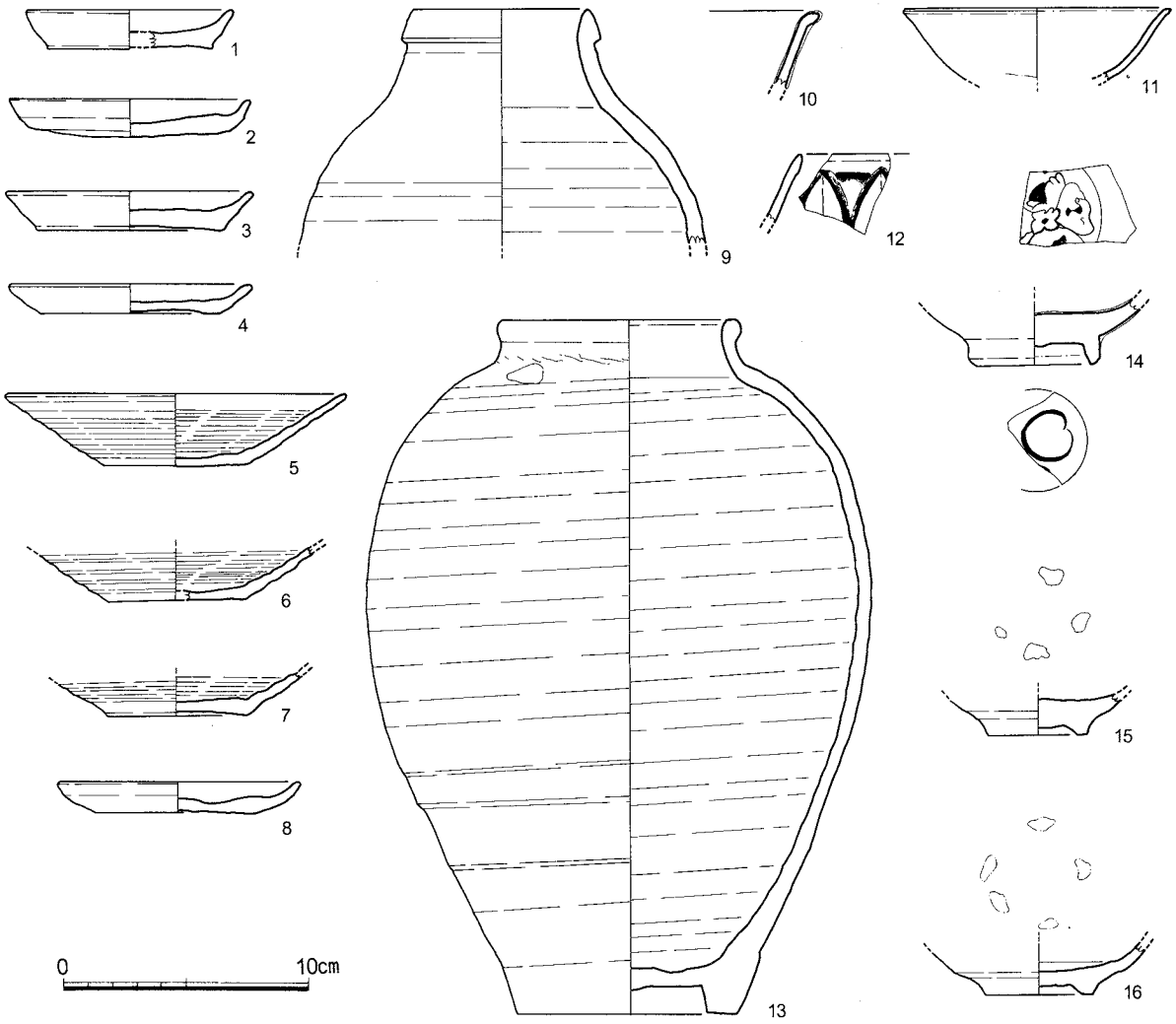


Fig. 10　溝出土遺物（1/3）

SD193

D～F－33～44で22m確認した東西方向の溝である。攪乱が多く、規模がつかみにくいが、幅1.5～2.3m、深さ0.3～0.4mである。攪乱に切られているが東側は SD194に接続すると思われる。SE197、SE204、SK222を切り、SK182、SK183、SD221、SK229、SK230、SK231に切られる。8は土師器の皿である。14は龍泉窯系青磁碗で見込みに印花文を施す。外底には朱で円を書く。15・16は李朝の粉青沙器である。内面に目跡がある。そのほか龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同安窯系青磁碗、白磁碗・皿、備前の擂鉢、糸切りの土師器坏・皿、瓦などが出土した。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD194

D・E－46・47で２m確認した東西方向の溝で、東側は発掘区外に伸びる。幅0.7m、深さ0.2mである。SK185に切られる。陶器の甕と瓦が出土した。攪乱に切られているが、SD193と同一の16世紀ごろの溝と考えられる。

（3）井戸

井戸は合計24基検出した。うち、6基が近世から近代にかけての井戸であり SE187をのぞけばすべて瓦組の円形井戸であった。SE187も瓦が抜き取られたものであろう。中世の井戸はⅡ・Ⅵ区とⅤ区に集中して発見された。井筒が確認できなかった SE73を除くとすべて円形の木桶を据えている。

SE73

I・J－7・8で検出した。南側は発掘区外に伸び、北側は攪乱を受けている。SE77を切る。径2.6mほどの円形の堀方である。井筒は確認できなかったが、土層より径1mほどの円形の井筒であったことがわかる。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系の青磁碗・皿、同安窯系の青磁碗、白磁碗・皿、瓦器椀などが出土している。17は高台付の土師器皿である。18は白磁平底皿である。19は龍泉窯系青磁の小鉢で、外面に鎬連弁文を施す。出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。

PL. 14　SE73（北から）

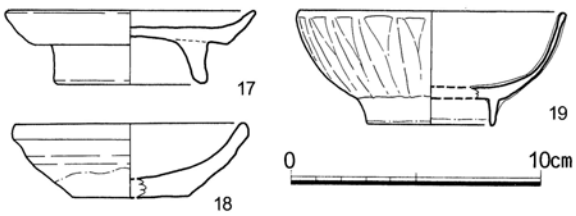
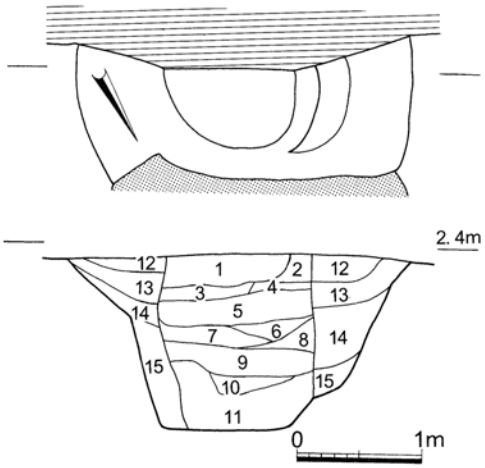


Fig. 12　SE73出土遺物（1/3）



1．暗褐色砂質土　焼土、炭化物を少量と茶褐色砂、拳大の礫を含む
2．茶褐色砂　黒褐色土含む
3．黒褐色砂質土　焼土、炭化物少量含む
4．灰暗褐色砂質土
5．灰褐色砂質土　焼土、炭化物を少量と茶褐色砂を含む
6．茶褐色砂　焼土、炭化物を少量と黒褐色土を含む
7．灰褐色砂質土　茶褐色砂含む
8．茶褐色砂　黒褐色土多く混入
9．暗褐色砂質土　焼土、炭化物少量と灰白色粘土ブロック含む
10．灰暗褐色砂質土　焼土、炭化物少量含む
11．暗茶褐色砂　黒褐色土含む
12．灰暗褐色砂質土
13．暗褐色土と茶褐色砂の互層
14．茶褐色砂　黒褐色土含む
15．暗茶褐色砂

Fig. 11　SE73（1/60）

SE77

H～J－8・9で検出した。南側は発掘区外に伸び、西側は攪乱を受ける。SK87、SK125を切り、SE73に切られる。径3mほどの円形の堀方に径50cmの円形の木桶を据える。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系の青磁碗、同安窯系の青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、瓦器椀などが出土している。20は井筒内から出土した高台付の土師器皿である。21は鎬連弁の龍泉窯系の青磁碗である。22は白磁碗Ⅳ類の底部で、高台内側に墨書があるが、破片のため判読できない。出土遺物から13世紀前半の井戸と考えられる。

PL. 15　SE77（北から）

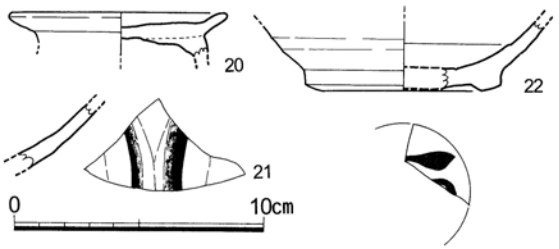


Fig. 14　SE77出土遺物（1/3）

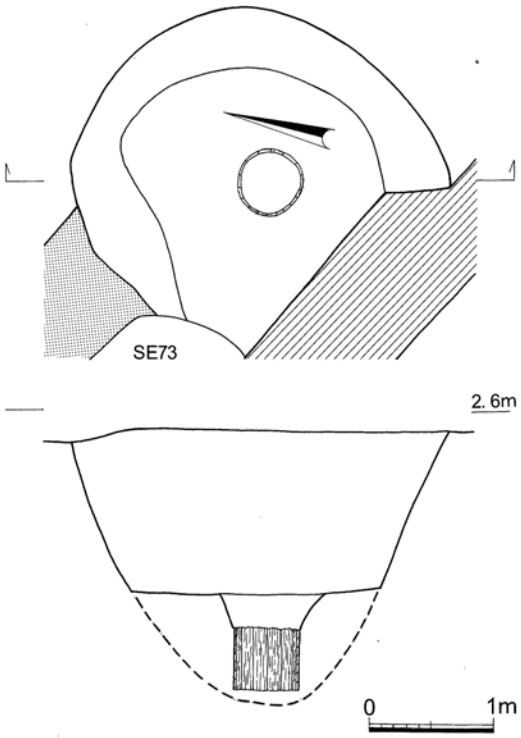
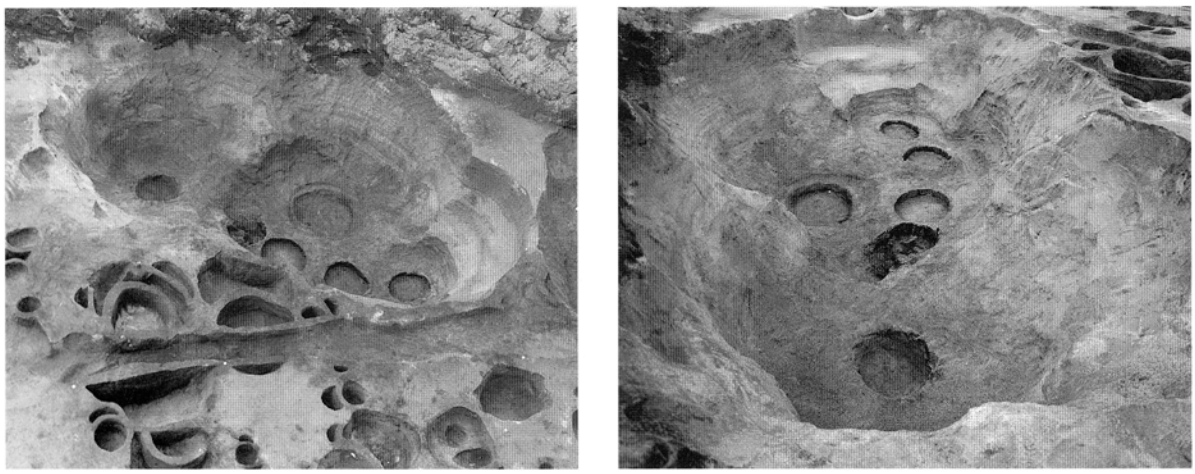


Fig. 13　SE77（1/60）

SE107・108・109・239・260・263

F～H－8～11で6基の井戸を検出した。この部分はⅡ区とⅥ区にわけて調査したところである。Ⅱ区調査時に SE107、SE108、SE109の3基を確認し、切り合いから SE107が一番新しく、SE109が一番古いということがわかった。この3基は北側に伸びるため、Ⅵ区調査で、残りを調査する予定であった。しかしⅥ区ではその場所に攪乱が広がり、その下から新たに SE239、SE260、SE263の3基の井戸が切り合って検出され、新旧関係が一部不明瞭になってしまった。新たに見つかった3基の切り合いは SE239が一番新しく、SE263が一番古い。また、SE239は SE109を切っている。さらにⅡ区調査時の土層の状況から、SE260より SE107のほうが新しいということが確認できる。

SE107は G・H－9・10に位置し、径3mほどの円形の堀方に径60cmの円形の木桶を据える。堀方の北側のプランは SE260、SE263と同時に掘り下げてしまったので不明である。糸切りの土師器坏・



PL. 16　SE107・108・109・239・260・263（左：北から・右：東から）

PL. 17　SE107（南から）

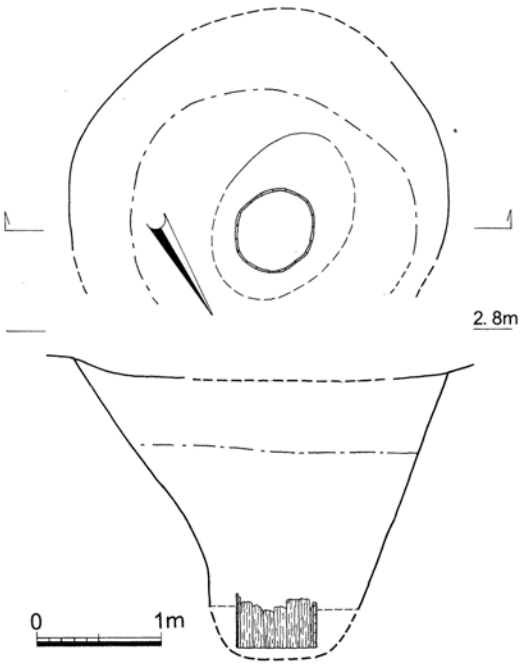


Fig. 15　SE107（1/60）

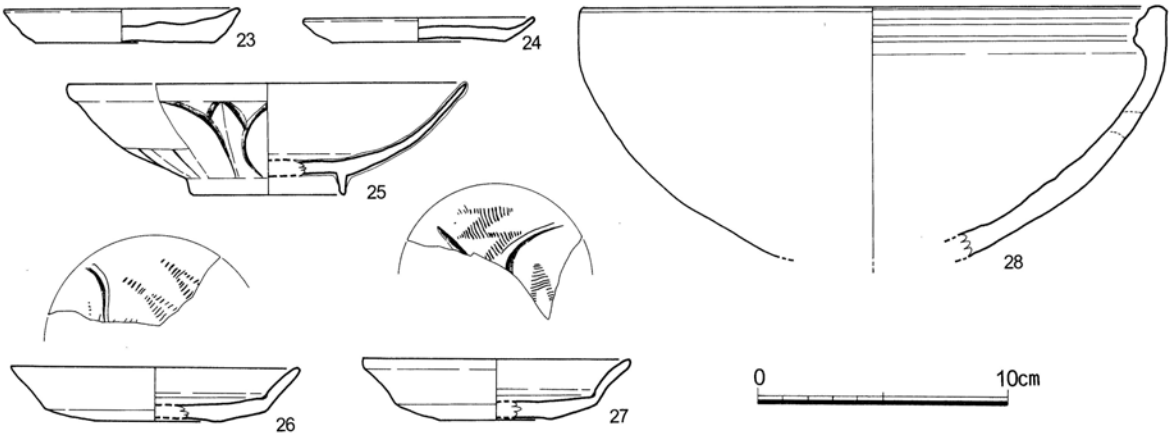


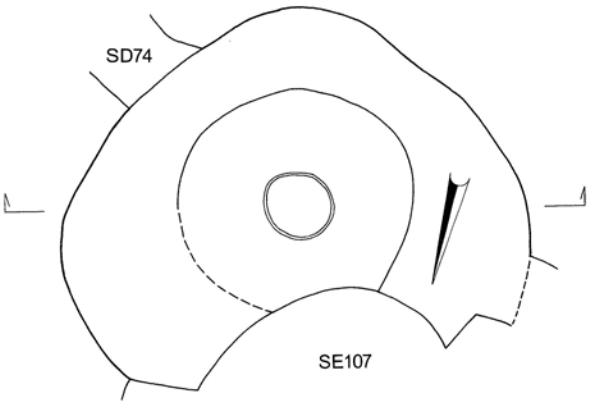
Fig. 16　SE107出土遺物（1/3）

皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、高麗青磁碗、白磁碗・皿、土鍋、石鍋などが出土している。23は井筒内から、24は堀方から出土した土師器の皿である。どちらも底部は糸切りで、24には板状圧痕がみられる。25は龍泉窯系青磁碗で外面に鎬連弁文を施す。井筒内出土。26・27は同安窯系青磁皿である。28は中国陶器C群の捏鉢である。内面は使用により摩耗している。出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。

SE108は G・H－9～11に位置する。径3.5mほどの円形の堀方の中央に径50cmの円形の木桶を据えている。桶の実測前に発掘区壁が崩落したので正確な記録が取れなかった。北側を SE107に、上部の一部を SD74に切られている。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、白磁碗、東播系の捏鉢、土鍋、瓦器椀、天目碗などが出土した。29は龍泉窯系青磁皿で内面に櫛描で花文を施す。30は東播系須恵器の捏鉢である。出土遺物から12世紀末葉から13世紀初頭の井戸と考えられる。

SE109は G・H－8・9に位置する。SE107、SE108、SE239に切られており、規模は明らかでないが、3～3.6mほどの円形の堀方で、径65cmの円形の木桶を据えている。SE108と同じく、桶の実測

PL. 18　SE108（上：南から・下：西から）



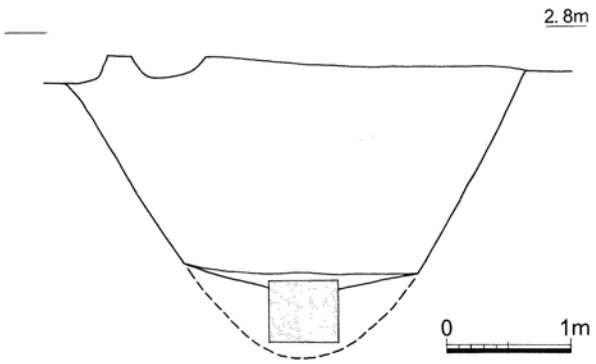
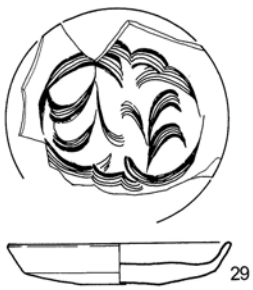


Fig. 17　SE108（1/60）



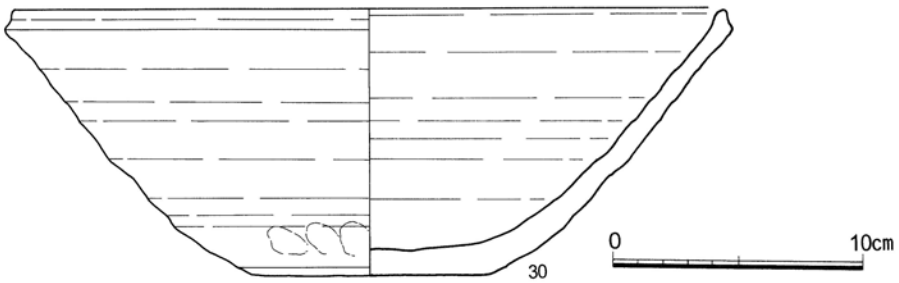
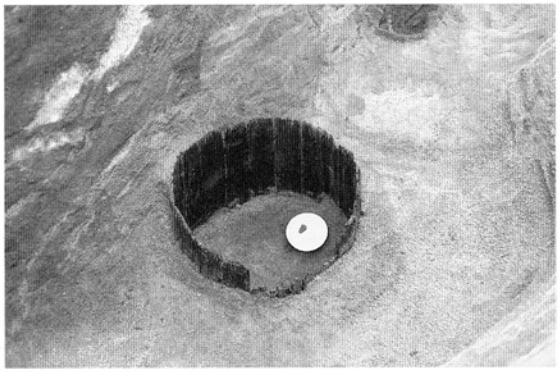


Fig. 18　SE108出土遺物（1/3）

前に発掘区壁が崩落したため、正確な記録が取れていない。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、高麗青磁碗、白磁碗、東播系須恵器の捏鉢、瓦器椀などが出土している。31は同安窯系青磁皿である。32は井筒内から出土した完形の白磁碗Ⅵ類でる。見込みは輪状に釉を掻き取る。高台の内側に３文字墨書があり、「一大（花押）」と読める。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE239は F・G－８・９に位置する。SE109、SE260を切る。長軸2.9mの楕円形の堀方に径60cmの円形の木桶を据えている。堀方の西側にはテラスを２段付ける。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、越州窯系青磁碗、白磁碗、白磁皿、土鍋、瓦器椀などが出土している。33は白磁碗の底部で、高台内側に墨書がある。「誌」と読める。34は白磁平底皿である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。



PL. 19　SE109（西から）

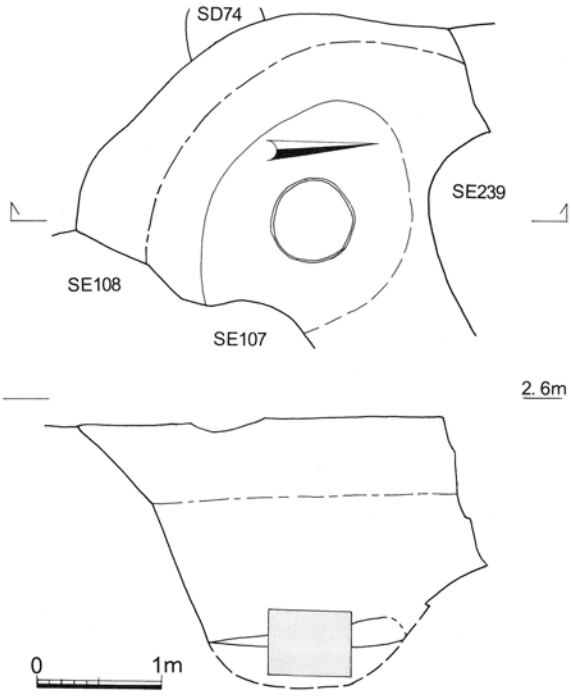


Fig. 19　SE109（1/60）

PL. 21　SE239（南から）

PL. 20　SE109出土遺物（約1/3）

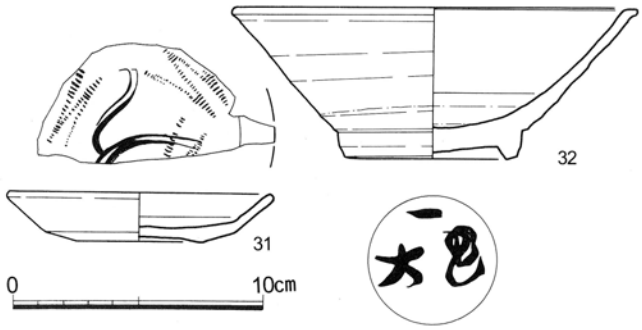


Fig. 20　SE109出土遺物（1/3）

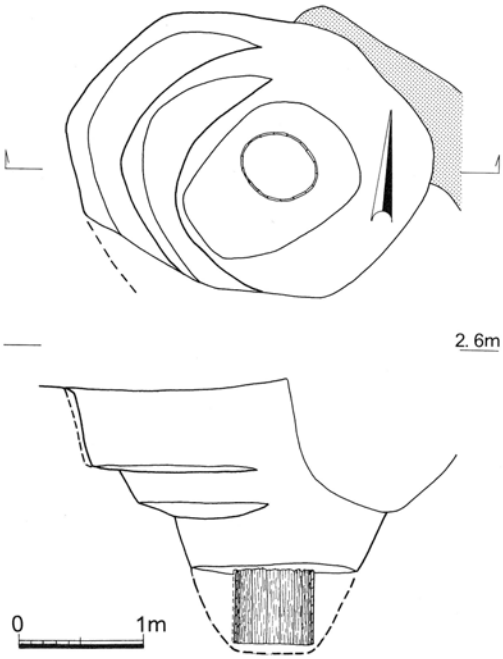


Fig. 21　SE239（1/60）

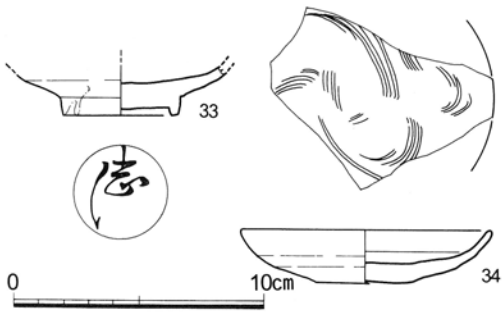


Fig. 22　SE239出土遺物（1/3）

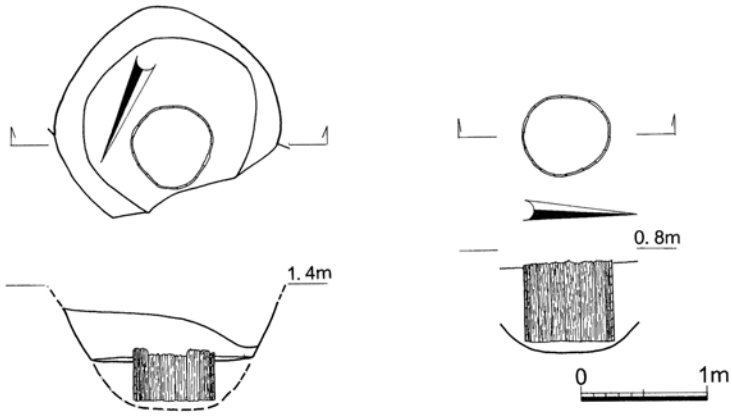


Fig. 23　SE260・263（1/60）

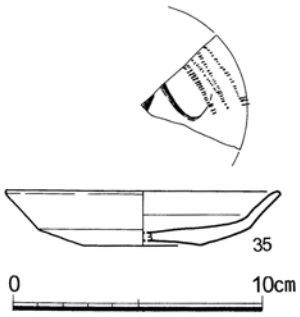


Fig. 24　SE260出土遺物（1/3）

SE260は F・G－9に位置する。SE263を切る。SE107、SE239に切られており、全容は明らかでない。径60cmの円形の木桶を井筒とする。糸切りの土師器坏・皿、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、土鍋、瓦器椀などが出土した。35は同安窯系青磁皿である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE263は G－9・10に位置する。SE107、SE260に切られ、井筒しか検出できなかった。井筒は径65cmの円形の木桶である。陶器片が出土したのみで時期ははっきりしないが、12世紀の井戸であろう。

SE156

C・D－22～24で検出した。北側は近世の井戸 SE135に切られる。径3mほどの円形の堀方に、径70cmの円形の木桶を井筒に据える。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗・皿、青白磁合子身、瓦器椀などが出土した。36は堀方から出土した青白磁合子身である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

PL. 22　SE156（北から）

Fig. 26　SE156出土遺物（1/3）

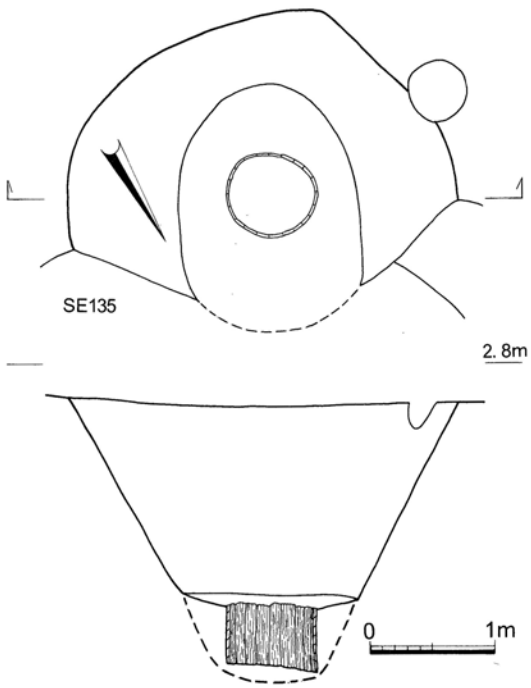


Fig25　SE156（1/60）

PL. 23　SE180（東から）

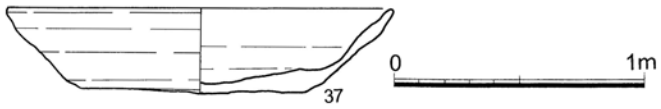


Fig. 28　SE180出土遺物（1/3）

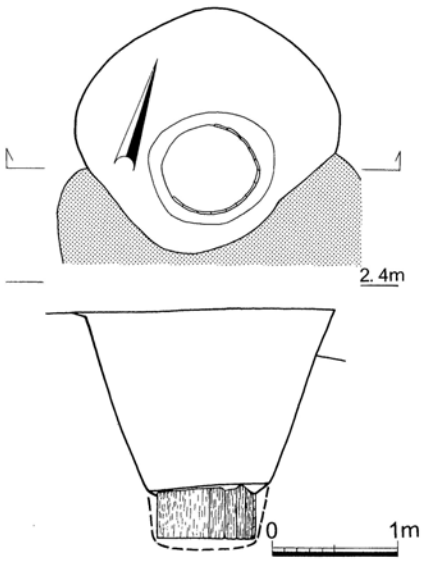


Fig. 27　SE180（1/60）

SE180

C・D−43・44に位置する。南側は攪乱を受けており、堀方径は不明であるが、推定径2.5mの円形であろう。井筒は西側は残っていなかったが、径70cmの木桶を据えている。糸切りの土師器坏・皿、青磁碗、白磁碗・皿、土鍋、瓦器椀などが出土した。37は土師器坏である。底部は糸切りで、簾状圧痕がつく。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE196・202・203

C・D−40〜42に位置する。北側は近代の井戸 SE175・176・187に切られる。長軸4.2m以上の楕円形の堀方に3基の井筒を据えている。東から196・202・203である。井筒はいずれも木桶で、SE196が径50cm、SE202が径60cm、SE203は残りが悪いが径55cmである。糸切りの土師器坏・皿、中国陶器A群の盤、白磁碗、

PL. 24　SE196・202・203（北から）

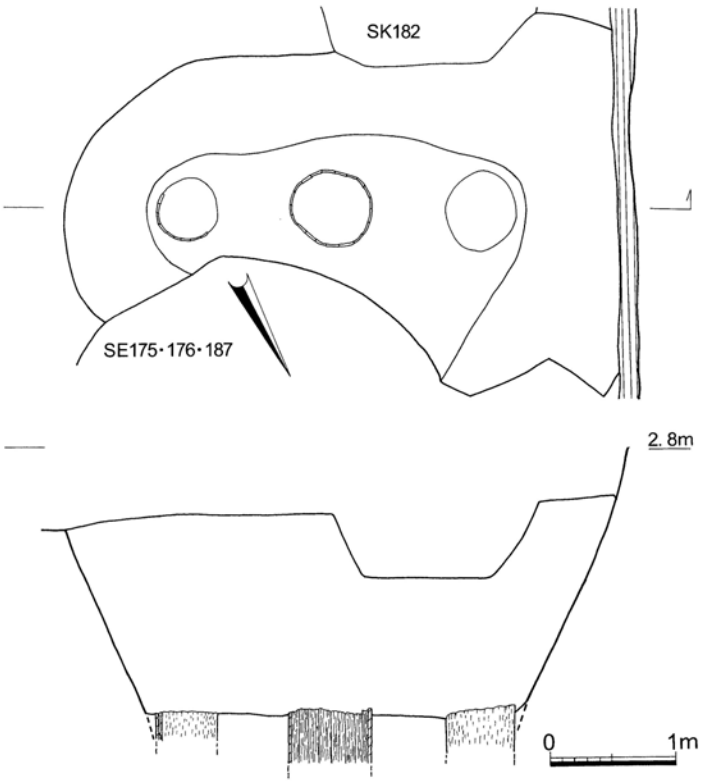


Fig. 29　SE196・202・203（1/60）

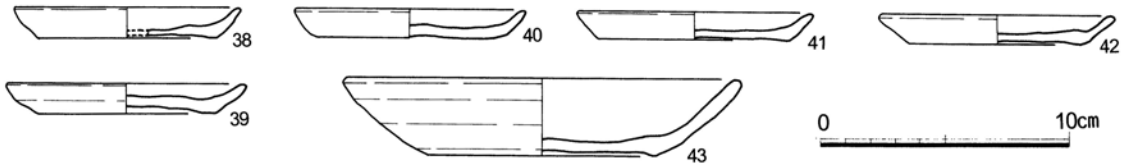
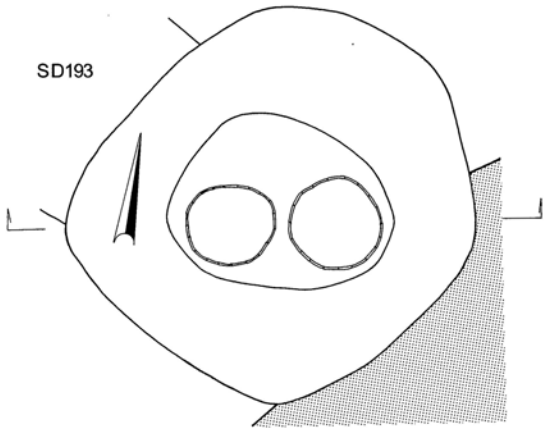


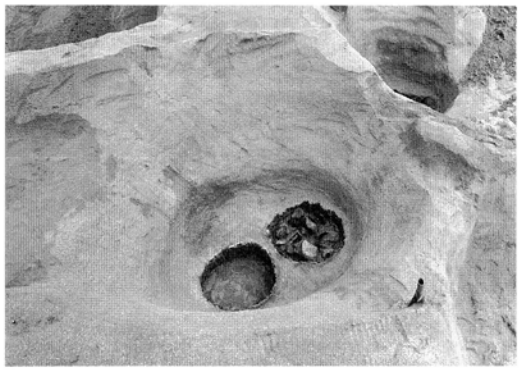
Fig. 30　SE196・202出土遺物（1/3）

土鍋、瓦器椀などが出土している。38～42は土師器の皿である。38・39が SE196の井筒出土、40～42が SE202の井筒出土である。43は SE202の井筒出土の土師器の坏である。出土遺物から12世紀前半の井戸と考えられる。

SE197・204

D・E－42～44に位置する。東側は攪乱を受ける。3.3mほどの円形の堀方に径60cmと70cmの円形の木桶を２つ据える。東が SE197、西が SE204である。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、土鍋、瓦器椀などが出土した。44は堀方から出土した土師器の皿、46は SE197の井筒から出土した土師器の坏、45・47は SE204の井筒から出土した土師器の皿と坏である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。





PL. 25　SE197・204（南から）

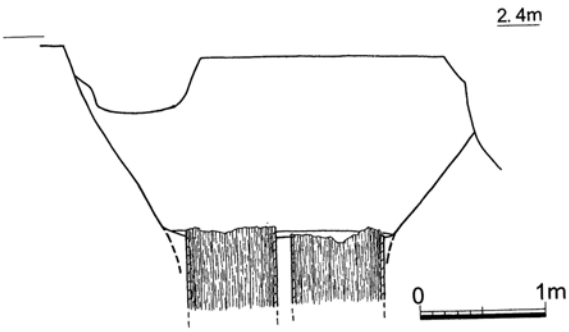


Fig. 31　SE197・204（1/60）

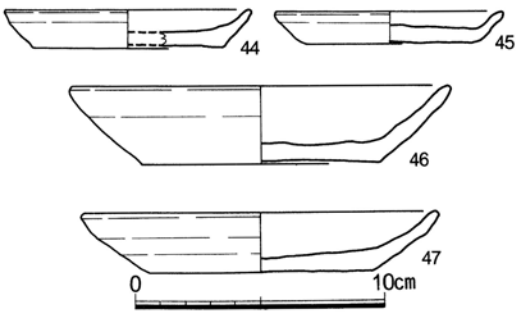


Fig. 32　SE197・204出土遺物（1/3）

SE198・205

G・H－41～43に位置する。東側は SK188に切られる。東が SE198、西が SE205である。井筒は円形の木桶で SE198が径60cm、SE205が50cmである。SE205の井筒底は礫が充填されていた。48は SE205堀方出土の同安窯系青磁皿で、底部に墨書がある。SE198から糸切りの土師器坏、青磁皿、白磁碗、口禿の白磁など、SE205から糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯青磁碗、同安窯青磁皿、白磁碗などが出土した。同時に掘り下げてしまったが、SE198が13世紀後半、SE205が12世紀後半の井戸と考えられる。

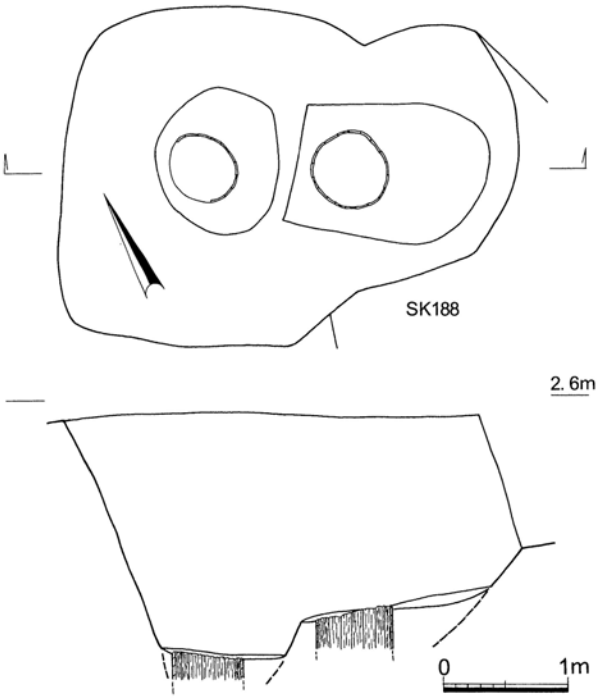
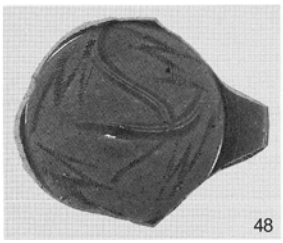
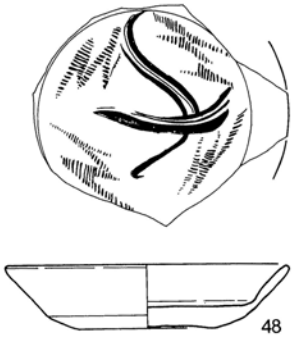


Fig. 33　SE198・205（1/60）

PL. 26　SE198・205（南から）



PL. 27　SE205出土遺物
（約1/3）



SE235

I−33・34に位置する。南側は発掘区外に伸びる。配水管が横切るために途中までしか調査できず、井筒は不明である。径3.3mの円形の堀方である。土師器皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗が出土している。49は土師器の皿である。底部は糸切りである。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

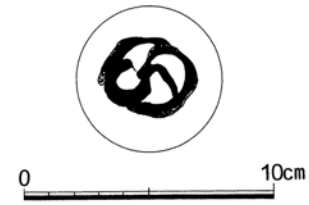


Fig. 34　SE205
出土遺物（1/3）

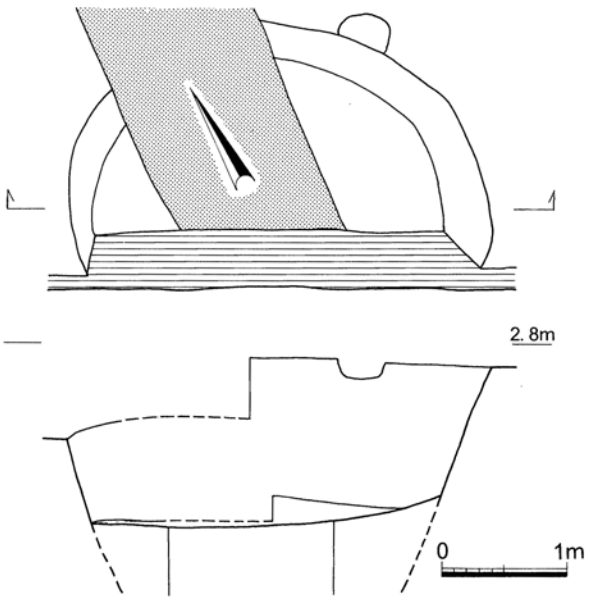


Fig. 35　SE235（1/60）

PL. 28　SE235（南から）

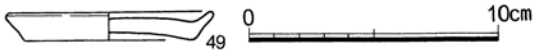


Fig. 36　SE235出土遺物（1/3）

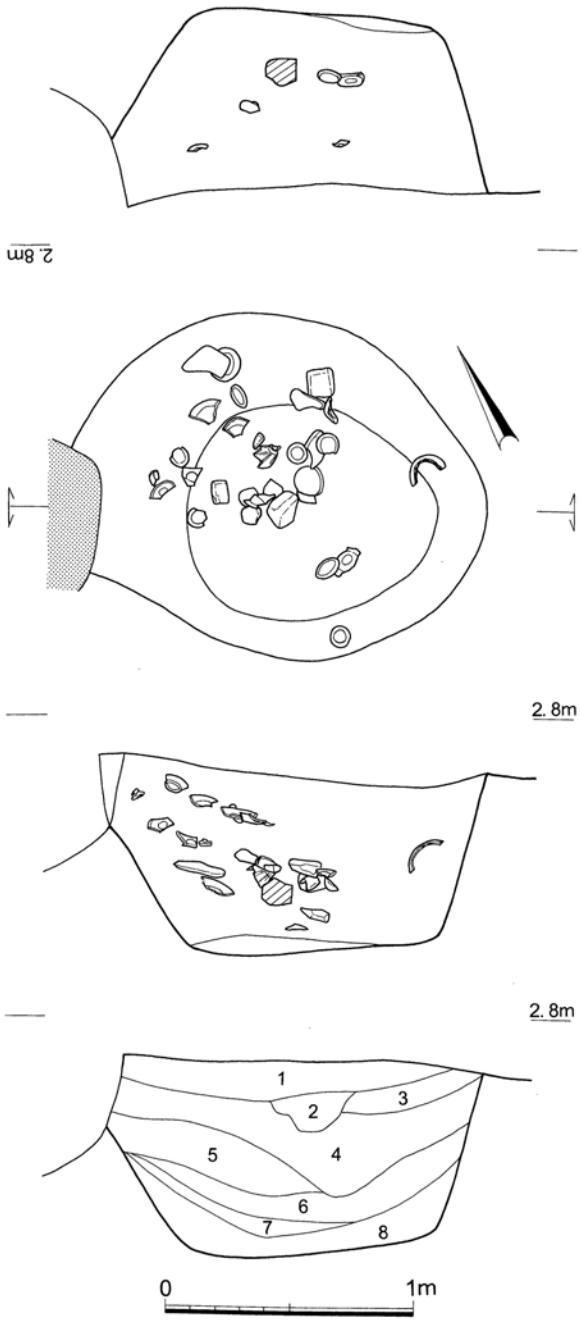
（4）土坑

土坑は222基検出した。調査区西側に密に分布する。12世紀から13世紀と近世以降の時期がほとんどである。西側に12世紀から13世紀の土坑が多く、近世以降の土坑は A～J－22より東に限られる。

SK01

H－3に位置する長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.8mの楕円形土坑である。SK06、SK16、SK22を切る。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・水注、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、土鍋などのほか、鋳型、取瓶といった鋳造関連の遺物が出土している。50～65は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。55・62・65を除いて板状圧痕がつく。口径は8.5cm～10.4cmで平均9.3cm、器高は1.2cm～1.6cmで平均1.3cmである。66～77は土師器の坏で、すべて底部糸切

PL. 29　SK01（上：南から・下：北から）



1．暗褐色砂質土　炭化物、焼土ブロック多量含む
2．暗褐色砂質土　1より暗い　炭化物、焼土含む
3．灰褐色砂質土　炭化物、焼土含む
4．黒色土　炭化物、暗灰白色粘土ブロック含む
5．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土含む
6．暗茶褐色砂
7．黒色土　炭化物を多くと灰白色粘土ブロックを含む
8．暗茶褐色砂

Fig. 37　SK01（1/30）

りである。74を除いて板状圧痕がつく。口径は14.6cm～16.5cmで平均15.6cm、器高は2.6cm～3.5cmで平均3.2cmである。78は土師器の高台付皿、79は土師器の高台付坏である。80は青白磁合子蓋である。81・82は同安窯系青磁皿で81は外底部の釉を掻き取る。82は底部外面下半は露胎である。83～86は同安窯系青磁碗で外面下半は露胎である。86は小ぶりの碗で、青みがかった灰白色の釉がかかる。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

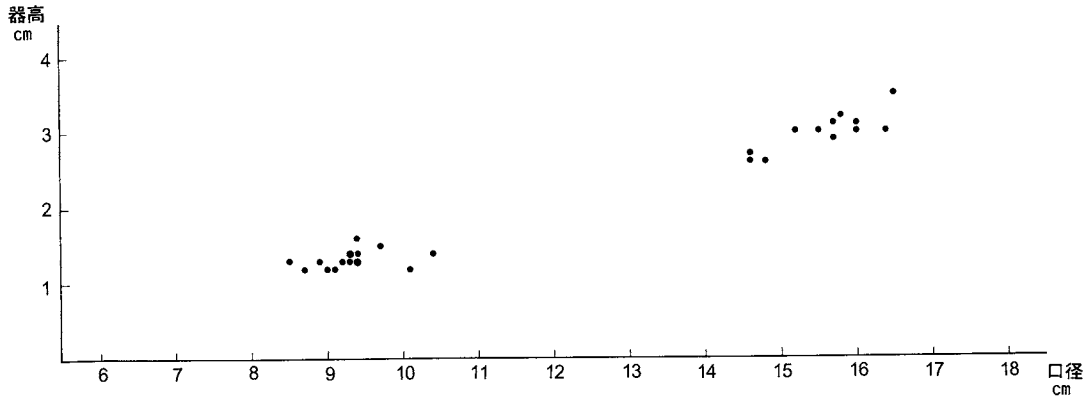


Fig. 38　SK01出土土師器法量グラフ

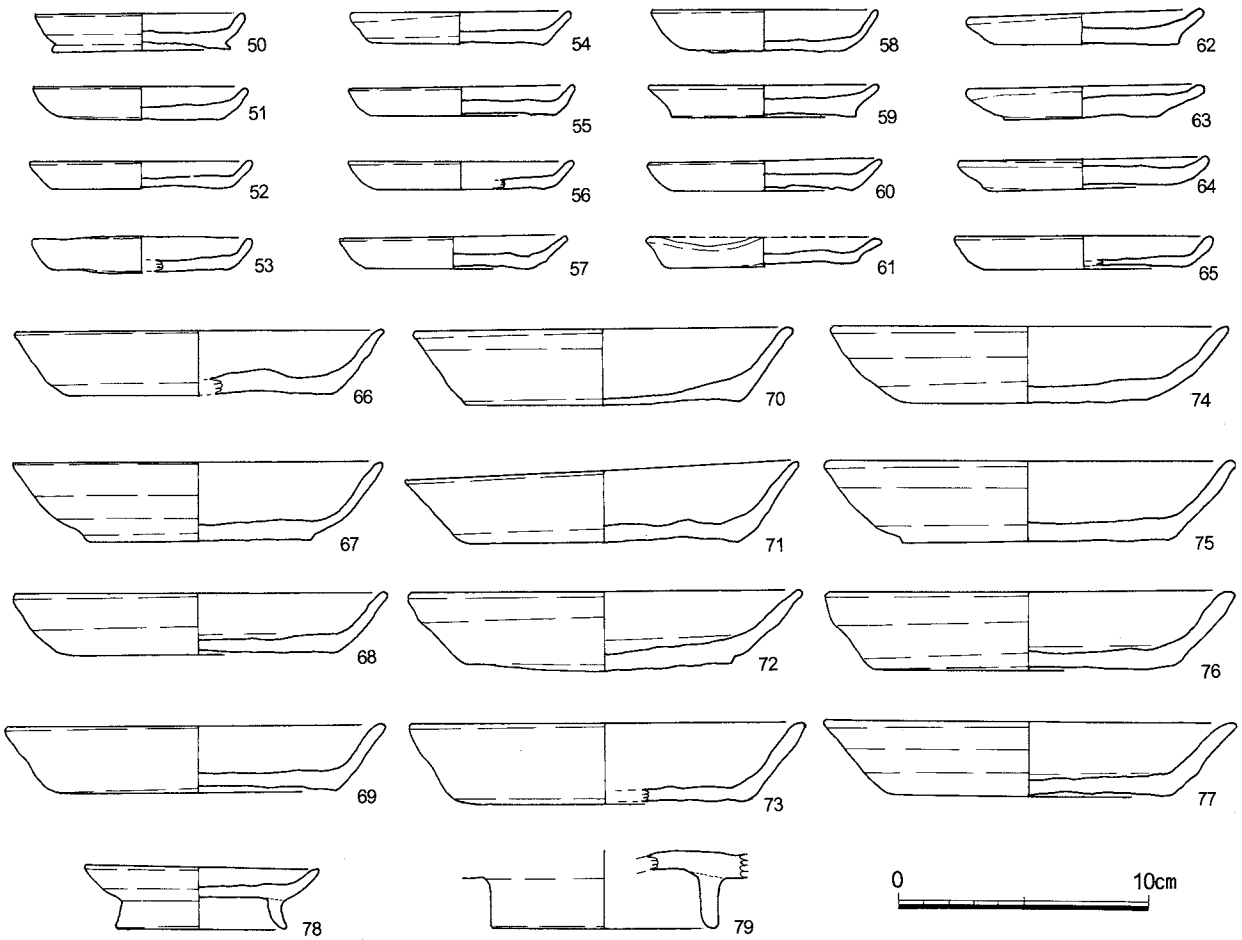


Fig. 39　SK01出土遺物　1　(1/3)

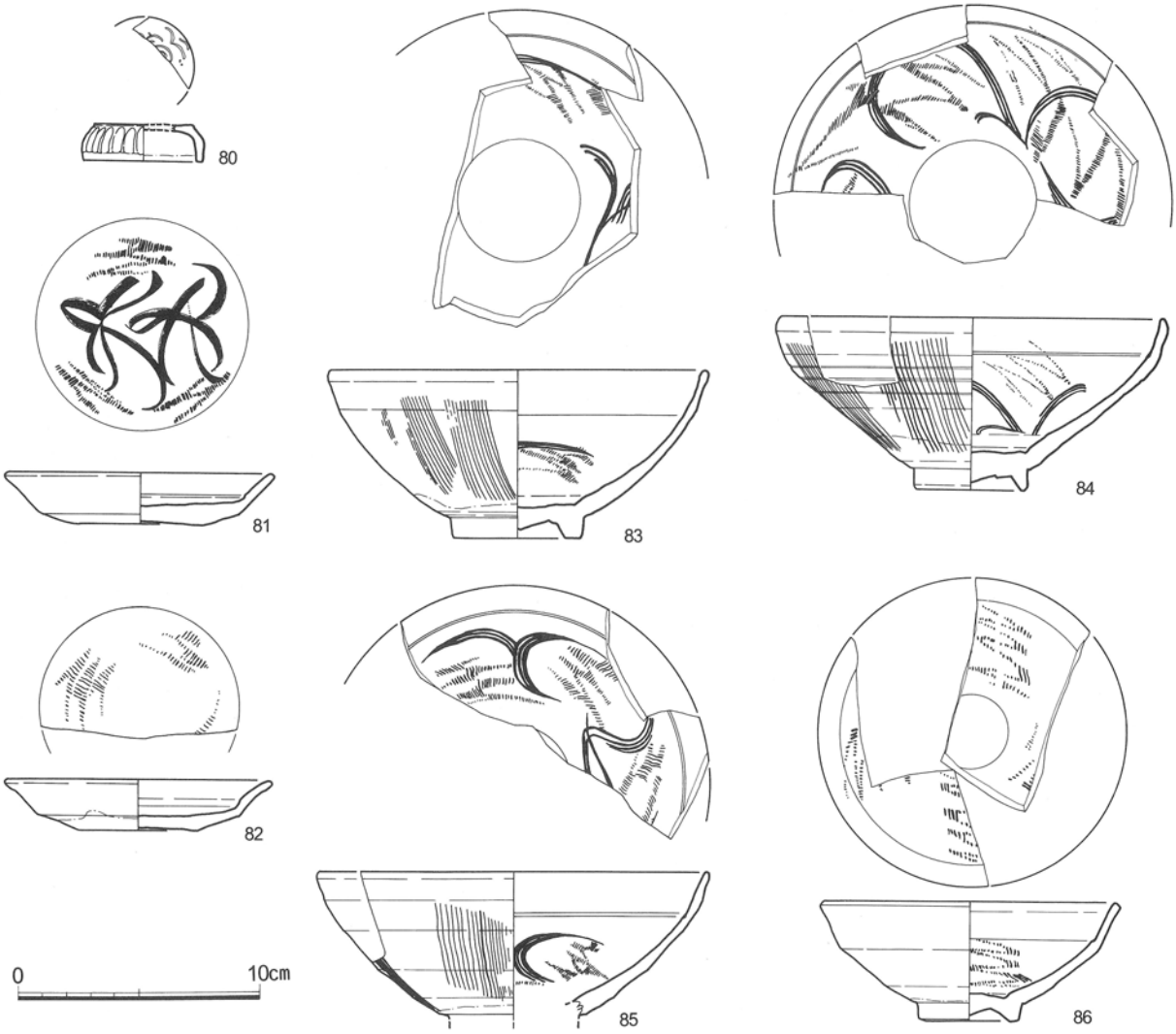
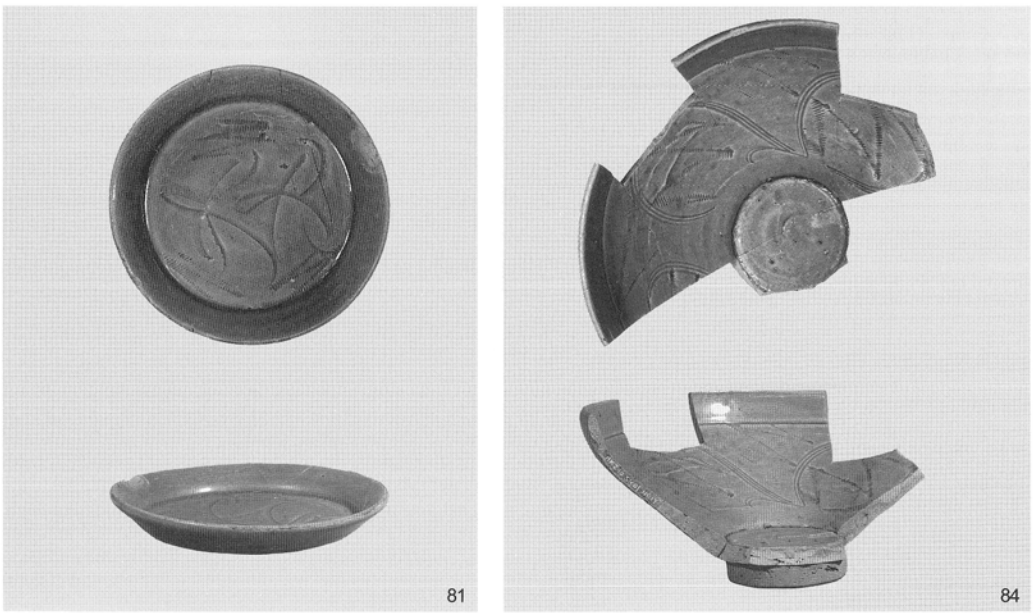


Fig. 40　SK01出土遺物　2　(1/3)



PL. 30　SK01出土遺物（約1/3）

SK02

H・I－１・２に位置する長軸2.0m、短軸1.4m、深さ0.9mの楕円形土坑である。SK07、SK52、SK68、SK69を切り、SK06、SK67に切られる。多量の完形に近い土器・陶磁器が廃棄されていた。土師

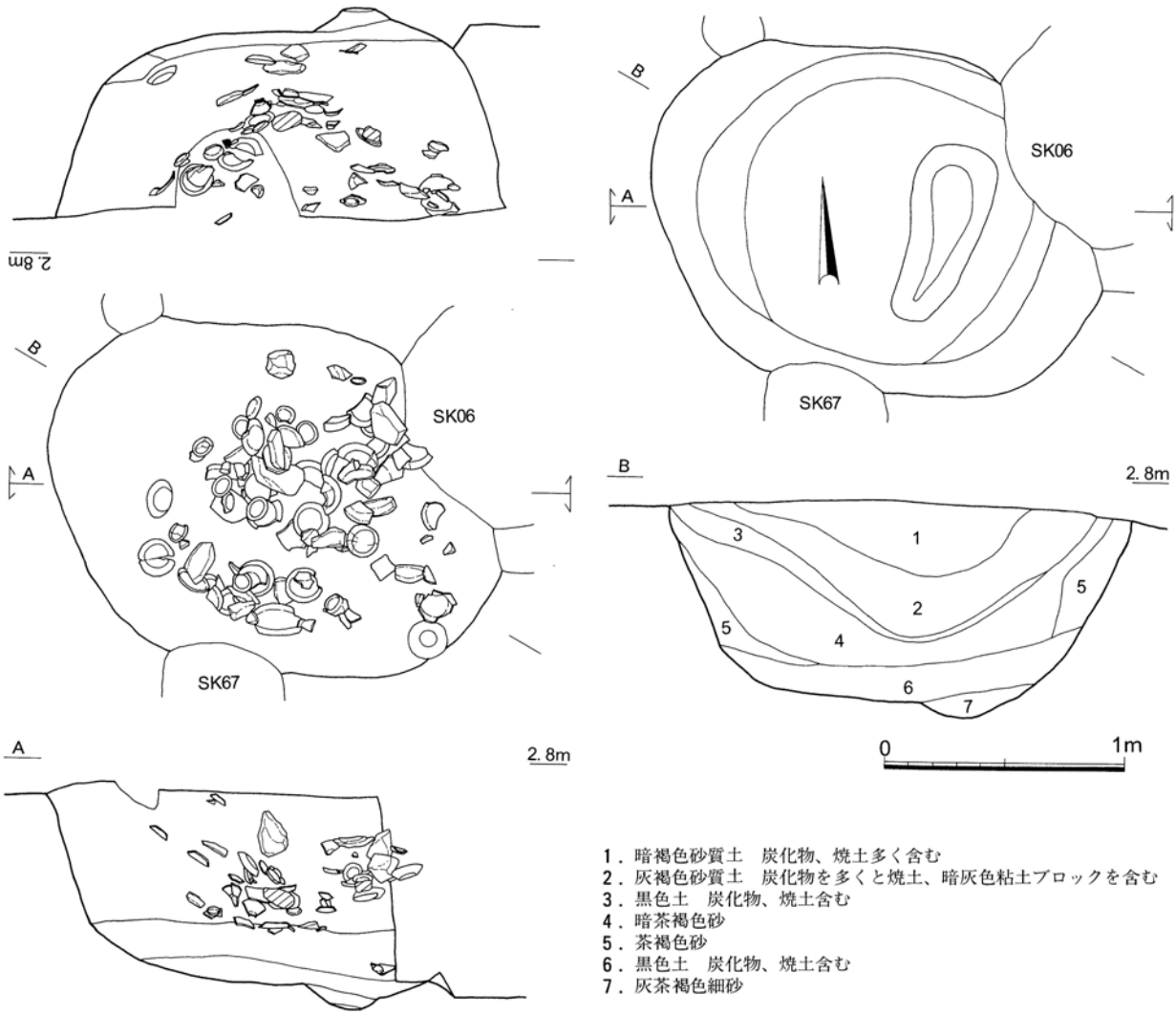
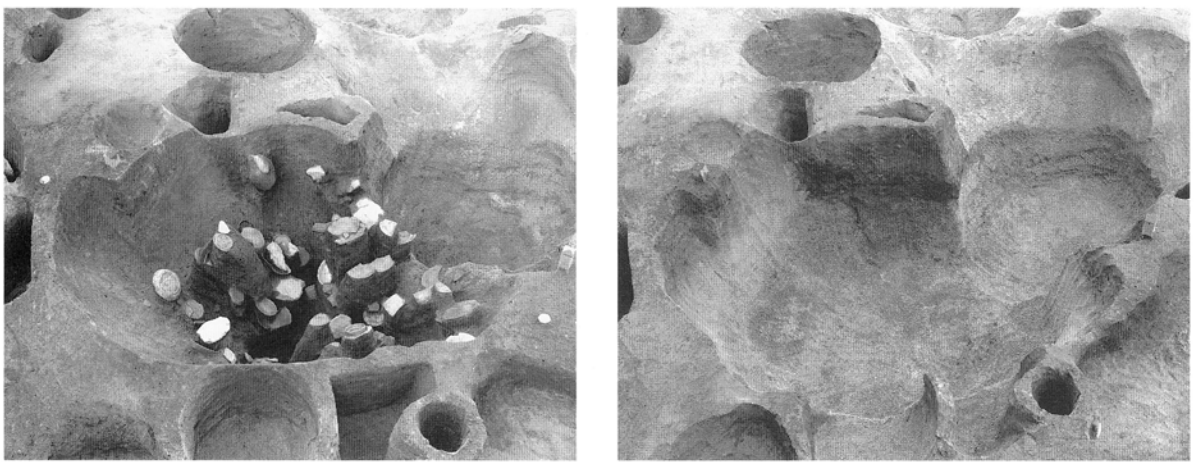


Fig. 41　SK02（1/30）



PL. 31　SK02（南から）

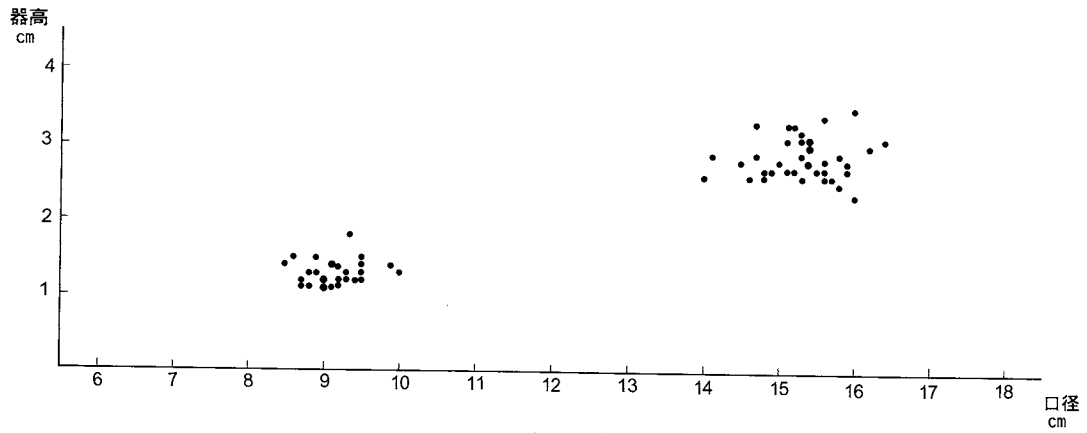


Fig. 42　SK02出土土師器法量グラフ

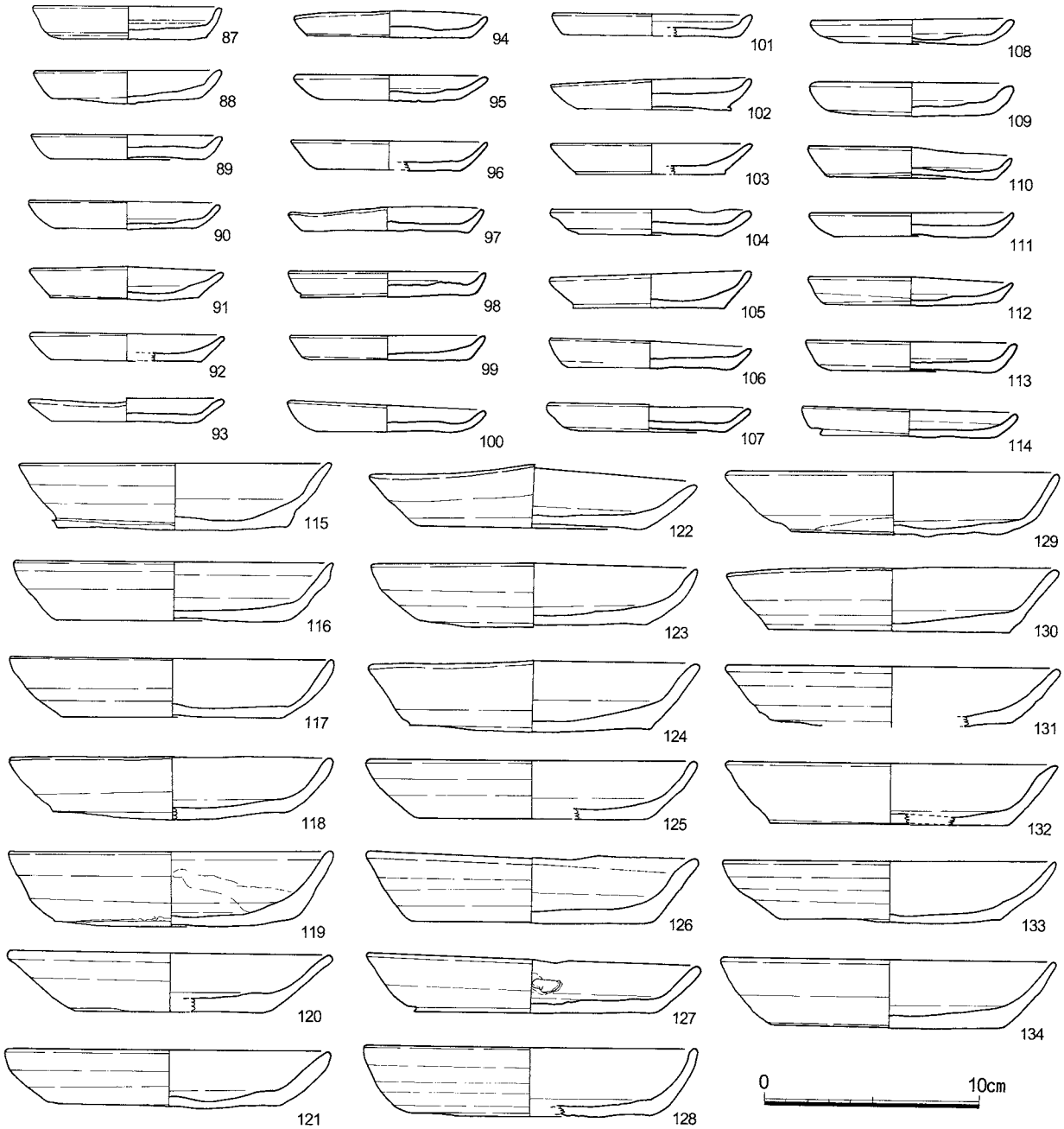
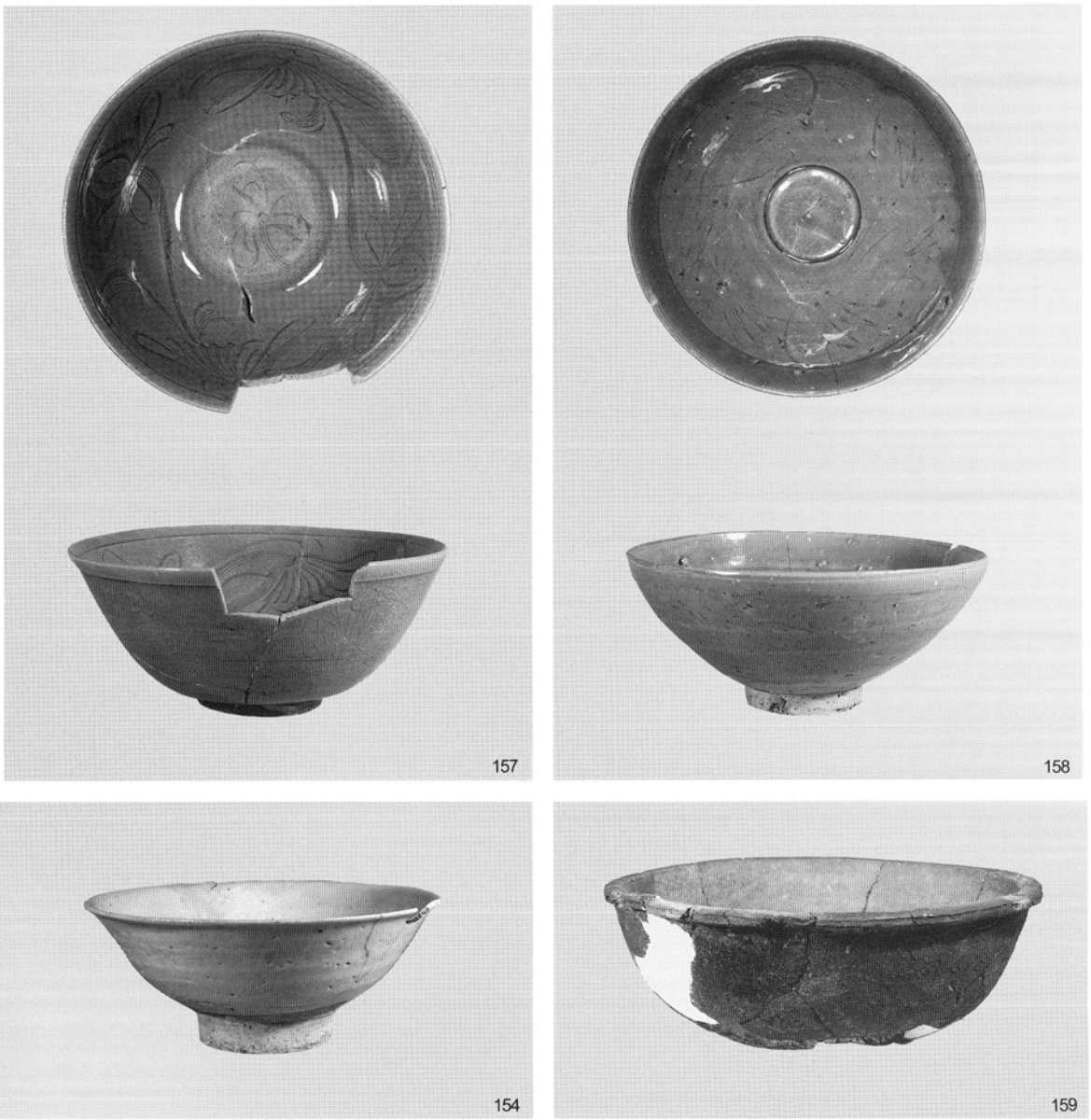


Fig. 43　SK02出土遺物　1　(1/3)

器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗・高台付皿、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、土鍋、砥石などのほか、鋳型、取瓶、炉壁といった鋳造関連の遺物が出土している。87～114は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。103を除いて板状圧痕がつく。口径は8.5cm～10.0cmで平均9.8cm、器高は1.1cm～1.8cmで平均1.4cmである。115～149は土師器の坏で、すべて底部糸切りである。115・121・147・149を除いて板状圧痕がつく。121には簾状圧痕がつく。口径は14.0cm～16.2cmで平均15.7cm、器高は2.5cm～3.5cmで平均2.9cmである。150・151は土師器の高台付坏である。152は青白磁合子身である。153は高台付白磁皿である。154・155は白磁碗である。154の高台内側にはかすかに墨書が見られ、「誌」と読める。口縁をわずかに欠く。156・157は龍泉窯系青磁碗である。157は口縁を一部欠くが接合してほぼ完形まで復元できた。158は同安窯系青磁碗である。接合して完形になった。159は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 32　SK02出土遺物（159：約1/5・他：約1/3）

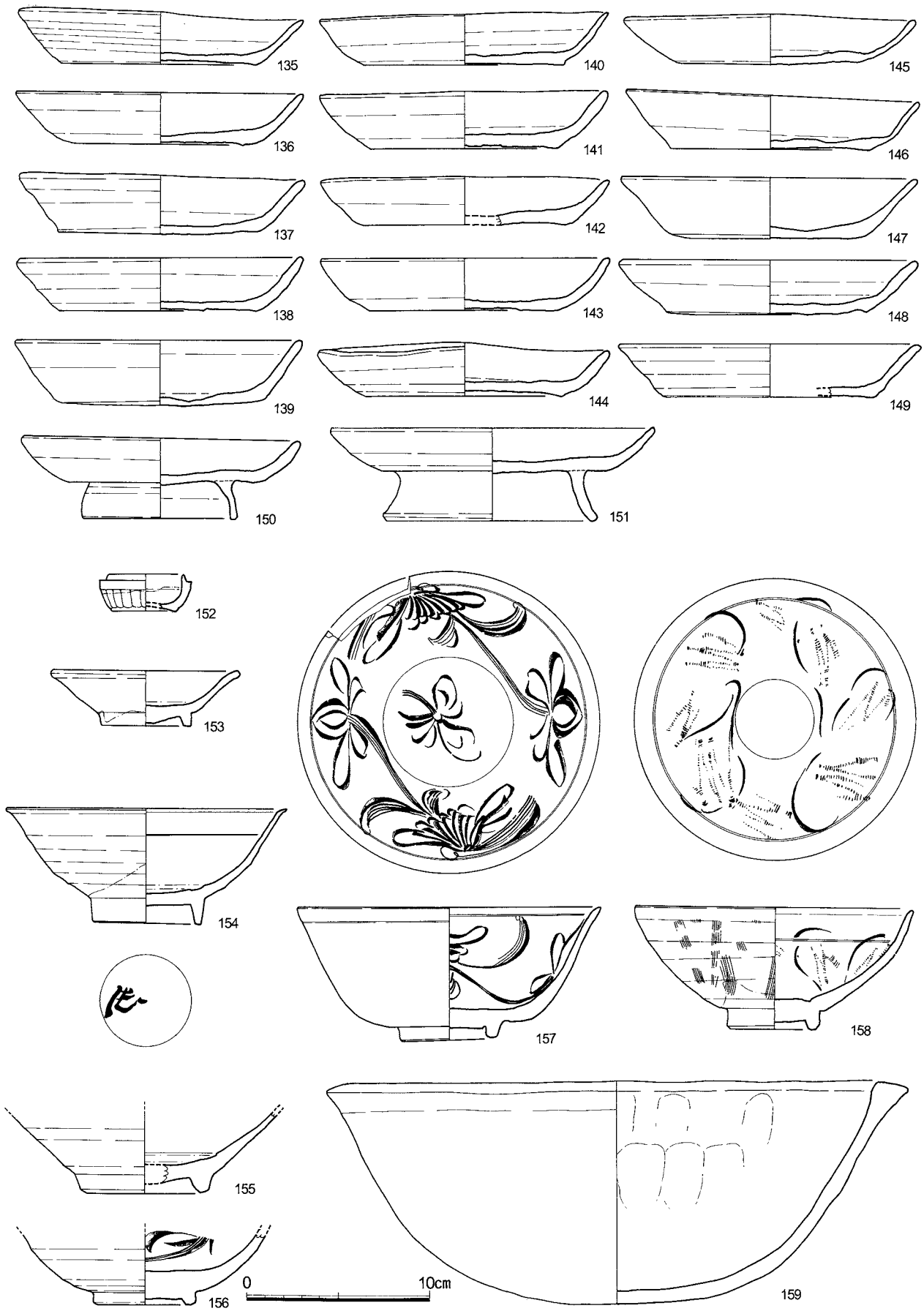
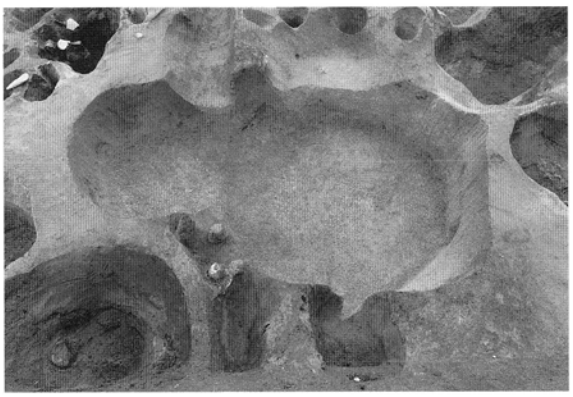


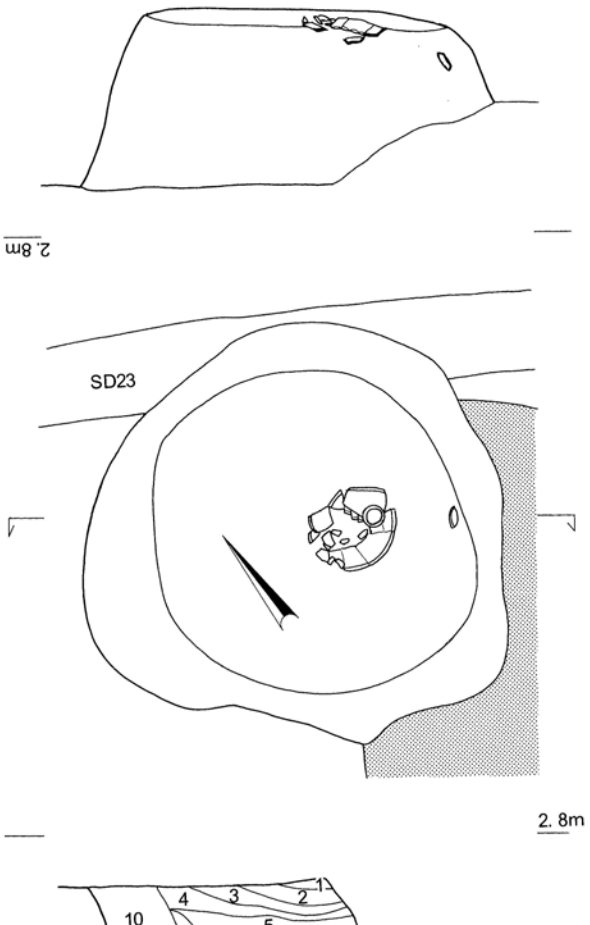
Fig. 44　SK02出土遺物　2　(1/3)

SK04

G・H－１・２に位置する径1.7m、深さ0.7mの円形土坑である。東側上部は攪乱を受ける。SK46を切り、SD23に切られる。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・皿、中国陶器Ａ群の盤、Ｂ群の四耳壺、土鍋などのほか、鋳型、取瓶、炉壁といった鋳造関連の遺物が出土している。160～167は土師器の皿で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径は9.0～10.0cmで平均9.3cm、器高は1.0～1.7cmで平均1.3cmで



PL. 33　SK04（上：南から・下：西から）



1．灰褐色土
2．暗褐色砂質土　炭化物、焼土含む
3．暗茶褐色砂
4．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土含む
5．暗茶褐色砂
6．暗灰褐色砂質土　４より暗い　炭化物、焼土多く含む
7．暗褐色砂質土　炭化物、焼土多く含む
8．暗褐色砂質土　炭化物多く含む
9．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土、黄灰色粘土ブロック含む
10．黄褐色砂
11．暗褐色砂質土　炭化物含む
12．灰褐色砂質土

Fig. 45　SK04（1/30）

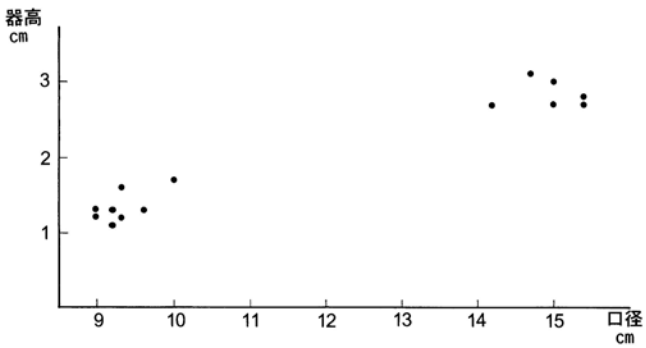
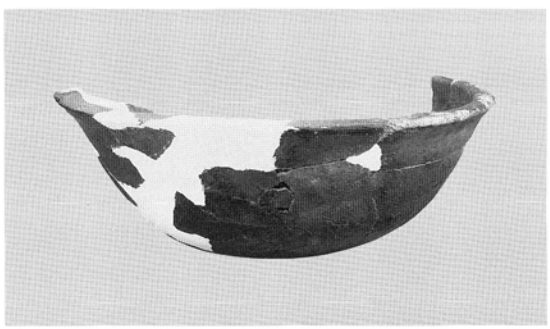


Fig. 46　SK04出土土師器法量グラフ



PL. 34　SK04出土遺物（約1/5）

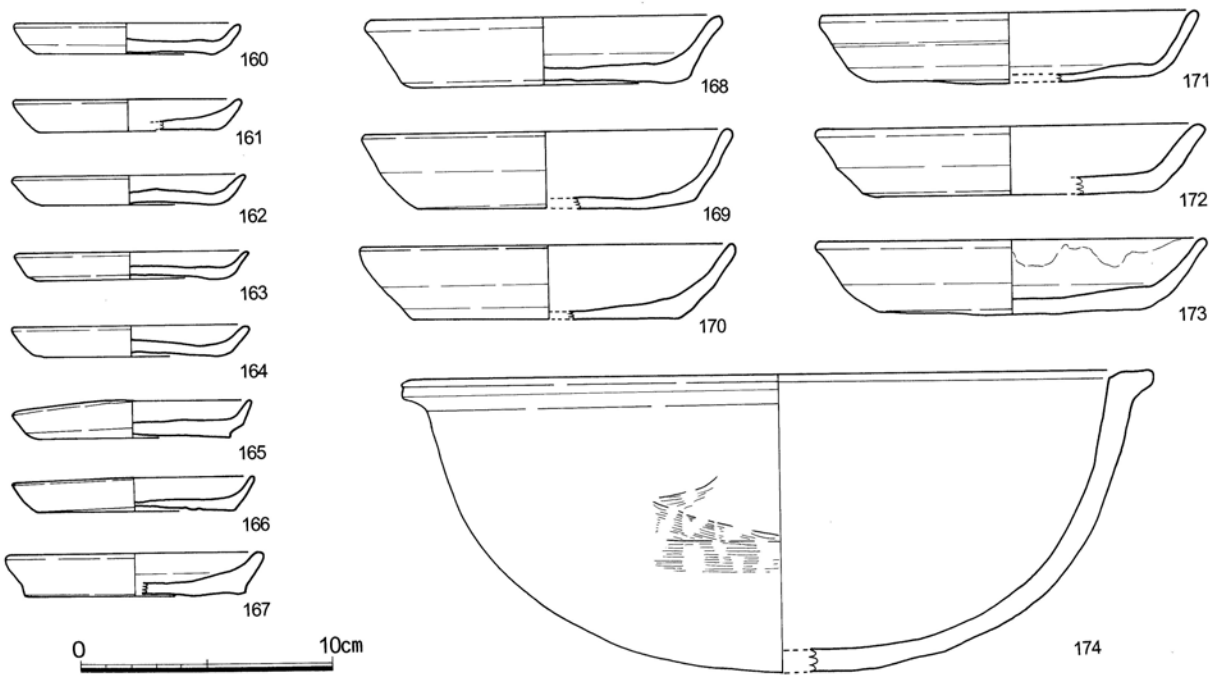


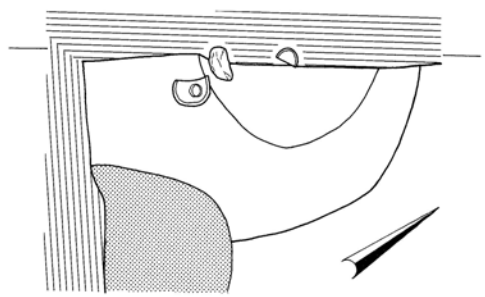
Fig. 47　SK04出土遺物（1/3）

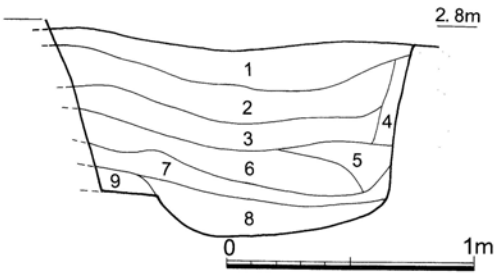
ある。168～173は土師器の坏で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径は14.2～15.4cmで平均14.9cm、器高は2.7～3.1cmで平均2.9cmである。174は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SK05

I・J－1に位置する。西側と南側は発掘区外に伸び、規模不明であるが円形土坑であろう。深さ0.8mを測る。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・皿、土鍋などが出土した。175

PL. 35　SK05（東から）





1．暗褐色砂質土　砂粒粗い　炭化物を多くと焼土を含む
2．暗灰褐色砂質土　炭化物、暗黄白色粘土ブロックを多くと、焼土を含む
3．暗褐色砂質土　炭化物を多くと焼土を含む
4．暗褐色砂質土　砂粒粗い
5．暗灰褐色砂質土　2より暗い　炭化物、暗黄白色粘土ブロック含む
6．暗褐色砂質土　炭化物、焼土、茶褐色砂含む
7．暗灰褐色砂質土　5より暗い　炭化物、焼土含む
8．暗褐色砂質土　炭化物、焼土、灰色粘土ブロック含む
9．暗灰色砂

Fig. 48　SK05（1/30）

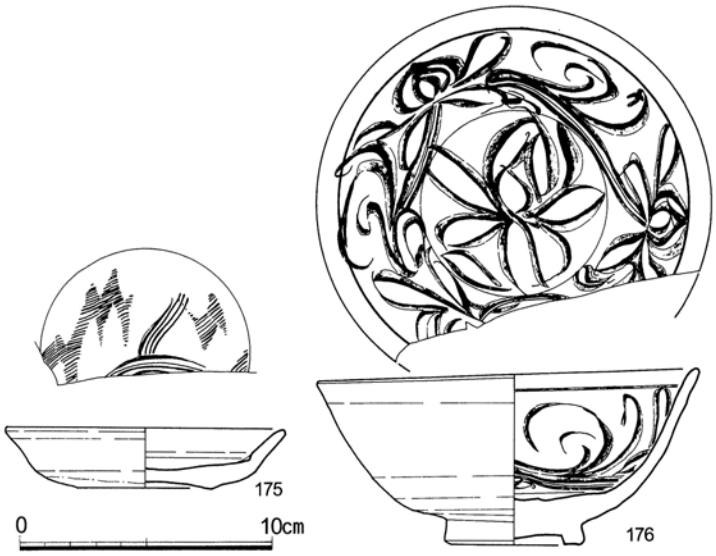


Fig. 49　SK05出土遺物（1/3）

PL. 36　SK05出土遺物（約1/3）

は同安窯系青磁皿である。底部下半露胎である。176は龍泉窯系青磁碗である。内面に深い片切彫りで蓮花文を描く。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SK06

H・I－2・3に位置する。北側上部に攪乱を受けるが、残存部で長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.9mの楕円形土坑である。SK02、SK16、SK56を切り、SK01に切られる。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗、中国陶器A群の盤、東播系須恵器の捏鉢、瓦器椀、砥石などのほか、鋳型、取瓶、鞴の羽口、炉壁といった鋳造関連の遺物が出土している。177～189は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。186を除いて板状圧痕がつく。口径は8.2～10.6cmで平均9.1cm、器高は0.9～1.4cmで平均1.2cmである。190～193は土師器の坏で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。190・191と192・193の大小2種類ある。小さい方の口径は14.4～14.6cm、器高は3.0cmである。 大きい方の口径は15.6～15.7cm、器高は2.6～2.8cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

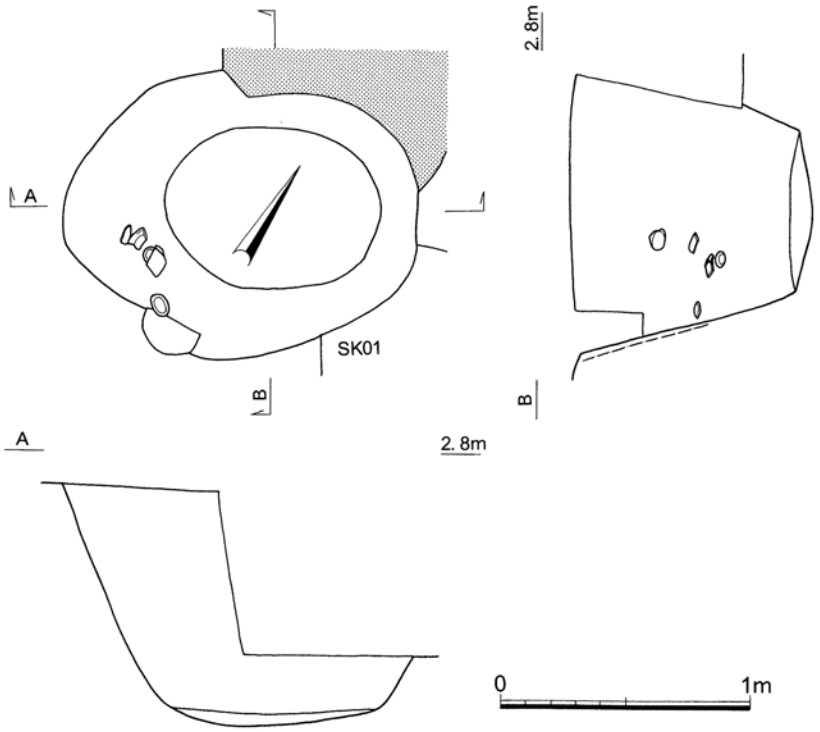


Fig. 50　SK06（1/30）

PL. 37　SK06（北から）

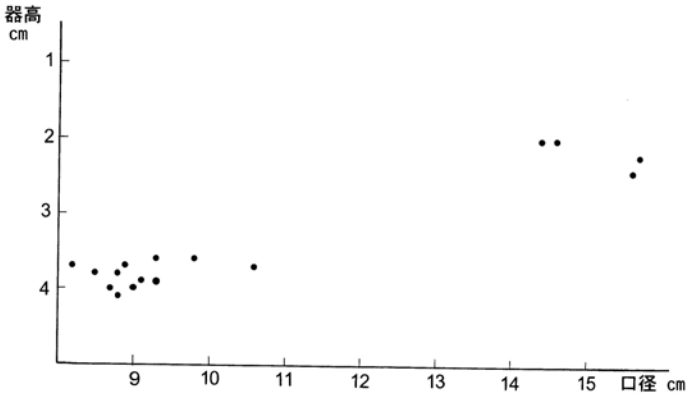


Fig. 51　SK06出土土師器法量グラフ

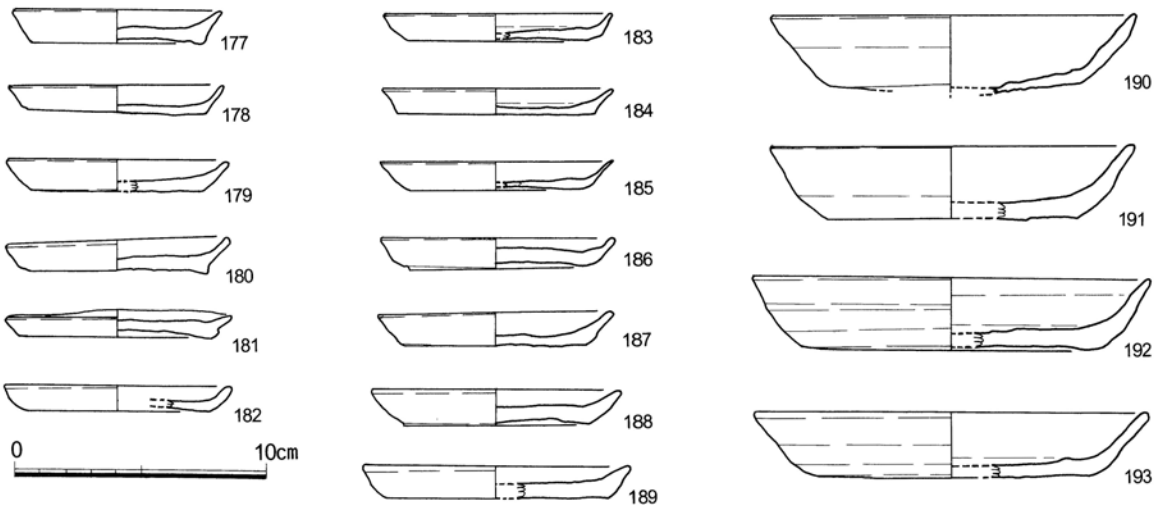
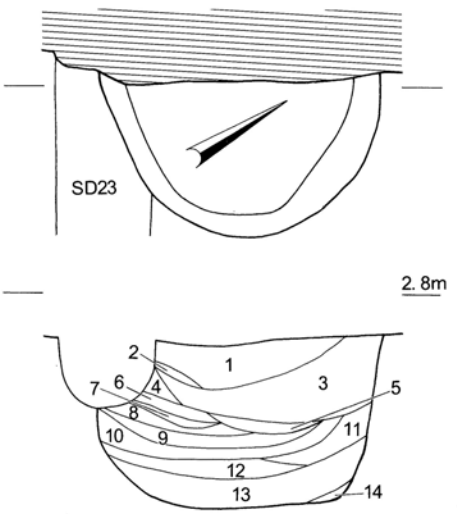


Fig. 52　SK06出土遺物（1/3）

SK08

F・G－1・2に位置する。西側は発掘区外に伸びるが径1.1m程度の円形土坑になろう。深さは0.7mである。SK09を切り、SD23に切られる。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、白磁碗、白磁合子蓋、中国陶器A群の盤、B群の四耳壺、C群の捏鉢、瓦器椀、砥石などのほか、鋳



1．灰褐色砂質土　炭化物、焼土、茶褐色砂含む
2．灰褐色砂質土　炭化物、焼土多く含む
3．灰褐色砂質土　炭化物、焼土含む
4．灰褐色砂質土　3より灰色味少ない炭化物、焼土微量含む
5．黒色土　炭化物、焼土含む
6．灰褐色砂質土　炭化物、焼土含む
7．暗褐色土
8．灰褐色砂質土　茶褐色砂含む
9．黒色土　炭化物含む
10．灰褐色砂質土
11．暗灰褐色砂質土
12．黒色土　炭化物含む
13．灰褐色砂質土
14．灰褐色砂質土　灰色味強い

0　1m

Fig. 53　SK08（1/30）

型、取瓶、坩堝といった鋳造関連の遺物が出土している。194～196は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。196を除いて板状圧痕がつく。口径は9.2～9.6cmで平均9.4cm、器高は1.2～1.4cmで平均1.3cmである。197～205は土師器の坏で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径は14.8～17.0cmで平均15.7cm、器高は2.5～3.5cmで平均2.9cmである。大きさにばらつきがある。206は土師器の高台付坏である。207は白磁合子蓋である。208は龍泉窯系青磁皿である。209～213は同安窯系青磁碗で外面下半は露胎である。209は無文である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

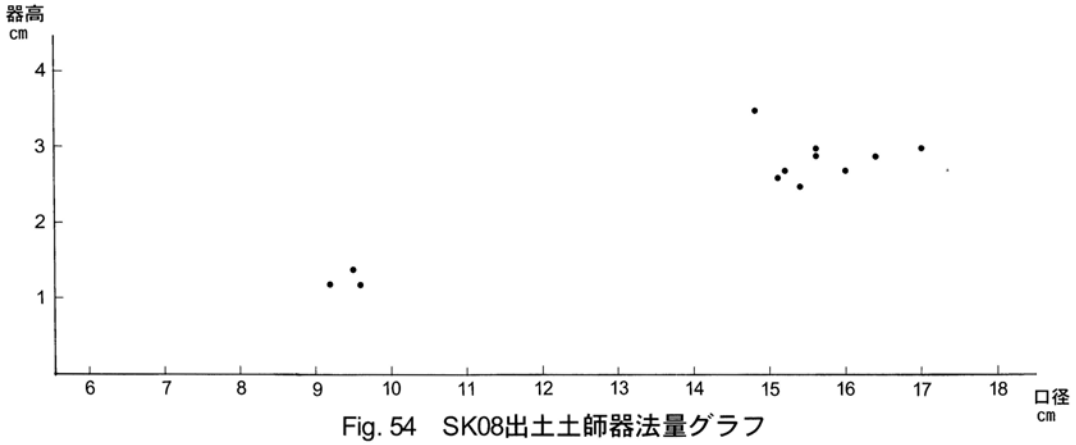
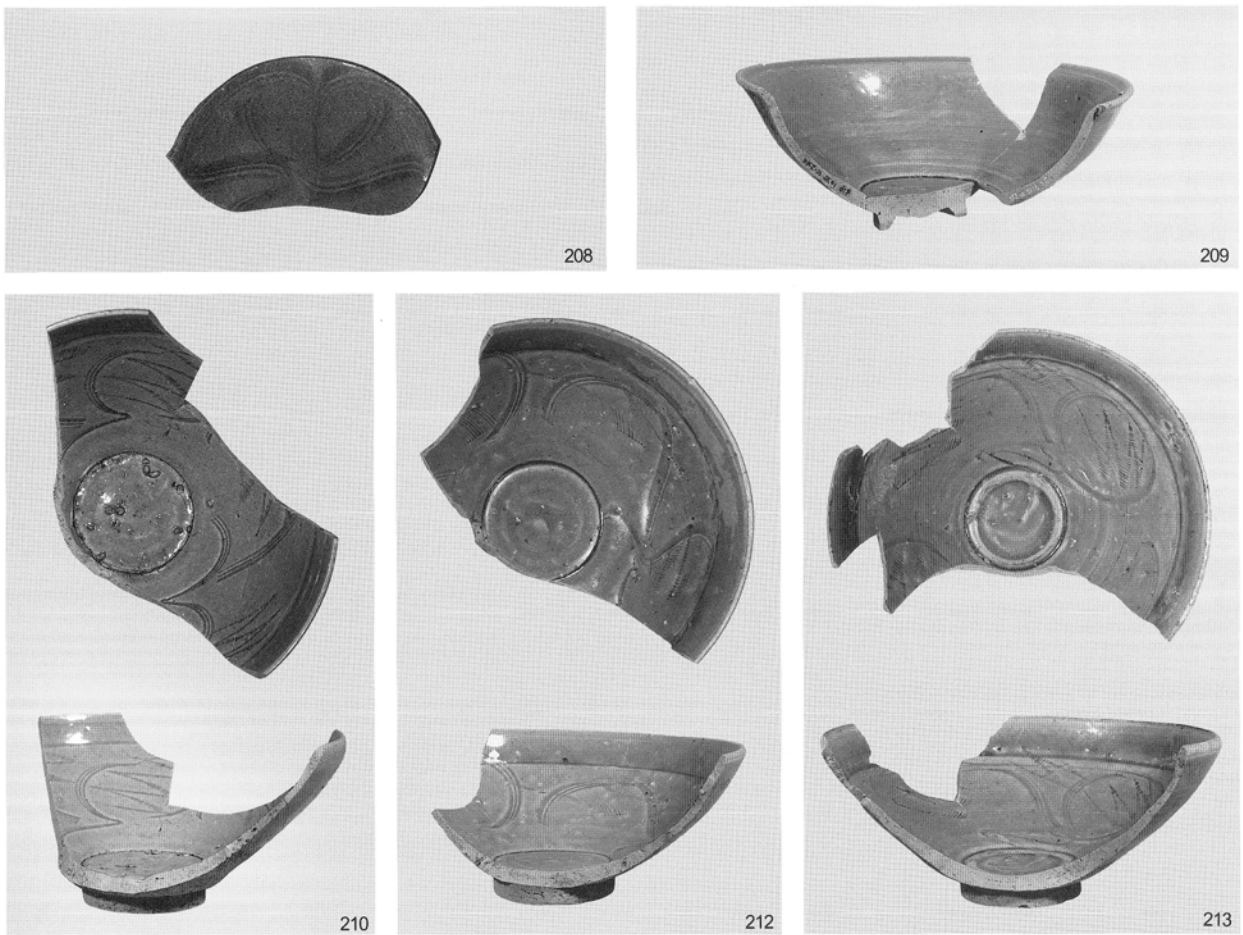


Fig. 54　SK08出土土師器法量グラフ



PL. 38　SK08出土遺物（約1/3）

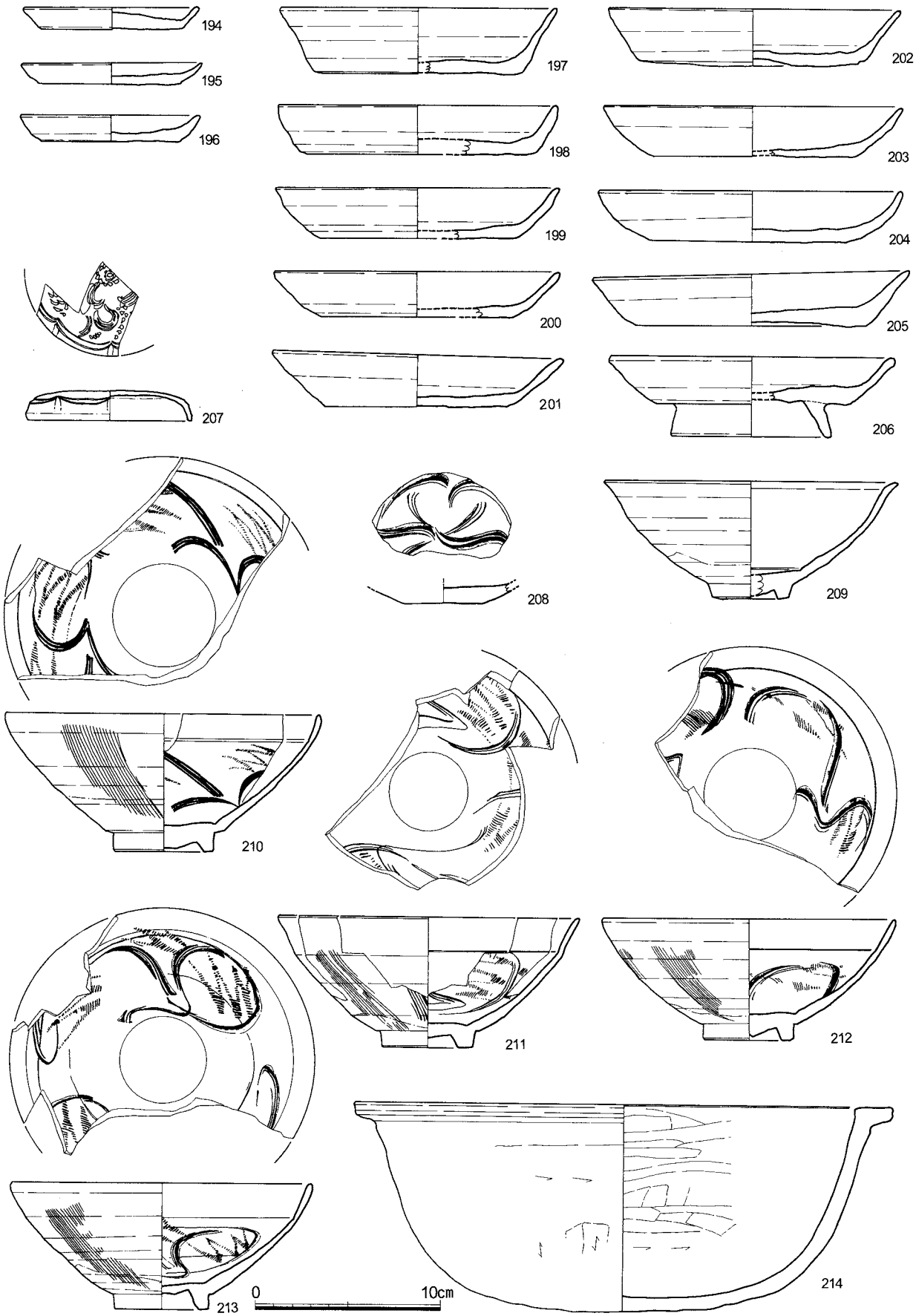
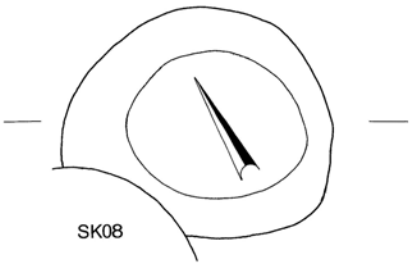
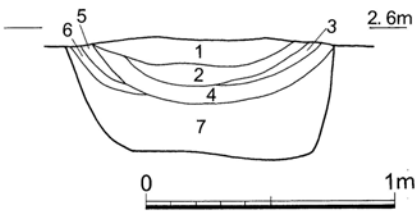


Fig. 55　SK08出土遺物（1/3）

SK09

F・G－１・２に位置する長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.5mの楕円形土坑である。SK08に切られる。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、白磁碗・皿、中国陶器C群の捏鉢、瓦器椀、土鍋などが出土している。215～222は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。221を除いて板状圧痕がつく。口径は8.7～10.0cmで平均9.1cm、器高は0.7～1.4cmで平均1.1cmである。223～226は土師器の坏で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径14.2cm、器高2.5cmと小ぶりの223を除くと、口径は16.0～16.3cmで平均16.2cm、器高は3.0～3.4cmで平均3.2cmとなる。227は龍泉窯系青磁皿である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。





1．暗灰褐色砂質土　炭化物含む
2．灰褐色砂質土　炭化物少量含む
3．暗茶褐色砂質土
4．暗黄褐色砂
5．灰褐色砂質土
6．暗黄褐色砂
7．暗灰褐色砂質土　炭化物多く含む

Fig. 56　SK09（1/30）

PL. 39　SK09（南から）

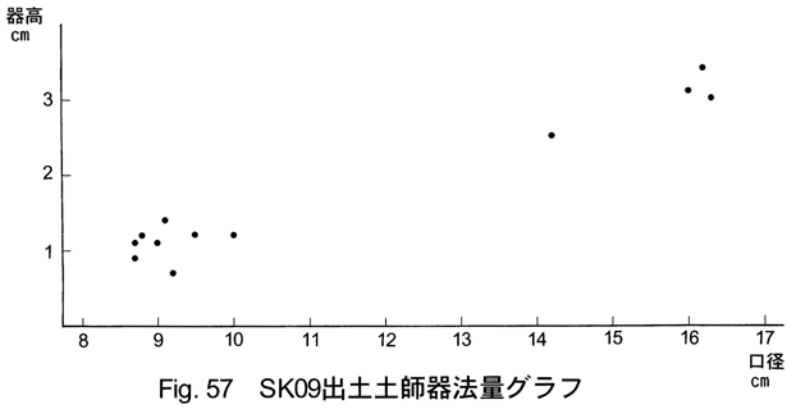


Fig. 57　SK09出土土師器法量グラフ

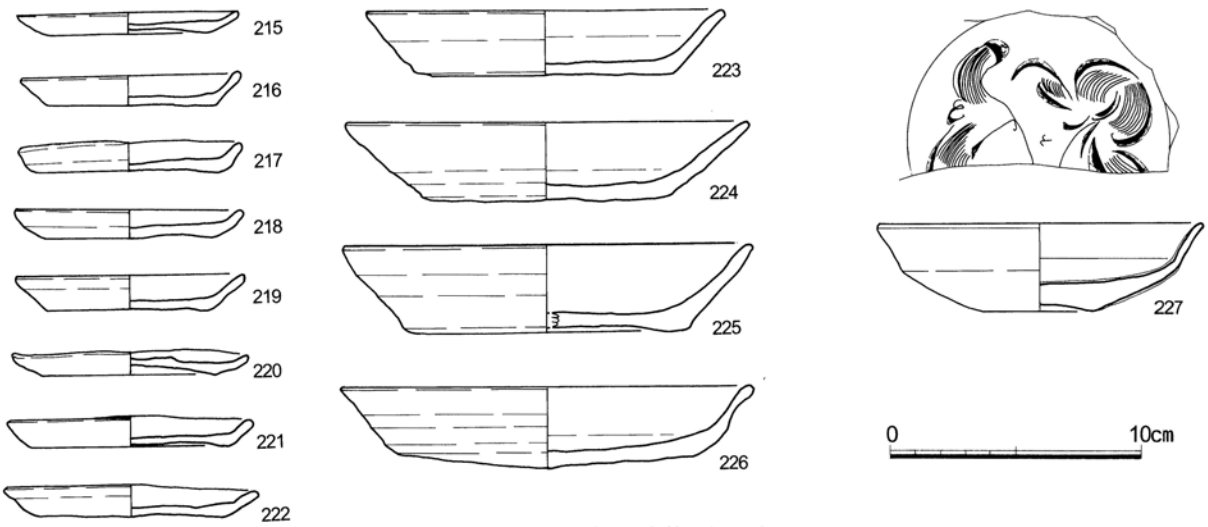
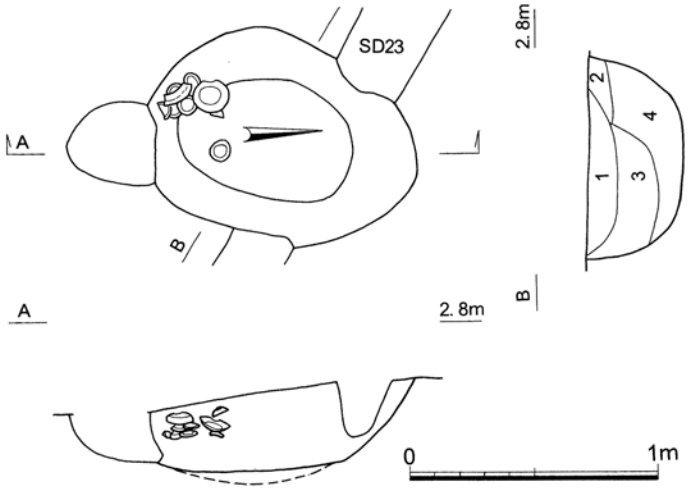


Fig. 58　SK09出土遺物（1/3）

SK17

G－３に位置する長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.4mの楕円形土坑である。SD23に切られる。南側に土師器坏・皿がまとまって廃棄されていた。そのほか同安窯系青磁碗、白磁碗などが出土している。228～233は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。233を除いて板状圧痕がつく。煤が付着しており、灯明皿として使用されていたようである。口径は8.2～9.1cmで平均8.7cm、器高は0.9～1.3cmで平均1.2cmである。234は土師器の坏で、底部糸切りである。口径は15.0cm、器高は3.7cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

PL. 40　SK17（東から）



1．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土、灰色粘土含む
2．灰褐色砂　暗灰褐色土混入
3．灰褐色砂質土　灰色粘土を多く、炭化物、焼土を含む
4．暗褐色砂質土　灰色粘土、炭化物、焼土含む

Fig. 59　SK17（1/30）

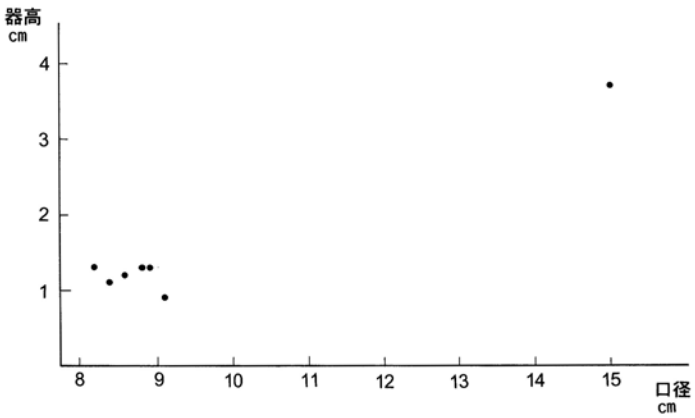


Fig. 60　SK17出土土師器法量グラフ

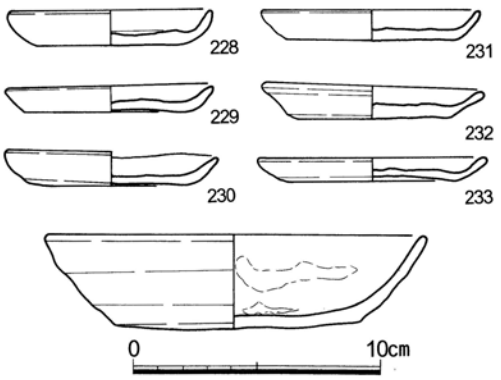


Fig. 61　SK17出土遺物（1/3）

SK18

F・G－２・３に位置する径0.8m、深さ0.6mの円形土坑である。土師器坏・皿、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、中国陶器Ｃ群の捏鉢、瓦器椀、土鍋などのほか、鋳型、取瓶、鞴の羽口といった鋳造関連の遺物が出土している。235～237は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。236を除いて板状圧痕がつく。口径は9.3～10.2cmで平均9.8cm、器高は1.3～1.6cmで平均1.4cmである。238～242は土師器の坏で、すべて底部糸切りである。238・242を除いて板状圧痕がつく。口径は15.0～15.8cmで平均15.4cm、器高は2.5～3.3cmで平均2.9cmである。243は龍泉窯系青磁碗である。244は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

PL. 41　SK18（東から）

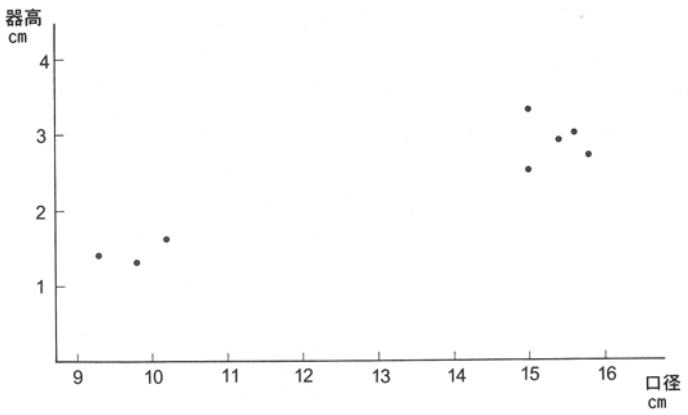
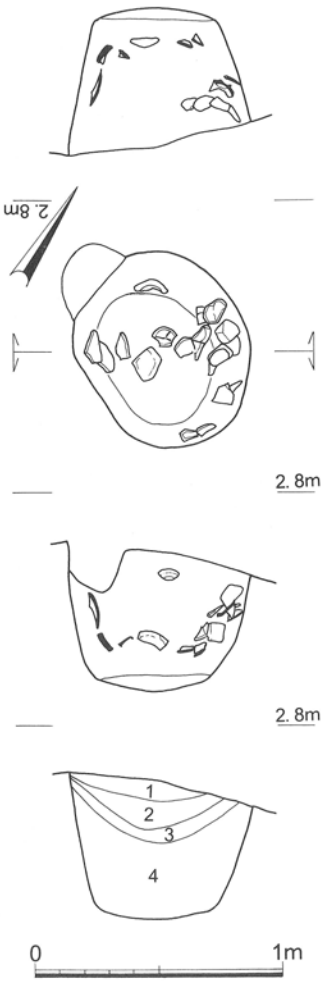


Fig. 63　SK18出土土師器法量グラフ



1．灰褐色砂質土　炭化物、灰緑色粘土含む
2．暗褐色砂質土　炭化物含む
3．暗黄褐色砂　灰褐色土含む
4．暗褐色土

Fig. 62　SK18（1/30）

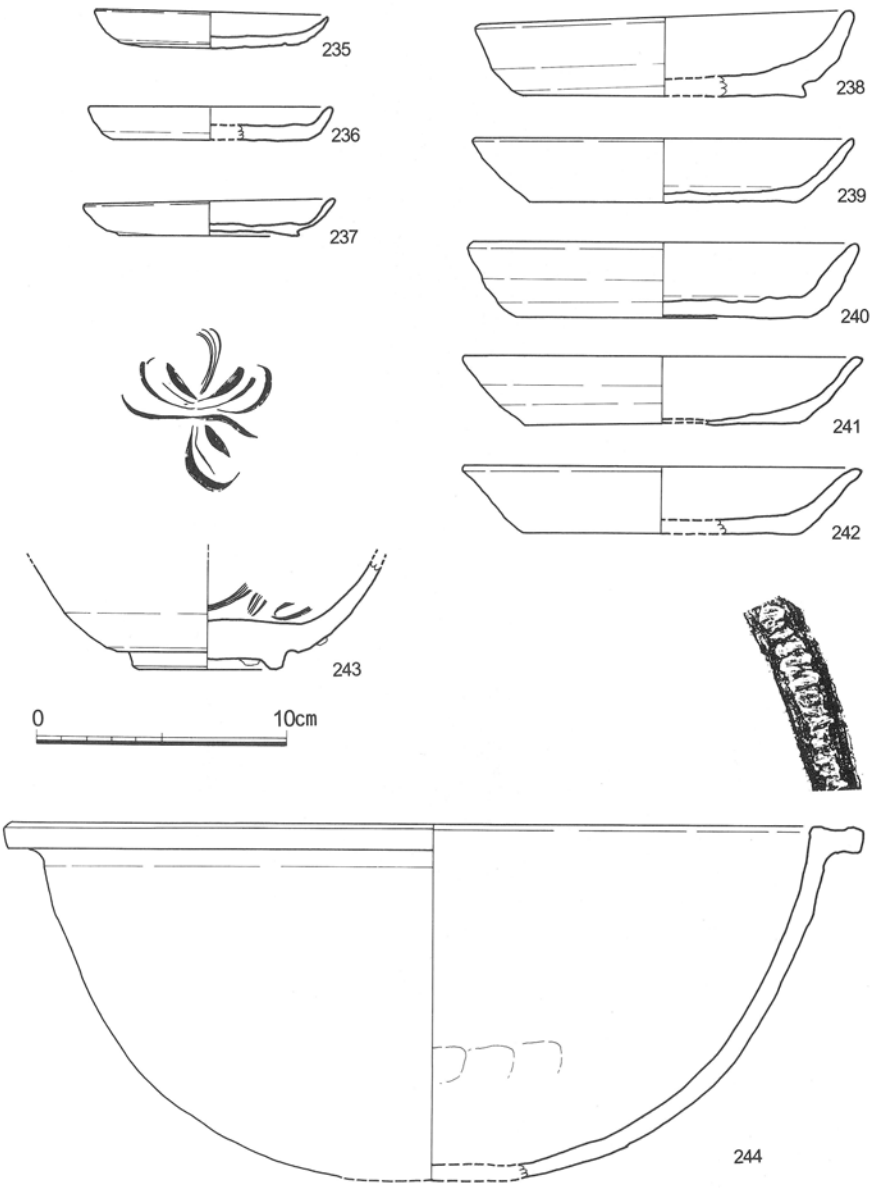
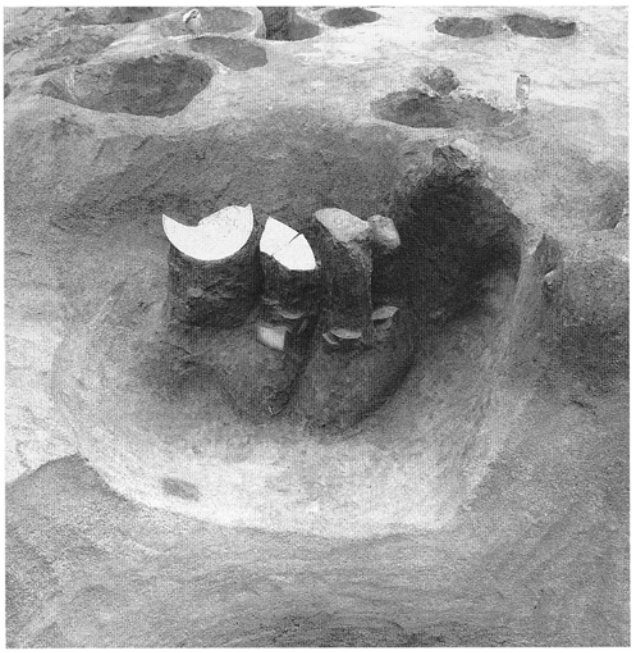


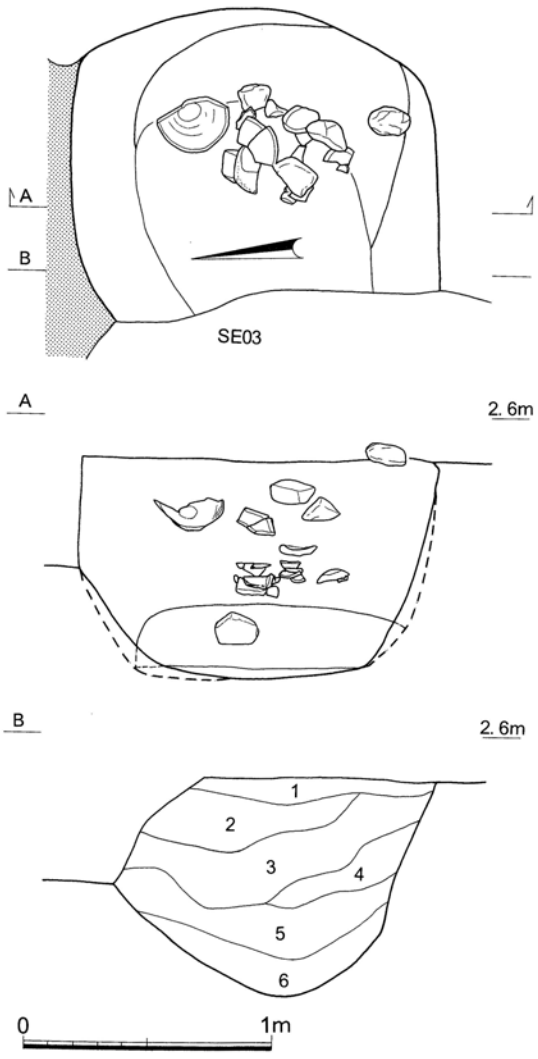
Fig. 64　SK18出土遺物（1/3）

SK20

D・E－１・２に位置する円形土坑で北側上部に攪乱を受け、西側は SE03に切られている。径1.5m、深さ0.9mを測る。土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、越州窯系青磁碗、白磁碗・皿、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、東播系須恵器の捏鉢、土鍋などのほか、鋳型、輔の羽口といった鋳造関連の遺物が出土している。245～259は土師器の皿である。すべて底部糸切りで、259を除いて板状圧痕がつく。口径は7.7～10.0cmで平均9.0cm、器高は1.1～1.7cmで平均1.4cmである。260～271は土師器の坏で、すべて底部糸切りである。263・265を除いて板状圧痕がつく。口径は12.4～13.6cmで平均13.1cm、器高は2.0～3.1cmで平均2.5cmである。他の遺構出土の土師器にくらべ、口径がかなり縮小する。272は土師器の高台付坏である。273は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に鎬連弁を施す。274は東播系須恵器の捏鉢である。接合して完形になった。出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。



PL. 42　SK20（西から）



1．暗灰白色砂
2．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土、暗灰白色砂含む
3．暗褐色砂質土　炭化物、焼土含む
4．暗灰褐色砂質土　炭化物、焼土少量含む
5．暗茶褐色砂質土　炭化物、焼土、褐色砂含む
6．暗褐色砂　褐色砂含む

Fig. 65　SK20（1/30）

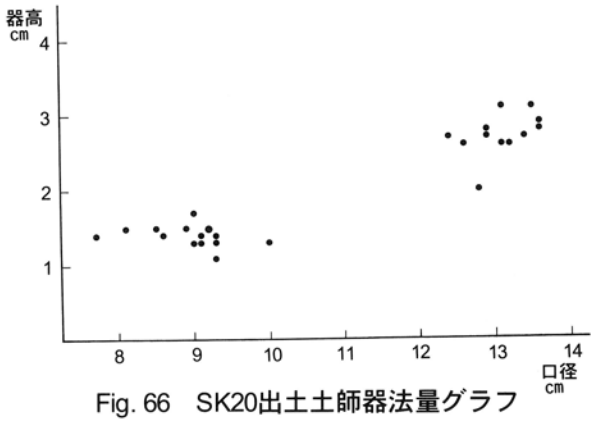


Fig. 66　SK20出土土師器法量グラフ

PL. 43　SK20出土遺物（約1/4）

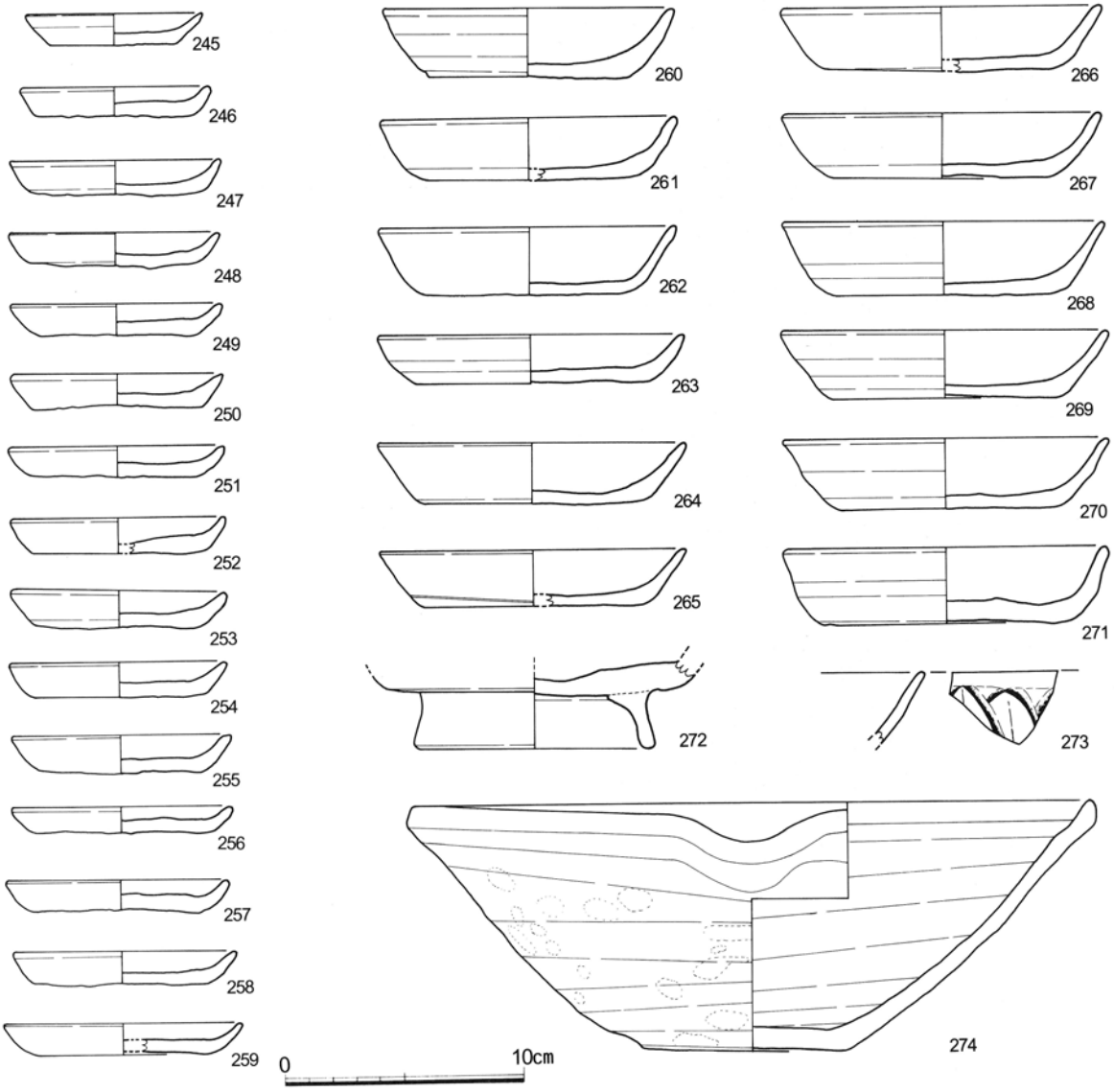
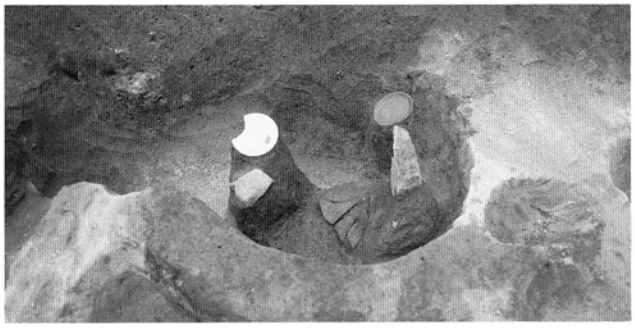


Fig. 67　SK20出土遺物（1/3）

SK30

D－１・２に位置する土坑で西側は発掘区外に伸びるが、形状は径0.7m程度の円形となろう。深さは0.3mである。SK31を切り、SK29に切られる。土師器坏・皿、青磁碗、白磁碗・皿が出土している。275は土師器の皿で、底部糸切りである。口径は9.6cm、器高は1.3cmである。276は土師器の坏で、底部糸切りである。板状圧痕がつく。口径は17.8cm、器高は3.1cmで大ぶりの坏である。277は白磁平底皿で釉を掻き取った外底に墨書があり、「誌」と読める。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 44　SK30（東から）

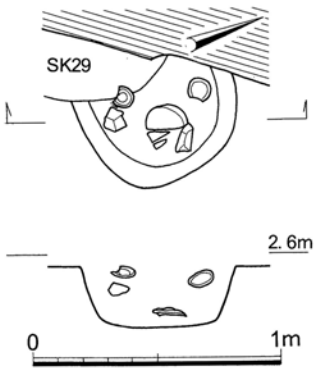
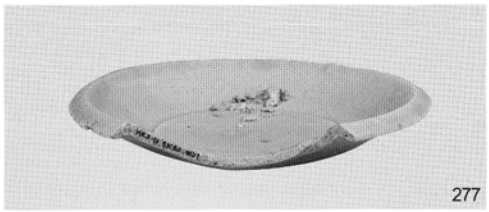


Fig. 68　SK30（1/30）



PL. 45　SK30出土遺物（約1/2）

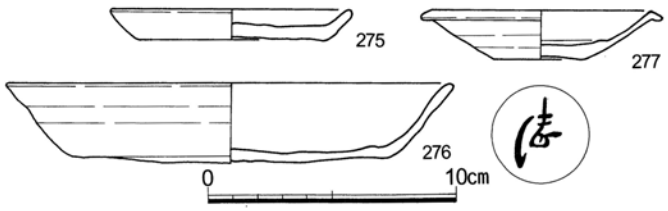


Fig. 69　SK30出土遺物（1/3）

SK87

H－８・９に位置する土坑である。SD74、SE77に切られるが、径0.8m、深さ0.5mの円形土坑となろう。土師器皿、白磁碗・皿、中国陶器A群の盤、瓦器椀が出土している。278～281は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。280・281に板状圧痕がつく。口径は9.2～10.0cmで平均9.6cm、器高は1.0～1.5cmで平均1.2cmである。282は白磁碗０－Ⅱ類である。283は白磁碗Ⅸ類である。見込みは輪状に釉を掻き取る。出土遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。

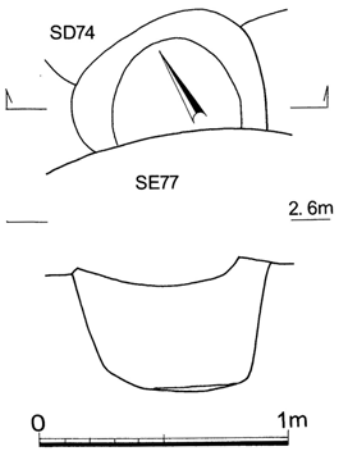


Fig. 70　SK87（1/30）

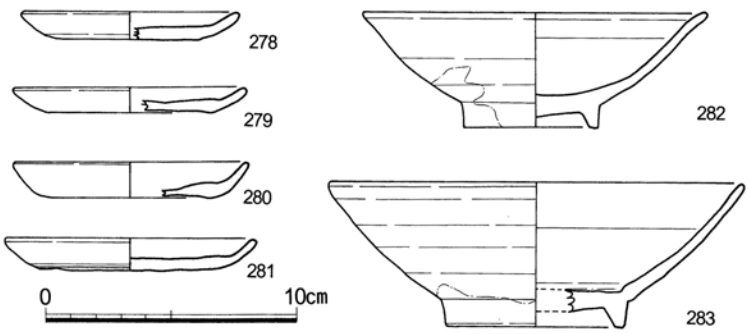
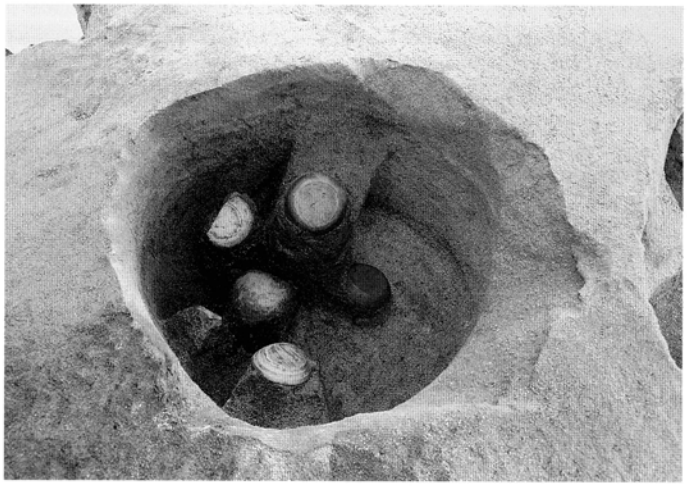


Fig. 71　SK87出土遺物（1/3）

SK240

E－８・９に位置する径0.9m、深さ0.7mの円形土坑である。壁はオーバーハング気味に立ち上がる。土師器坏・皿、瓦器椀、取瓶が出土した。284・285は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。284には板状圧痕がつく。口径は9.2cm、器高は1.0～1.3cmである。286～292は土師器の坏で、すべて底部糸切りで、板状圧痕がつく。口径は14.4～15.4cmで平均14.9cm、器高は2.7～3.1cmで平均2.9cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 46　SK240（南から）

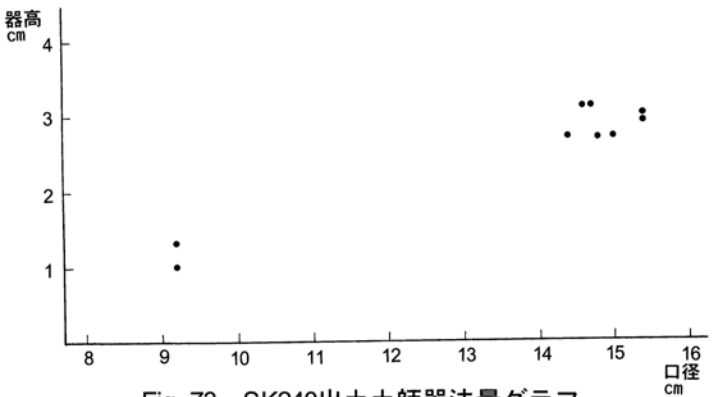


Fig. 73　SK240出土土師器法量グラフ

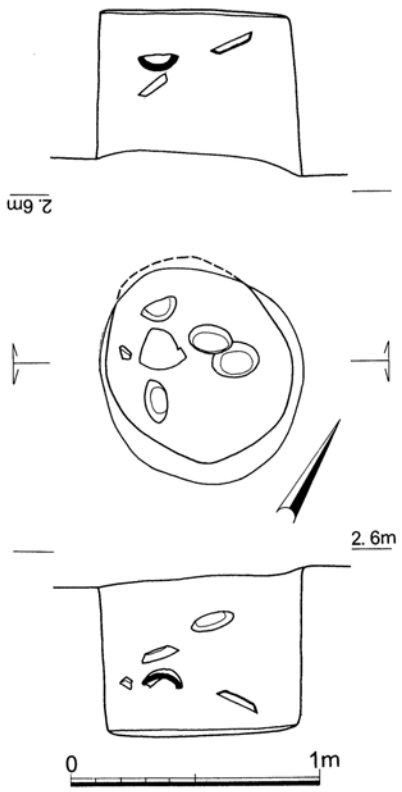


Fig. 72　SK240（1/30）

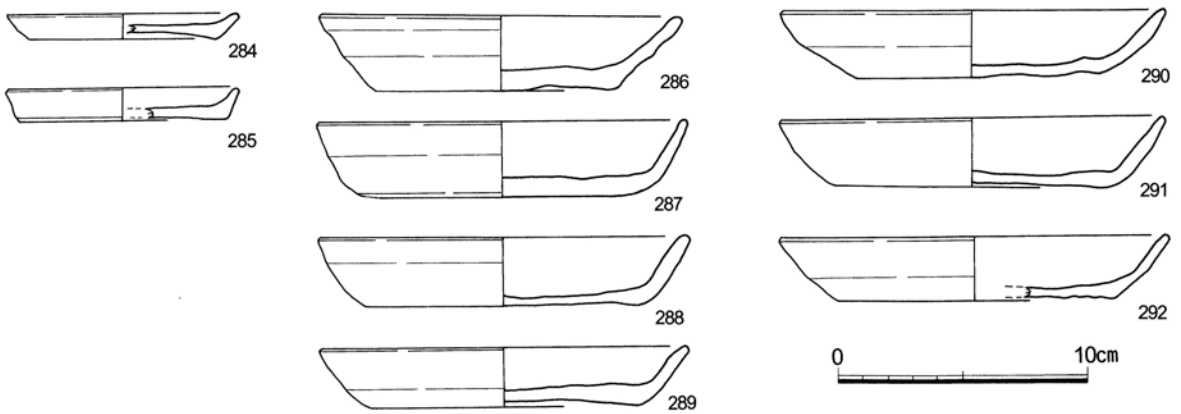


Fig. 74　SK240出土遺物（1/3）

（5）その他の遺構

発掘区の東端で骨が出土する遺構を２基調査した。出土した動物骨については71～74ページを参照されたい。

SK190

F－43・44で検出した馬の埋葬土壙である。東側は攪乱を受ける。長軸は残存部で1.8m、短軸は1.0m、深さ0.5mの楕円形の堀方に、馬が頭部を東に向けて埋葬されていた。出土遺物は土師器の小片とイイダコ壺の破片のみで時期ははっきりしないが、12世紀以降の遺構と考えられる。

SX200

F～H－46～48で検出した骨の集積遺構である。後述する遺構検出面の下の包含層を除去したところで検出した。標高は0.8m～1.2mである。ほとんどが馬の骨であるが、中に１割ほど人骨が混じっていた。人骨を見ていただいた中橋孝博氏によると最低３体分あり、２体は成人で内１体は女性、１体は子供ということである。

馬の骨は頭部を除き、ほぼ揃うのに対して、人骨はほんの一部分しかなく、どういった状況で馬の骨に混じったのか不明である。

骨に混じって白磁碗と四耳壺、瓦器椀が出土した。293は白磁碗Ⅵ類で内面に櫛描を施す。294は陶器の四耳壺である。オリーブ色の透明釉が内面までかかる。12世紀前半の遺構と考えられる。

PL. 47　SK190（北から）

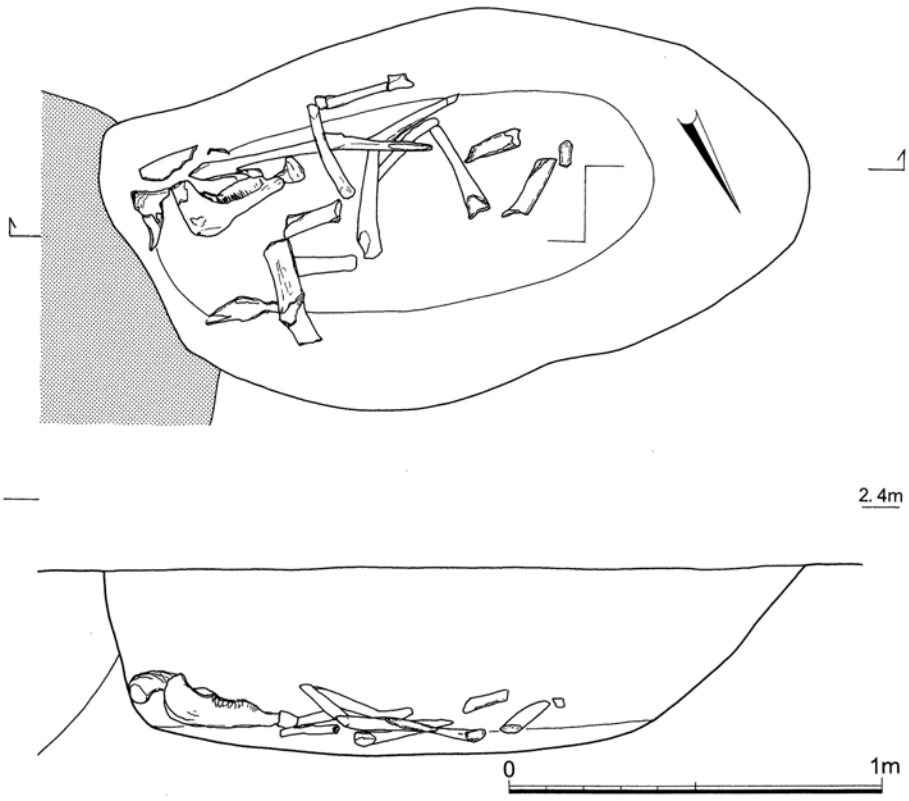


Fig. 75　SK190（1/20）

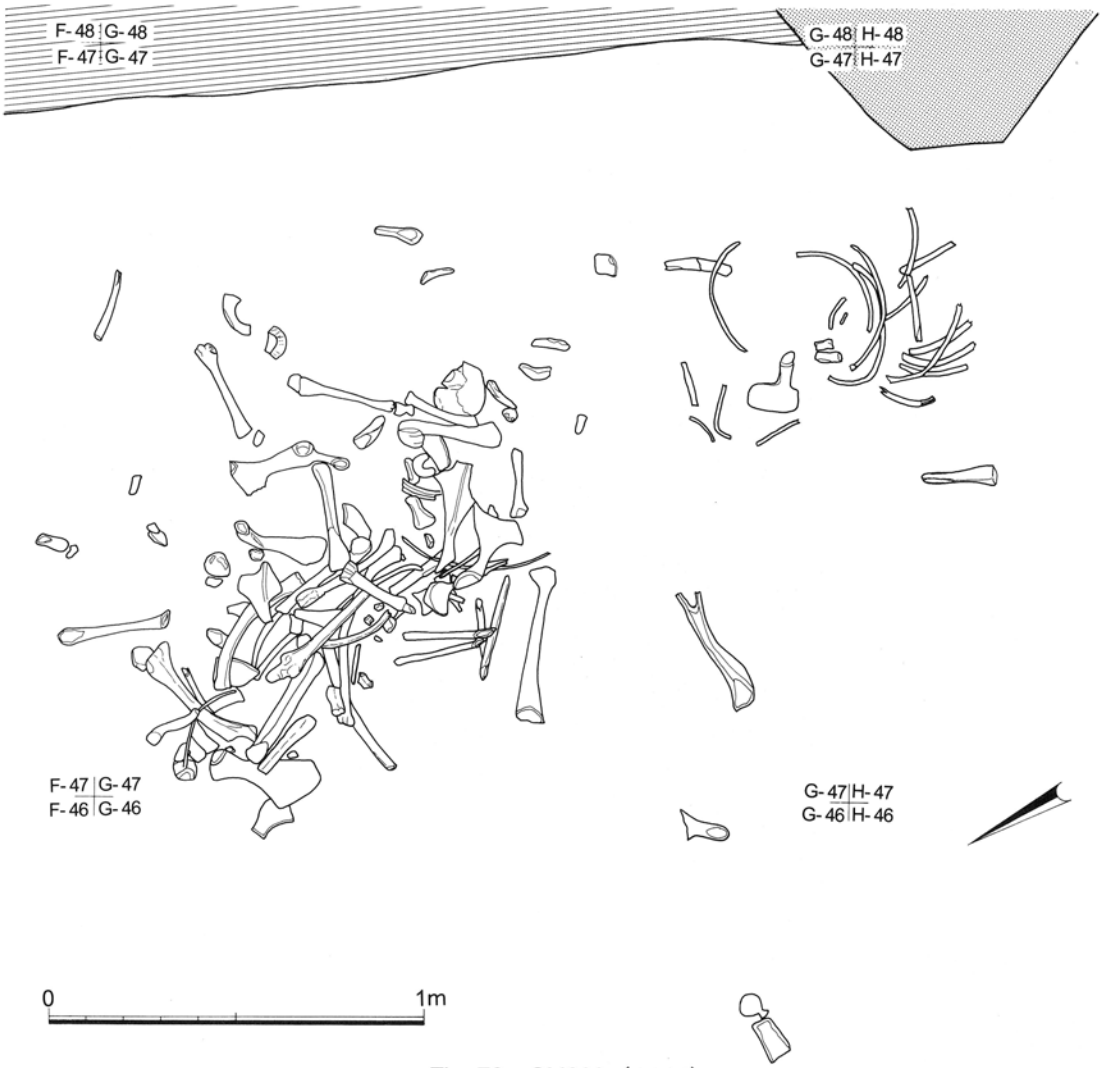


Fig. 76　SX200（1/20）

PL. 48　SX200（西から）

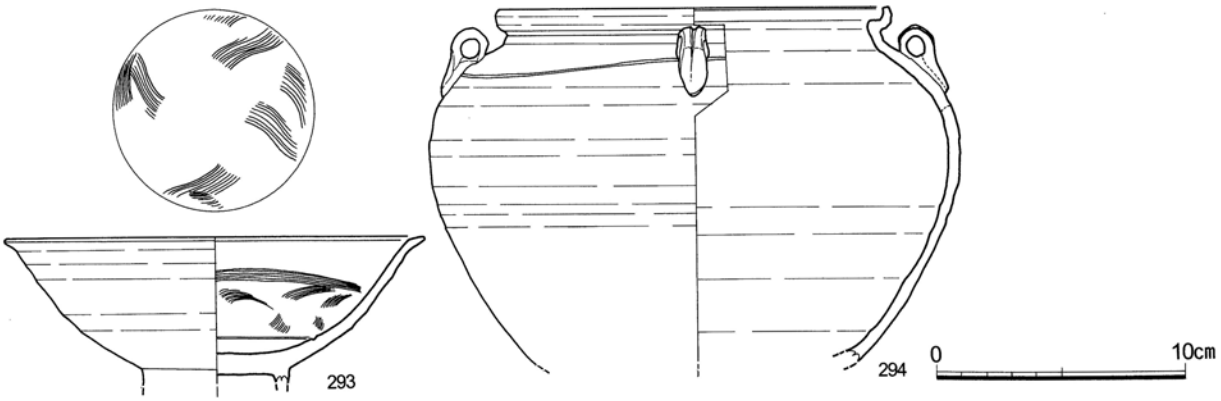


Fig. 77　SX200出土遺物（1/3）

（6）包含層

F～I－45～48では、遺構検出面より下の砂層から遺物が出土した。この部分の砂層は暗黄褐色～暗茶褐色の砂で、12世紀前半までの遺物と SX200を検出した。遺物を含まなくなる黄褐色砂の上面はH－45から東に急激に下がり、発掘区東端では標高0.5mとなる。

295～301は土師器の坏である。298は底部ヘラ切りで、それ以外は糸切りである。板状圧痕は296・298以外にみられる。302・303は越州窯系青磁である。302は全面施釉で、高台内側に目跡が残る。303は全面施釉で、見込みと畳付に目跡が残る。304～308は白磁碗である。304はⅣ類。305はⅥ類。306はⅡ類。体部内面を６本の白堆線で区画する。307・308はⅨ類。見込みは輪状に釉を掻き取る。309・310は瓦器椀である。311は高麗陶器である。暗茶色の胎土で表面は黒灰色を呈する。よく焼きしまっている。

PL. 49　発掘区東端南壁土層（北から）

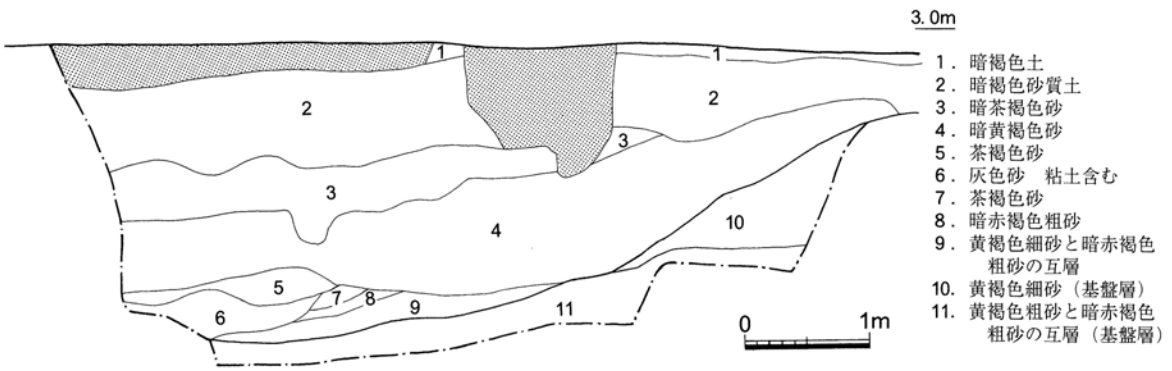


Fig. 78　発掘区東端南壁土層（1/60）

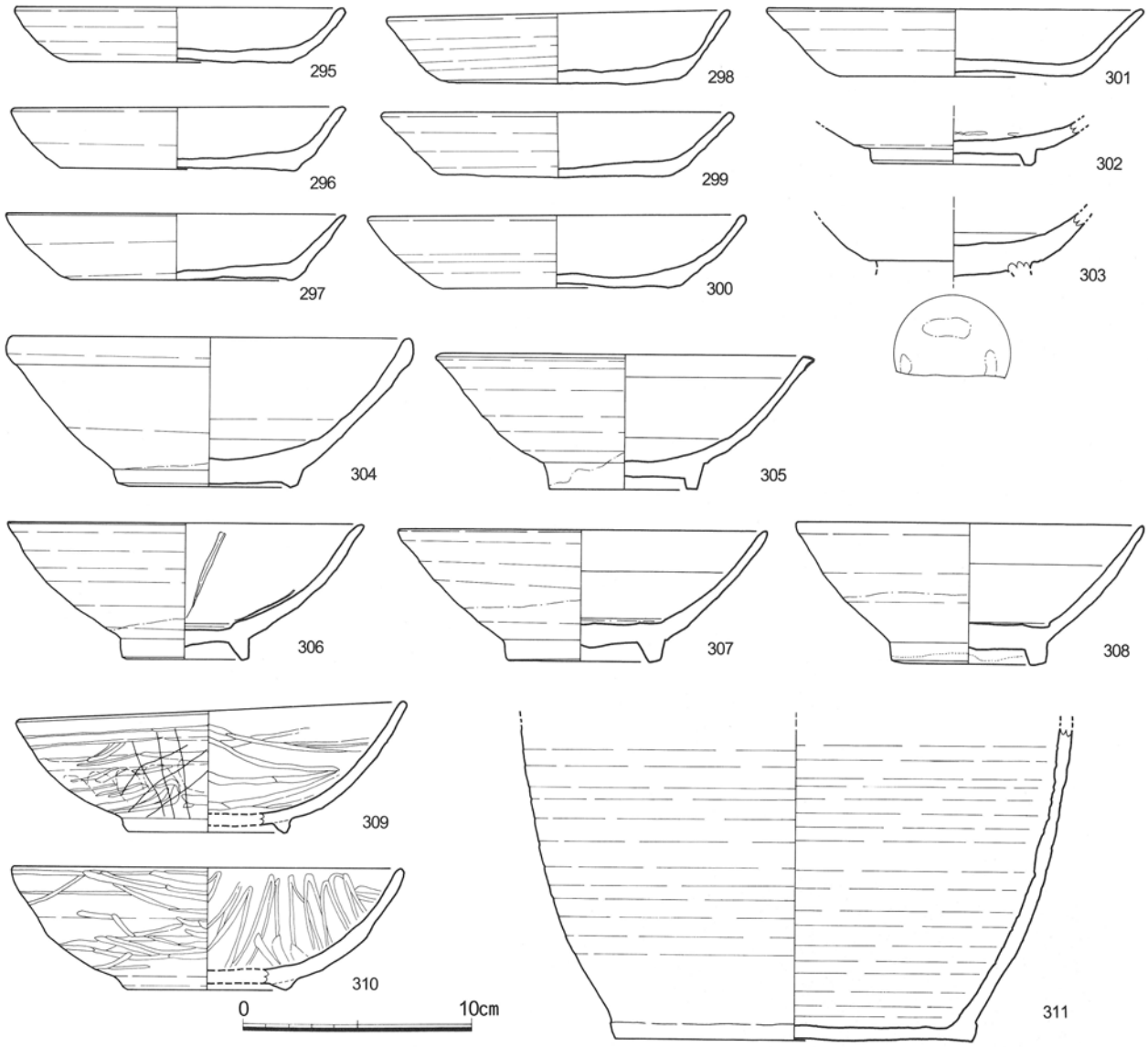
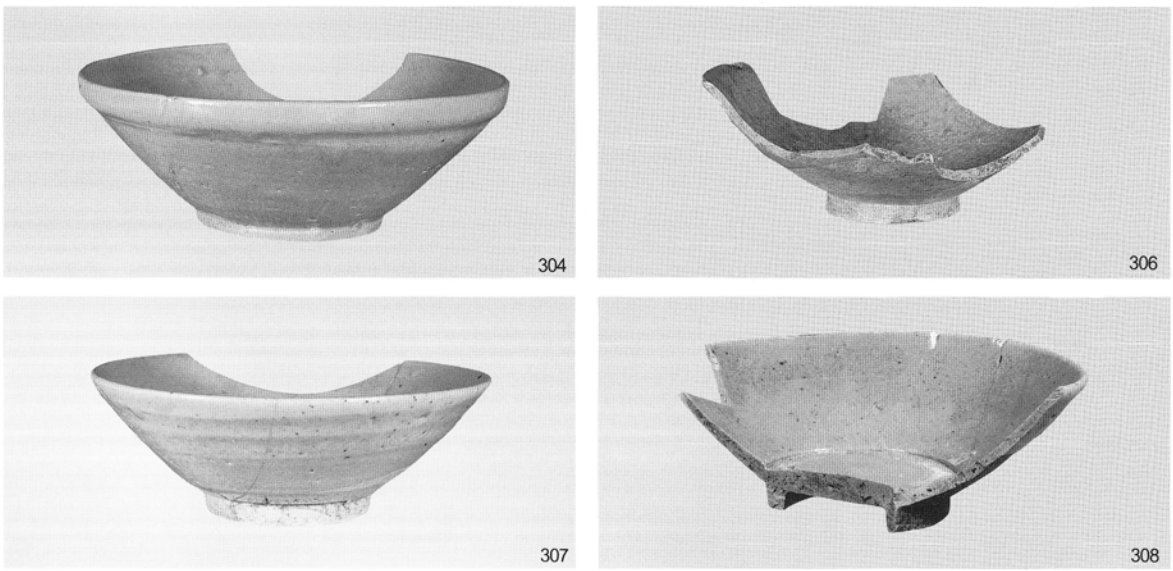


Fig. 79　包含層出土遺物（1/3）



PL. 50　包含層出土遺物（約1/3）

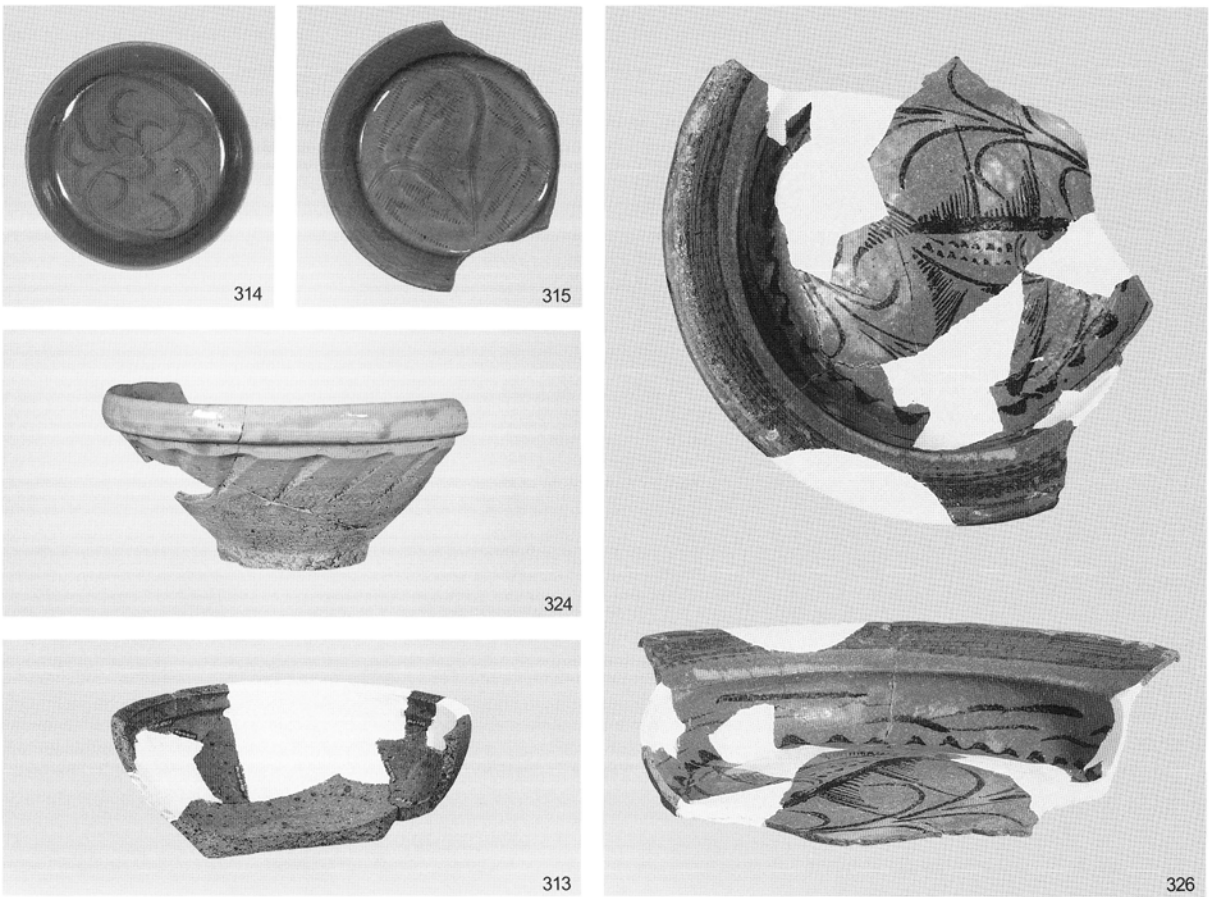
（7）抽出した遺物

ここでは、これまでにふれられなかった遺物を報告する。

土器・陶磁器

312は中国陶器B群の四耳壺である。接合しないが同一個体であろう。明茶褐色の不透明釉がかかる。SK110出土。313は中国陶器C群の捏鉢である。内面は摩耗している。SK258・259出土。314は試掘時に出土した完形の龍泉窯系青磁皿である。315は同安窯系青磁皿である。SP178出土。316・317は白磁平底皿Ⅲ類である。黄色みがかった不透明釉が薄くかかる。316は近代の井戸 SE03堀方出土。317は SK35出土。318は白磁平底皿Ⅱ類である。G－2グリッドの遺構検出時出土。319は白磁平底皿Ⅳ類である。口縁部を外反させ、斜めに削る。体部内面は白堆線で区割りする。SK58出土。320は白磁高台付皿Ⅱ類である。見込みは輪状に釉を掻き取る。SK28出土。321は口縁玉縁の白磁高台付皿Ⅰ類である。SP187出土。322は瓦器椀である。SK101出土。323・324は白磁碗Ⅳ類である。どちらも SP223・224出土。324は体部外面にヘラで刻みを入れる。325は緑釉陶器である。外面線刻による施文ののち、明緑色の透明釉をかける。磁州窯系か。SK86出土。326は中国陶器A群Ⅰ類の盤で、内面に魚藻文を描く。SP223・224出土。

中世以前の遺物も若干出土している。327は8世紀ごろの土師器の甕である。内面は口縁ヨコハケ、体部ヘラケズリ、外面は口縁ヨコナデ、体部タテハケを施す。近代の井戸 SE03出土。328は6世紀末～7世紀初頭の須恵器の坏身である。SE239出土。329～330は古墳時代の土師器である。Ⅴ区の砂層より出土した。周囲も掘り広げてみたが、他に出土遺物はなかった。329は5世紀前半の高坏であ



PL. 51　抽出した遺物（313・326：約1/5・他：約1/3）

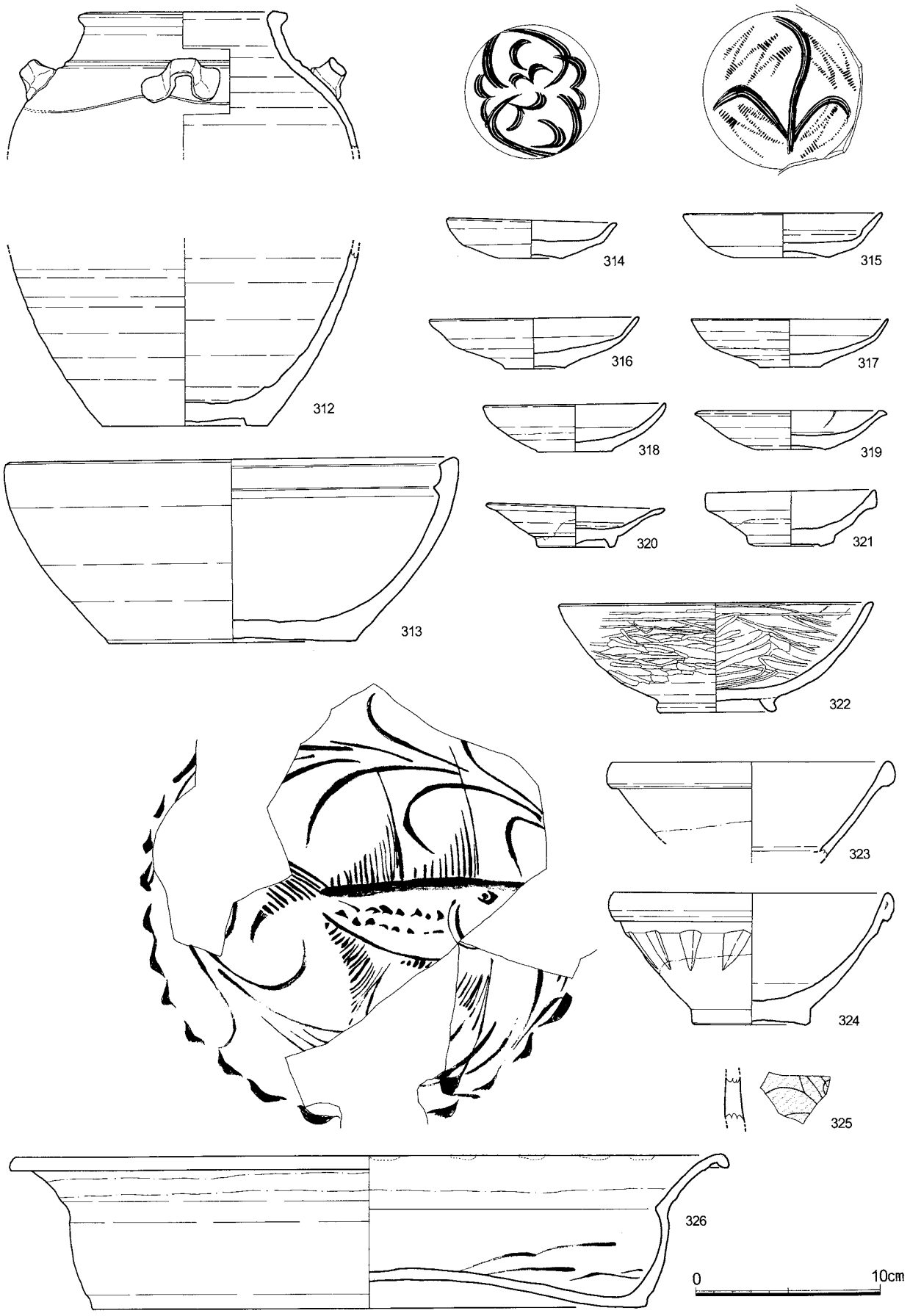


Fig. 80　抽出した遺物　1　(1/3)

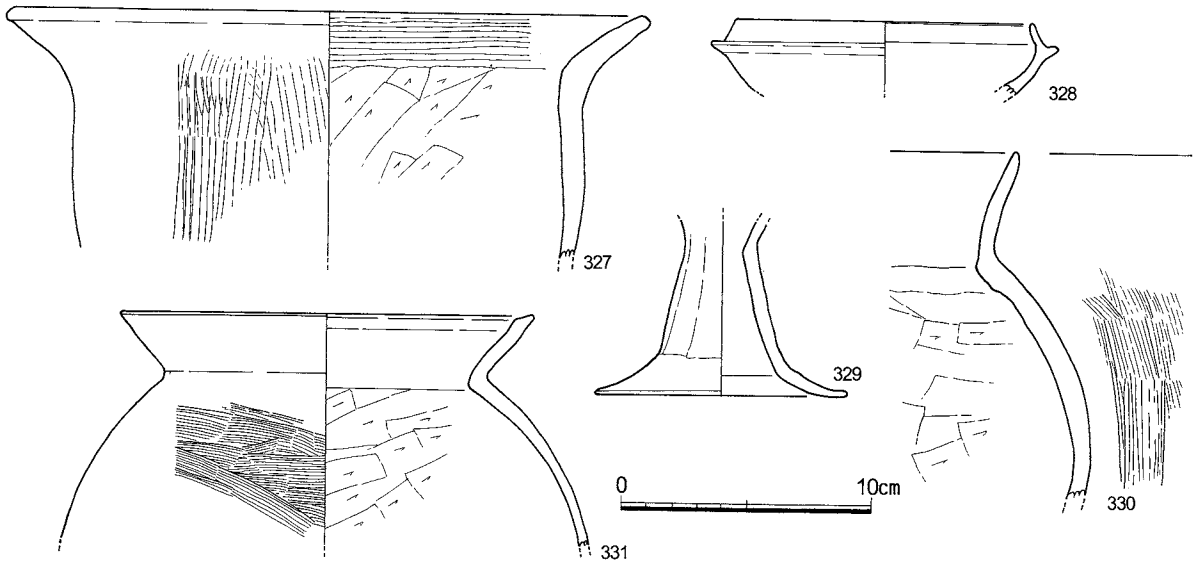


Fig. 81　抽出した遺物　2　(1/3)

る。脚部は板上工具による縦方向のナデ、裾部はヨコナデ、内面は横方向のヘラケズリを施す。330は5世紀後半の土師器の甕である。外面は口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、内面は口縁部板上工具によるナデ、体部ヘラケズリを施す。331は4世紀末～5世紀初頭の土師器の甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、内面はヘラケズリを施す。

墨書土器

9点の墨書土器が出土した。青磁碗1点、青磁皿1点、白磁碗7点である。青磁には記号が、白磁には文字が書かれている。332・333以外については既に出土遺構のところで実測図を掲載している。14は15世紀代の龍泉窯系青磁で、高台内側に朱で円が書かれている。SD193出土。48は同安窯系青磁皿で、釉が掻き取られている底部に、円の中に風車のような記号を記す。SE205堀方出土。32は白磁碗Ⅵ類で高台内側に「一大（花押）」と三文字が三角形の位置に書かれている。SE109井筒出土。22は白磁碗Ⅳ類で、SE77出土。高台内側にはっきりと墨書がみえるが、破片のため文字の一部分しか残っておらず、判読できない。33・154・277・332・333の5点には書体が異なるが、「誌」という字が書かれている。中国人名か。33は白磁碗Ⅷ類で、高台内側に書かれている。SE239出土。154は白磁碗Ⅵ類で、高台内側の端に、かすかに文字がみえる。SK02出土。277は白磁平底皿Ⅳ類で、釉が掻き取られた底部に書かれている。SK30出土。332・333は白磁碗Ⅷ類で、高台内側に書かれている。G－16に位置する SP236出土。以上5点が出土した4つの遺構は発掘区西側に位置する。

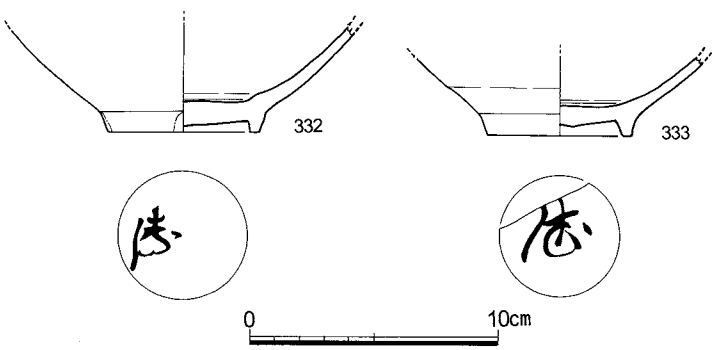
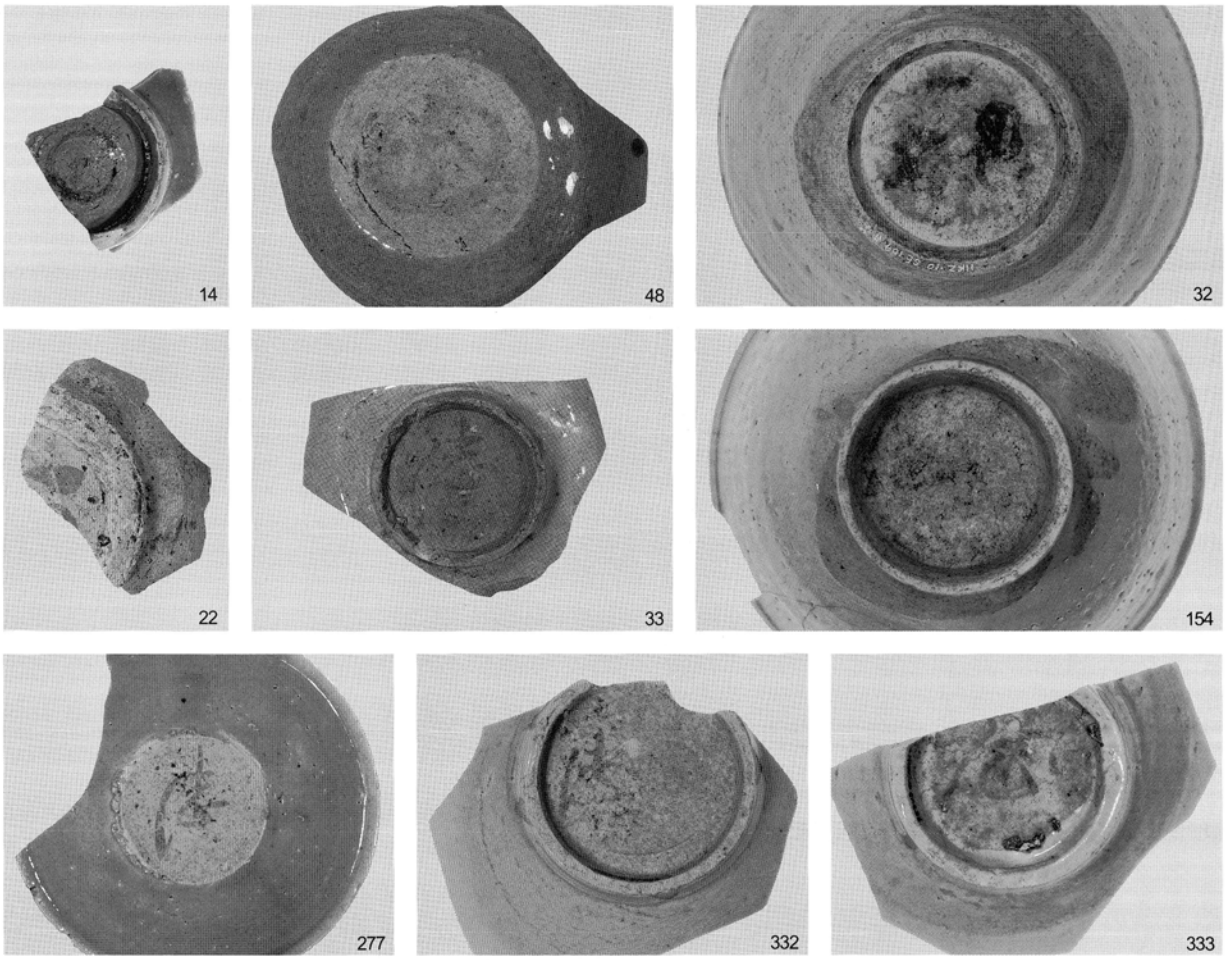


Fig. 82　墨書陶磁器（1/3）



PL. 52　墨書陶磁器（約1/2）

生産関連遺物

今回の調査ではかなりまとまった量の鋳造関連遺物が出土した。鋳造関連の遺構は確認できなかったが、銅製品を鋳造する工房が近くにあったものと考えられる。破片が多く、図示できなかったので、一覧表に出土遺構を示す（Tab. 2）。発掘区の西側に集中して出土している。12世紀後半の遺構に土師器、陶磁器とともに廃棄されているものが多い。334・335は土製鋳型である。334は青銅製鍋の外型である。口縁部分に段がつく。胎土には粗砂、スサを含み、内面に真土を貼る。底部中心に径1.8cmの軸孔がある。鋳上がりの鍋の法量は口径21.2cm、器高8.1cmになる。この鋳型が出土した SK83は径0.7mの円形土坑で、鋳型のみが割れた状態で出土した。他の遺構との切り合い関係から13世紀後半以降の遺構であるが、何らかの状況で、12世紀後半頃の鋳型が後世の遺構に廃棄された可能性を考えておきたい。博多遺跡群84次調査では12世紀後半を下ることはないと報告されている時期の銅製の鍋が出土している。この鍋と鋳型を実際に重ねてみたが、鋳型の方が若干口径が大きかった。しかし、器高や底からの立ち上がりのカーブはよく一致した。破片を接合したので、鋳型が少々歪んでいる可能性もある。335は小型の碗の外型であろうか。底部に軸孔がある。破片なので正確な値ではないが、口径8.6cm、器高3.5cmの製品ができる。天地逆で、何かの台座となるのかもしれない。336・337は取瓶である。内面に溶けた銅が付着する。336は SK02出土。337は SK240出土。338は炉壁と思われる。下端部の復元径が約50cmの円筒状になるが、正面右端は破損しておらず、一周しないものと考えられる。下端に鞴の羽口を挿入するためと思われる径4cmの半円の孔がある。SK08出土。339は中

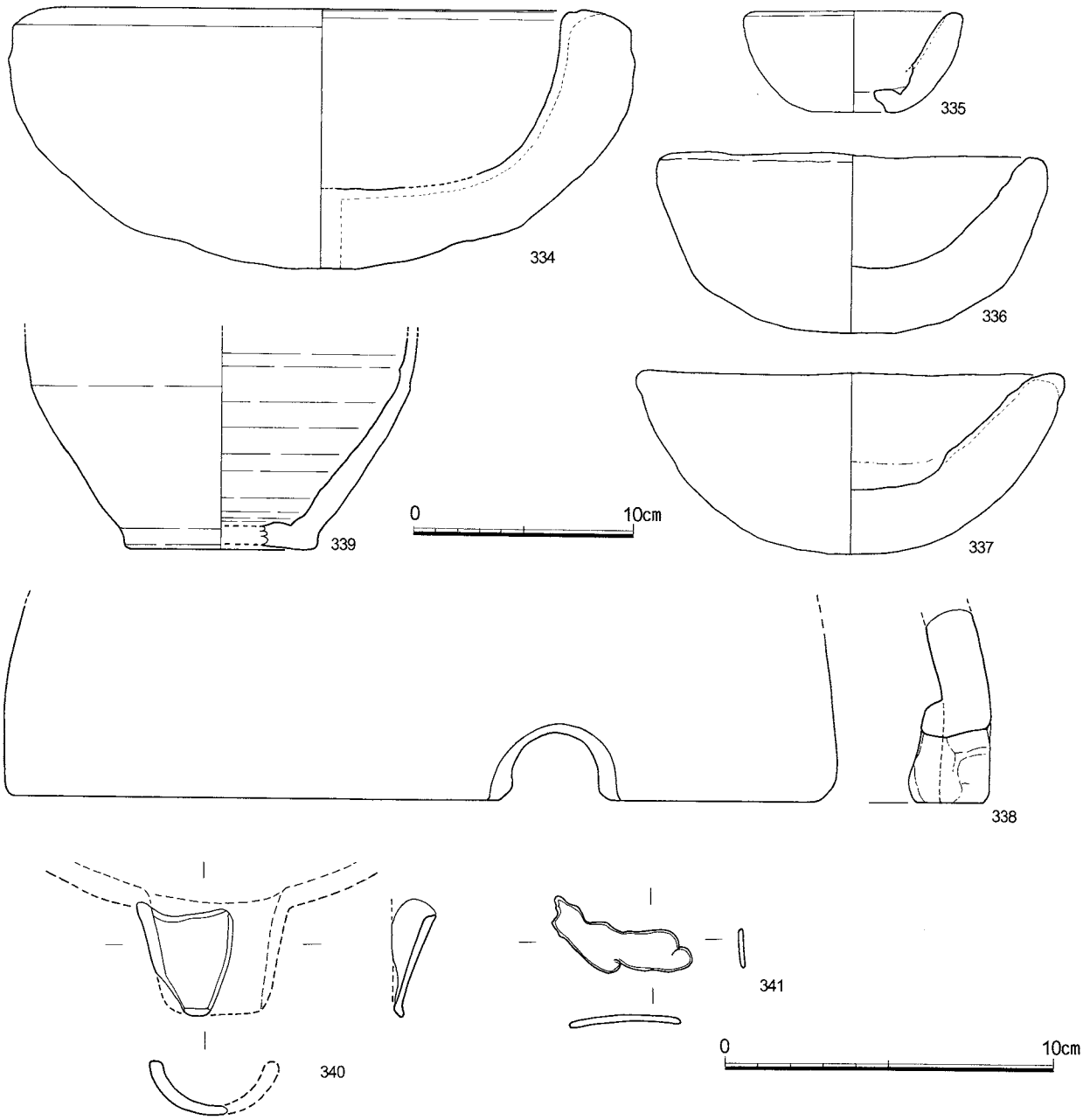


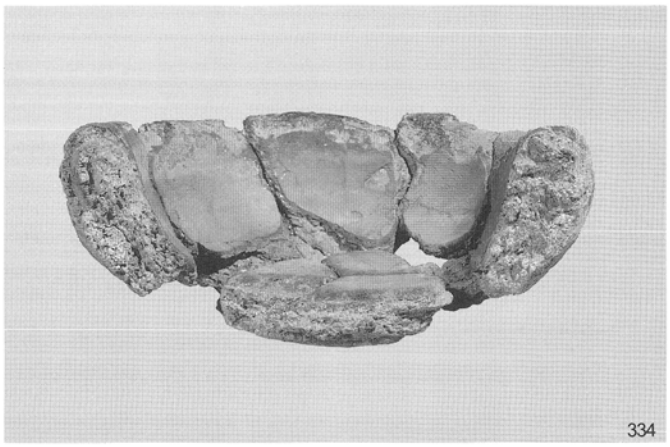
Fig. 83　生産関連遺物（340・341：1/2・他：1/3）

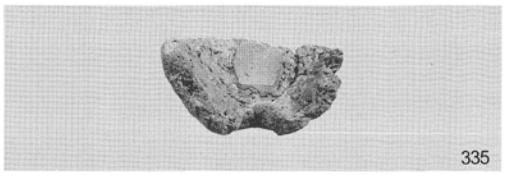
Tab. 2　鋳造関連遺物出土遺構一覧

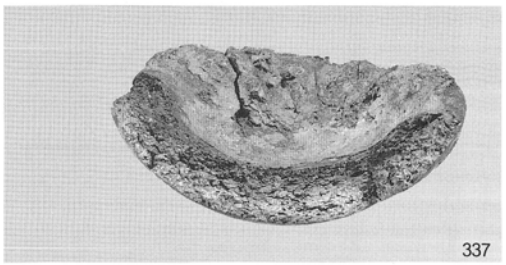
遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SK01	○	○		
SK02	○	○		○
SK04	○	○		○
SK05				○
SK06	○	○	○	○
SK08	○	○		
SK15		○	○	
SK16	○			
SK18	○	○	○	
SK20	○		○	
SD23			○	
SK43		○		
SK62				○

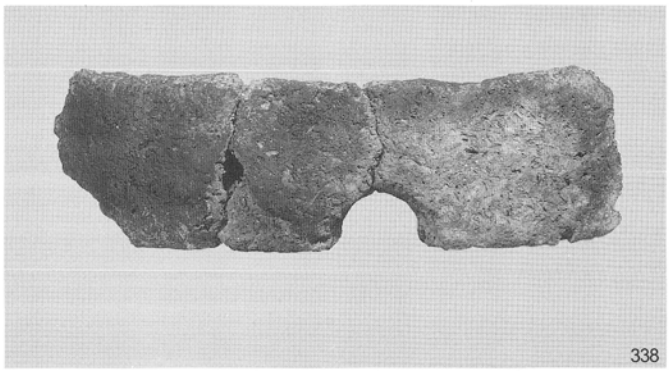
遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SK69				○
SK70	○			
SK71		○		
SE73		○		○
SD74				○
SE77	○			○
SK83	○			
SE107	○	○		
SE108		○		○
SE109	○	○		○
SK136				○
SK138			○	
SK170			○	

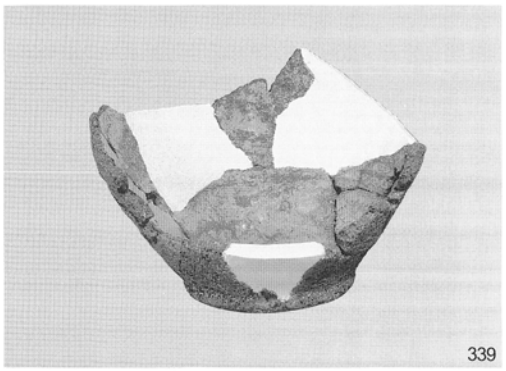
遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SE239	○	○	○	○
SK240		○		
SK252	○			○
SK253	○	○		
SE260		○		
SP77				○
SP159	○			○
SP178				○
SP229	○	○		
SP232	○			
SP274		○		











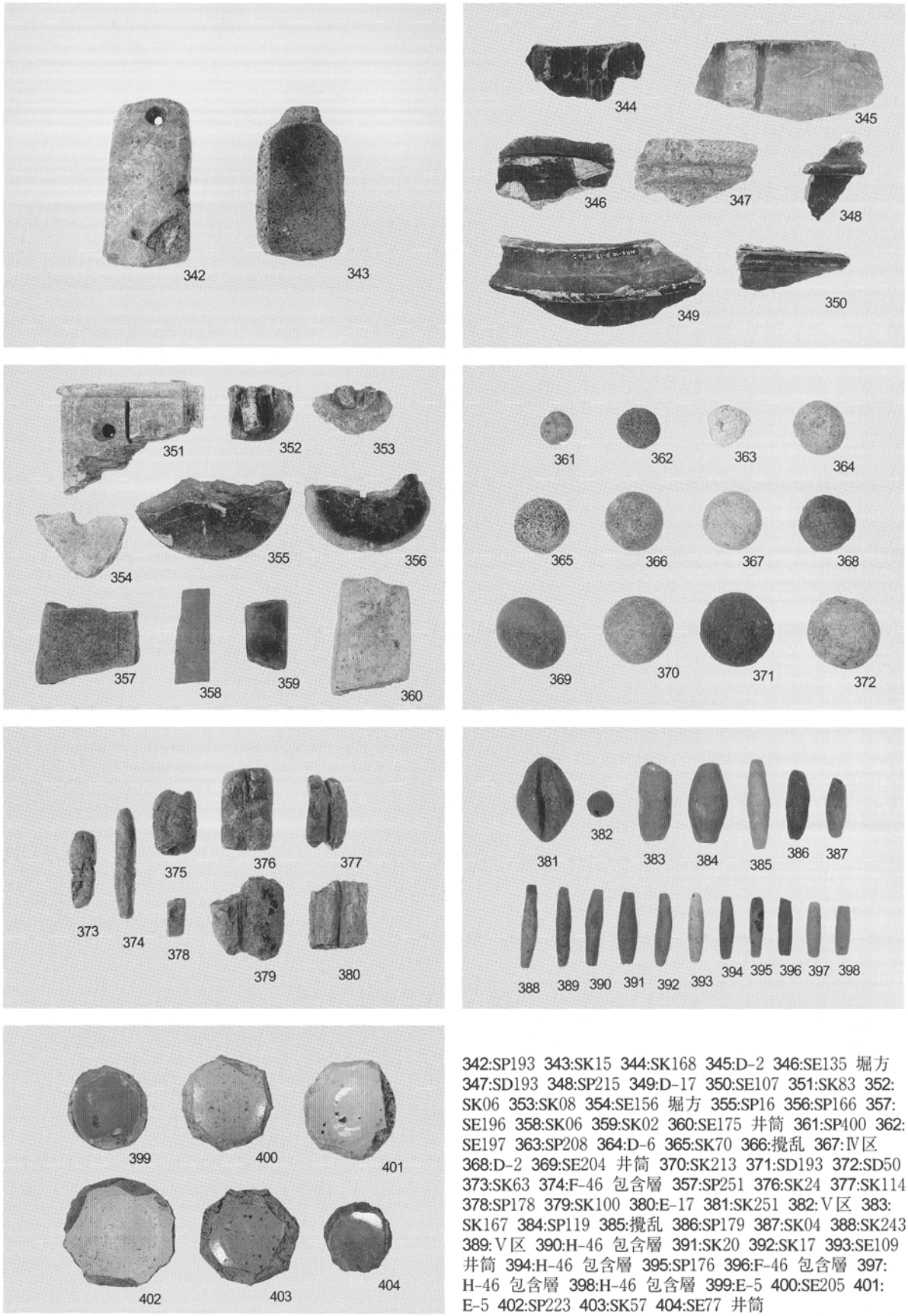
PL. 53　生産関連遺物（約1/4）

国陶器Ｃ群の壺であるが、内面に溶けたガラスが付着している。坩堝として使用されたものである。SK255出土。

青銅製品は２点出土した。340は鍋の注口であろう。湯がまわらずに本体にくっつかなかったものか。SE77出土。341は飾り金具か。縁を整形している。かるく湾曲する。SK05出土。

石製品・土製品

342は滑石製の権である。上端部に穿孔がある。一部欠損しており、残存重量は100ｇである。343も権である。瓦を磨いてつくられている。重量47ｇ。344～350は滑石製の石鍋である。344・345は縦に把手がつく。346～350は口縁下に鍔が削りだされる。351は用途不明の滑石製品。ブロック状の突起をもち、中央に穿孔する。352・353は滑石製石鍋を転用したコテ状製品。354～356は円盤の中央に穿孔する滑石製品である。ススが付着しており、石鍋の転用か。357～360は砥石である。361～372は石球である。砂岩製で369を除き、敲いて球状に整形している。361は13ｇ、372は124ｇ。373～380は石錘である。380を除き、滑石製である。375は中央に穿孔し、管状となる。そのほかは、紐を結ぶための溝をもつ。373・374・378は横方向、377・379・380は縦方向、376は縦、横十字に溝をつけている。381～398は土錘である。写真に示した以外にも多数あり、合計104点出土した。381は二面に紐を結ぶための溝がつけられる。重量71ｇ。382は球状の土錘で、中央に孔があく。重量６ｇ。383は太い管状の土錘である。重量24ｇ。384は管状の土錘で紡錘形を呈する。重量30ｇ。385～398は細身の管状の土錘である。写真に示さなかった他の土錘はすべてこのタイプである。重量は385が14ｇ、398が３ｇである。５ｇ前後のものが多い。399～404は陶磁器の底部を円盤状に打ち欠いて整形したものである。399と404が青磁碗、そのほかが白磁碗の底部である。



342:SP193 343:SK15 344:SK168 345:D-2 346:SE135 堀方 347:SD193 348:SP215 349:D-17 350:SE107 351:SK83 352:SK06 353:SK08 354:SE156 堀方 355:SP16 356:SP166 357:SE196 358:SK06 359:SK02 360:SE175 井筒 361:SP400 362:SE197 363:SP208 364:D-6 365:SK70 366:攪乱 367:Ⅳ区 368:D-2 369:SE204 井筒 370:SK213 371:SD193 372:SD50 373:SK63 374:F-46 包含層 357:SP251 376:SK24 377:SK114 378:SP178 379:SK100 380:E-17 381:SK251 382:Ⅴ区 383:SK167 384:SP119 385:攪乱 386:SP179 387:SK04 388:SK243 389:Ⅴ区 390:H-46 包含層 391:SK20 392:SK17 393:SE109 井筒 394:H-46 包含層 395:SP176 396:F-46 包含層 397:H-46 包含層 398:H-46 包含層 399:E-5 400:SE205 401:E-5 402:SP223 403:SK57 404:SE77 井筒

PL. 54　石製品・土製品（342・343：約1/2・他：約1/4）

銭

SD158の F－27グリッドで、溝の南の肩の部分から緡銭が出土した。SK159との重複部分にあたるため、SK159の遺物の可能性もある。埋納された様子はない。緡紐などの痕跡は残っていなかった。錆はそれほどひどくなく、剥離は容易であった。

銭の合計は91枚で、22種類の銭種が確認された。最古銭は開元通寶で、最新銭が永楽通寶である。また、永楽通寶が最多の21枚あり、洪武通寶の流通が多かったといわれる九州では、際だった組成を示す。東から連ねてある順に並べて表に示した（Tab. 3）。向きとは東から見て表か裏かをあらわしている。特に向きや順番に意図があるわけではなさそうである。

その他の出土銭はFig. 89に拓影を、Tab. 5に表を示した。中世の渡来銭が8枚、近世の寛永通寶が6枚、近代の銭が4枚、不明6枚である。折二銭である熙寧重寶が採集されている。

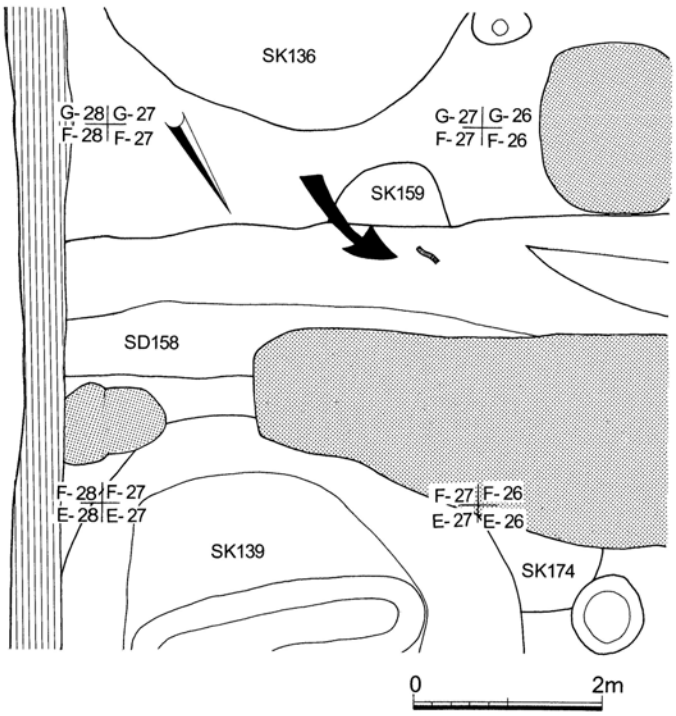


Fig. 84　SD158緡銭出土位置（1/40）

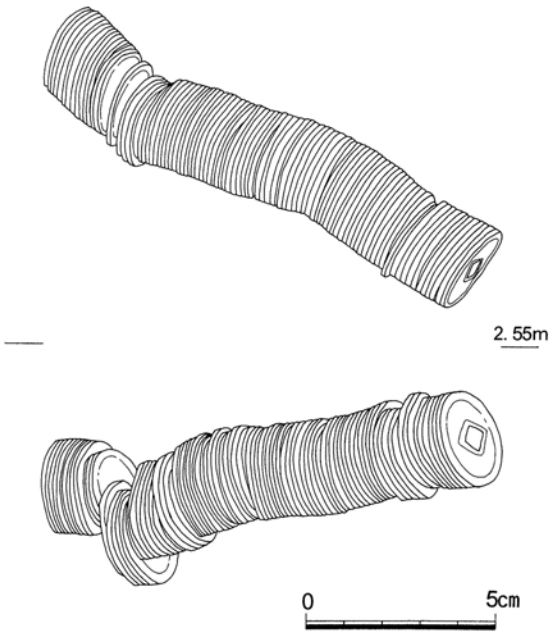
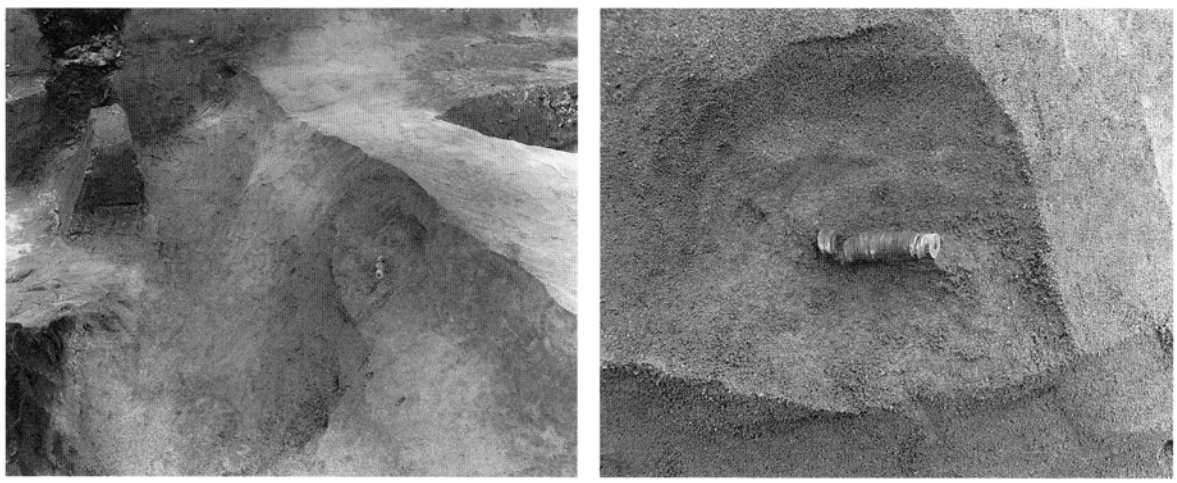


Fig. 85　SD158緡銭出土状況（1/2）



PL. 55　SD158緡銭出土状況（左：西から・右：北から）

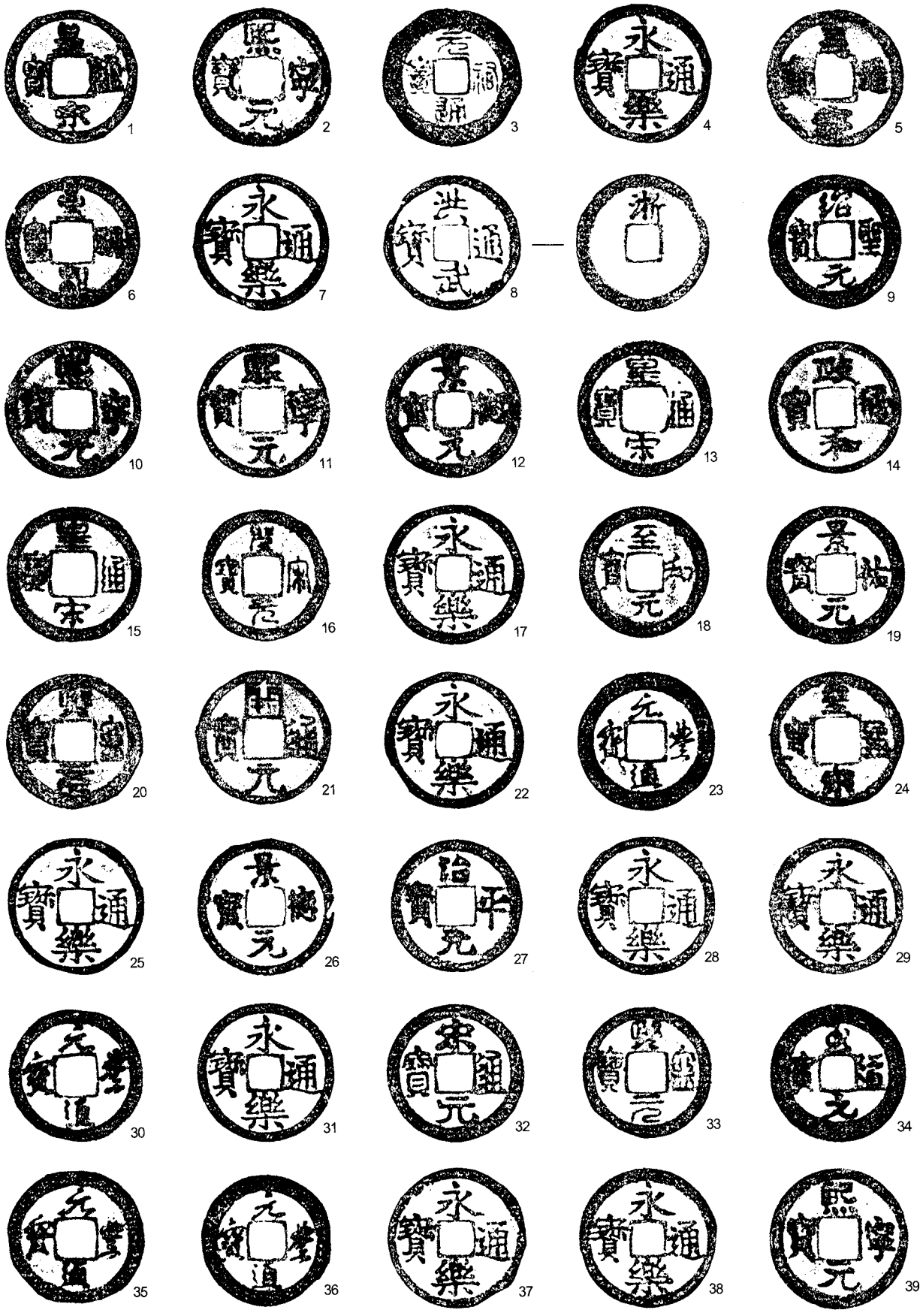


Fig. 86　SD158出土緡銭拓影　1　(1/1)

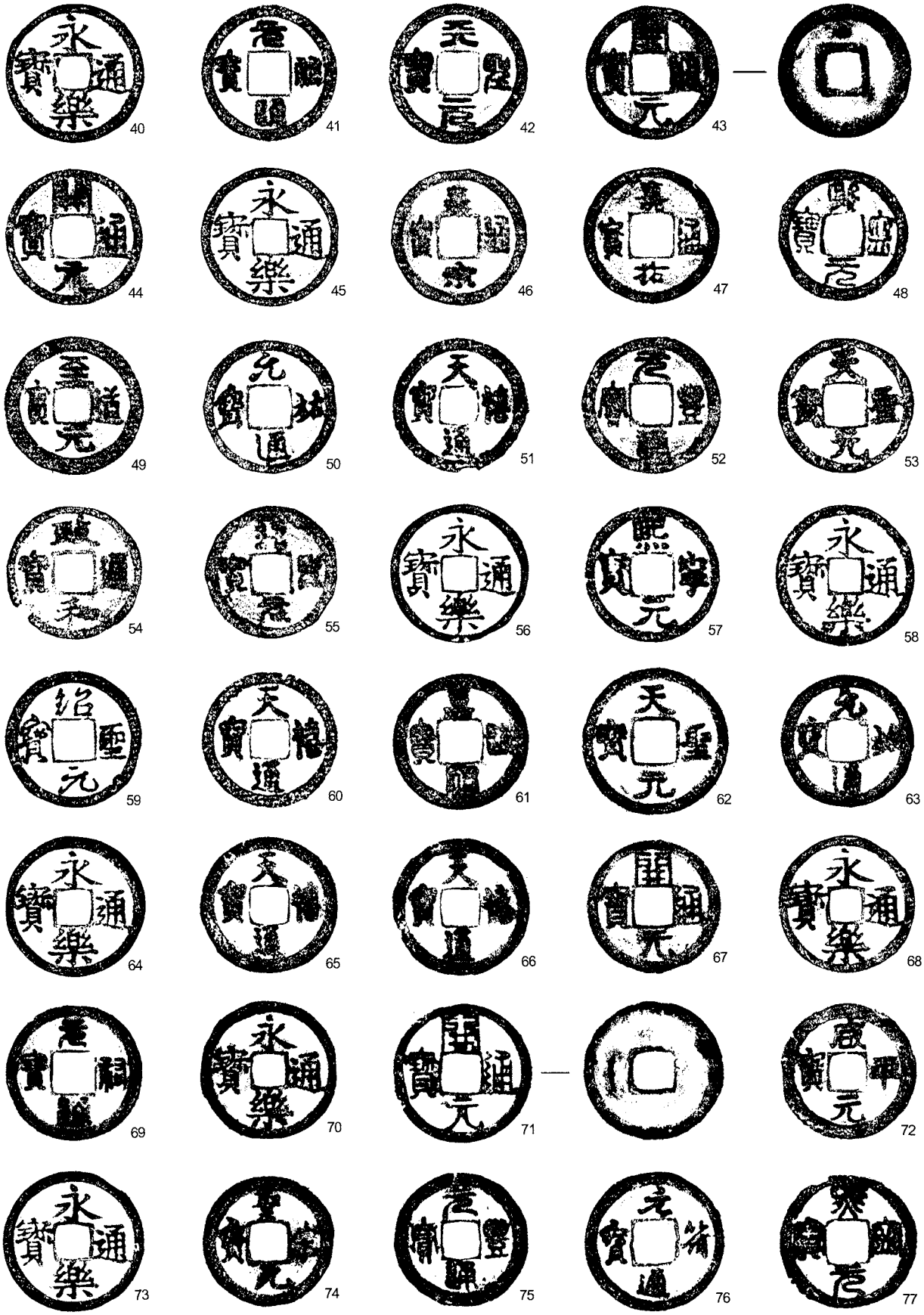


Fig. 87　SD158出土緡銭拓影　2　(1/1)

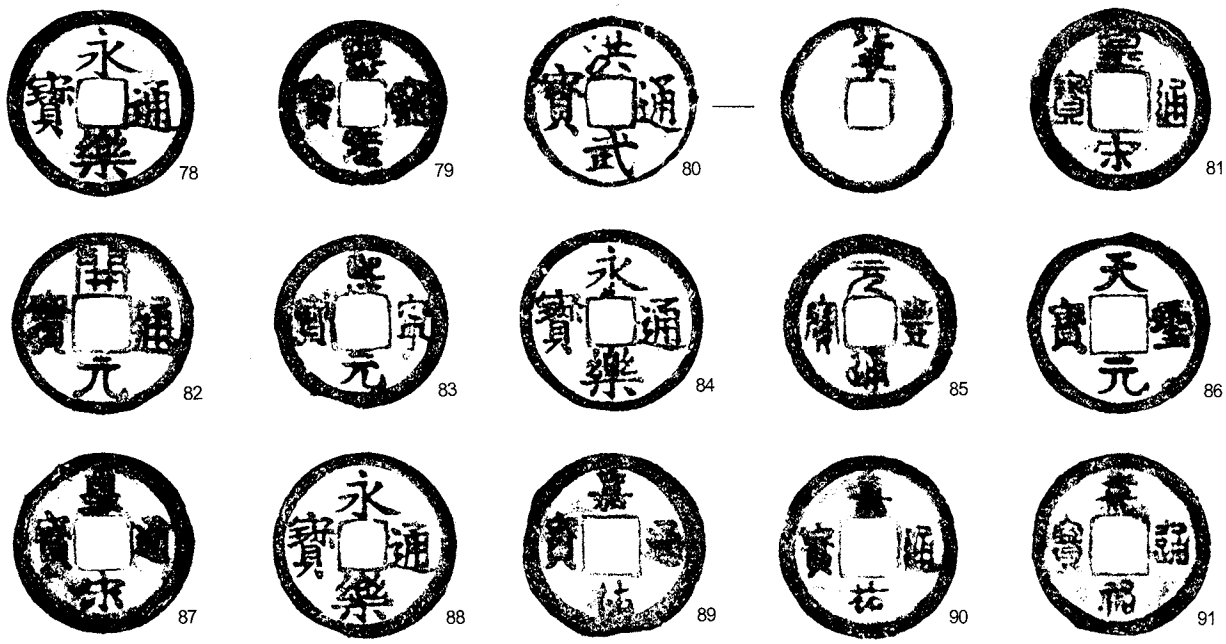


Fig. 88　SD158出土緡銭拓影　3　(1/1)

Tab. 3　SD158出土緡銭一覧

No	向き	銭貨名	書体	備考
1	裏	皇宋通寶	真書	
2	表	熙寧元寶	真書	星形孔
3	裏	元祐通寶	篆書	
4	裏	永楽通寶		
5	裏	皇宋通寶	真書	
6	表	至和通寶	篆書	
7	表	永楽通寶		
8	裏	洪武通寶		背浙
9	表	紹聖元寶	行書	
10	表	熙寧元寶	真書	
11	裏	熙寧元寶	真書	
12	表	景徳元寶		
13	裏	皇宋通寶	真書	
14	裏	政和通寶	分楷	
15	表	皇宋通寶	真書	
16	表	聖宋元寶	篆書	
17	裏	永楽通寶		
18	裏	至和元寶	真書	
19	裏	景祐元寶	真書	
20	裏	熙寧元寶	篆書	
21	裏	開元通寶		
22	裏	永楽通寶		
23	表	元豊通寶	行書	
24	裏	皇宋通寶	真書	
25	裏	永楽通寶		
26	裏	景徳元寶		
27	表	治平元寶	真書	
28	裏	永楽通寶		
29	表	永楽通寶		
30	裏	元豊通寶	行書	
31	裏	永楽通寶		

No	向き	銭貨名	書体	備考
32	裏	宋通元寶		
33	表	熙寧元寶	篆書	
34	表	至道元寶	行書	
35	表	元豊通寶	行書	
36	表	元豊通寶	行書	
37	裏	永楽通寶		
38	表	永楽通寶		
39	裏	熙寧元寶	真書	
40	裏	永楽通寶		
41	裏	元祐通寶	篆書	
42	表	天聖元寶	篆書	
43	表	開元通寶		背上星
44	表	開元通寶		
45	裏	永楽通寶		
46	表	皇宋通寶	真書	
47	裏	嘉祐通寶	真書	
48	表	熙寧元寶	篆書	
49	裏	至道元寶	真書	
50	表	元祐通寶	行書	
51	表	天禧通寶		
52	表	元豊通寶	篆書	
53	表	天聖元寶	真書	
54	裏	政和通寶	分楷	
55	裏	紹聖元寶	篆書	
56	表	永楽通寶		
57	裏	熙寧元寶	真書	
58	裏	永楽通寶		
59	表	紹聖元寶	行書	
60	表	天禧通寶		
61	表	嘉祐通寶	篆書	
62	裏	天聖元寶	真書	

No	向き	銭貨名	書体	備考
63	表	元祐通寶	行書	
64	裏	永楽通寶		
65	裏	天禧通寶		
66	表	天禧通寶		
67	裏	開元通寶		
68	表	永楽通寶		
69	表	元祐通寶	篆書	
70	表	永楽通寶		
71	裏	開元通寶		背左月
72	表	咸平元寶		
73	裏	永楽通寶		
74	表	聖宋元寶	行書	
75	表	元豊通寶	篆書	
76	裏	元符通寶	行書	
77	裏	熙寧元寶	篆書	
78	裏	永楽通寶		
79	裏	熙寧元寶	篆書	
80	表	洪武通寶		背北平
81	表	皇宋通寶	真書	
82	表	開元通寶		
83	裏	熙寧元寶		
84	裏	永楽通寶		
85	裏	元豊通寶	篆書	
86	裏	天聖元寶	真書	
87	裏	皇宋通寶	真書	
88	裏	永楽通寶		
89	表	嘉祐通寶	真書	
90	表	嘉祐通寶	真書	
91	表	嘉祐通寶	篆書	

Tab. 4　SD158出土縉銭銭貨名一覧

銭貨名	国名	初鋳年	枚数
開元通寶	唐	621	6
宋通元寶	北宋	960	1
至道元寶	北宋	995	2
咸平元寶	北宋	998	1
景徳元寶	北宋	1004	2
天禧通寶	北宋	1017	4

銭貨名	国名	初鋳年	枚数
天聖元寶	北宋	1023	4
景祐元寶	北宋	1034	1
皇宋通寶	北宋	1038	8
至和元寶	北宋	1054	1
至和通寶	北宋	1054	1
嘉祐通寶	北宋	1056	5

銭貨名	国名	初鋳年	枚数
治平元寶	北宋	1064	1
熙寧元寶	北宋	1068	11
元豊通寶	北宋	1078	7
元祐通寶	北宋	1086	5
紹聖元寶	北宋	1094	3
元符通寶	北宋	1098	1

銭貨名	国名	初鋳年	枚数
聖宋元寶	北宋	1101	2
政和通寶	北宋	1111	2
洪武通寶	明	1368	2
永楽通寶	明	1408	21

合計91枚

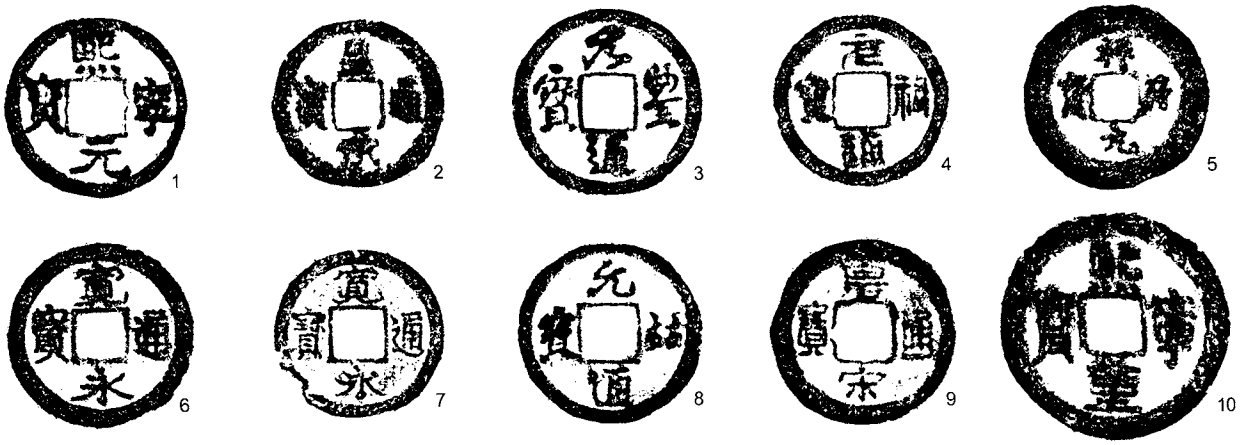


Fig. 89　出土銭拓影（1/1）

Tab. 5　出土銭一覧

遺構名	銭貨名	書体	国名	初鋳年	備考	拓影
SK08	熙寧元寶		北宋	1068	星形孔	Fig. 89－1
SK34	皇宋通寶		北宋	1038		Fig. 89－2
SK87	元豊通寶	行書	北宋	1078		Fig. 89－3
SE108堀方	元祐通寶	篆書	北宋	1086		Fig. 89－4
SK116	不明					
SK168	祥符元寶		北宋	1009		Fig. 89－5
SK168	寛永通寶		日本	1636	古寛永	Fig. 89－6
SK182	寛永通寶		日本	1697		
SK189	寛永通寶		日本	1697		
SK206	寛永通寶		日本	1697	1/2欠損	
SK223	一銭		日本	1917	大正六年	
SP378	寛永通寶		日本	1697		Fig. 89－7
SP459	不明					
I-5グリッド	元祐通寶	行書	北宋	1086		Fig. 89－8
H-24グリッド	一銭		日本	1875	明治八年	
攪乱	皇宋通寶		北宋	1038		Fig. 89－9
攪乱	寛永通寶		日本	1697		
攪乱	五銭		日本	1876	明治九年	
攪乱	一銭		日本	1919	大正八年	
攪乱	不明					
攪乱	不明					
攪乱	不明					
表採	熙寧重寶		北宋	1071		Fig. 89－10
表採	不明					

Ⅲ　まとめ

今回の10次調査地点は箱崎遺跡群の北部にあたるところで、遺跡群がのる砂丘の東端を確認することができた。

今回の調査でもっとも古い遺物は4世紀末～5世紀初頭頃の古式土師器の甕である。ローリングをあまり受けておらず、周辺に居住域が存在するものと考えられる。8次調査地点では少し先行する時期の竪穴住居2棟を検出しており、この頃箱崎遺跡群では東部に点々と人々の生活が始まったのであろう。東側は多々良川の河口から海が大きく入り込み、ラグーンとなっていたと思われる。

箱崎遺跡群ではこれまで報告されていなかった奈良時代の遺物も発見されたが、近世の井戸の堀方からの出土であり、この時期の様子は明らかでない。

本格的に生活痕跡が現れるのは12世紀からである。12世紀前半、発掘区の西部で小規模な土坑が現れ始める。また、東部では砂丘の落ち際に人骨と馬の骨の出土があった。岸でのたれ死んだのか、うち捨てられたのか、埋葬されずに放置されていたようである。

12世紀後半から遺構は爆発的に増加している。多くの土坑のほかに井戸が掘られはじめている。東端も陸地化していったようである。出土する遺物も博多と同様、青磁・白磁が多い。筥崎宮の貿易によるものであろうか。墨書陶磁器も出土し、5点に「誌」と書かれていた。中国人名かと思われる。筥崎宮と関連した中国商人であろうか。

また、鋳型や取瓶といった鋳造関連遺物が出土した。鍋の鋳型が多い。博多遺跡群でも鋳造関連の報告があるが、それより早い時期の遺物である。博多遺跡群の調査はまだほんの一部分であり、箱崎での鋳造が博多より先行しているとは言えないが、箱崎でも古い段階で操業を行なっているのは確実となった。残念ながら鋳造にかかわると考えられる遺構は発見できなかったが、遺物が西側に集中して出土していることを考えると、発掘区より西側に鋳造工房の存在を想定できる。

この頃の箱崎は貿易港と銅生産工房を持つ、独立した都市としての機能を持っていたと考えても良かろう。

13世紀にはいると遺構は減少し、14世紀にはみられなくなる。しかし周辺にはこの頃から板碑が立てられはじめる。板碑は遺跡の縁辺に分布しており、10次調査地点周辺の北部もこの頃は生活域から離れた場所になるのであろう。

15・16世紀は区画溝かと思われる溝があり、現在の町割りに沿った方向をとる。また、東部にこの頃の遺物が見つかっているが、量は少ない。溝から緡銭が出土したが、埋納の状況はなさそうなので、落とし物であろうか。

近世も後半になって再び遺構が増加し、現在に至っている。

以上、今回の調査の成果を時代を追って簡単にまとめた。ところで、近接する6次調査地点も12世紀後半の遺構が中心であった。北部地域の特徴であり、この時期筥崎宮の周辺で遺構が減少するのと対照的である。1151年（仁平元年）の大宰府官人による箱崎・博多の大追捕に関連した現象であろうか。荒廃した筥崎宮周辺の人々の一時避難の場所だったのではないかと考えるとおもしろい。

箱崎地区では区画整理が予定されており、これから多くの調査が行なわれる。今後、中世都市「箱崎」の姿が徐々に明らかになっていくであろう。

Tab. 6　遺構一覧

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SK01	楕円形土坑	H-3	12C後半	長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.8m。SK06、SK16、SK22を切る。SK02、SK07、SK52、SK56、SK68、SK69より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、同安青磁皿Ⅰ・Ⅱ、青白磁合子、白磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅷ、白磁水注、中国陶器A群盤・C群捏鉢、陶器、須恵器甕、土鍋、鋳型、取瓶、土師器高台付坏・皿、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK02	楕円形土坑	H・I-1・2	12C後半	長軸2.0m、短軸1.4m、深さ0.9m。SK06、SK67に切られる。SK07、SK52、SK68、SK69を切る。SK01より古。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ、白磁高台付皿Ⅱ、青白磁、青白磁合子、中国陶器A群盤・C群捏鉢、陶器、無釉陶器甕、土鍋、鋳型、取瓶、炉壁、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）、砥石、土錘
SE03	円形瓦組井戸	D～F-3～5	近代	長軸2.0m、短軸1.4mの楕円形の堀方に瓦を径0.7mの円形に組む。瓦組の下には円形の木桶を据える。SK20、SK36、SK37、SK38、SD50を切る。	堀方龍泉青磁碗Ⅰ、龍泉青磁皿Ⅰ、同安青磁碗、青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、白磁皿Ⅲ、白磁水注、肥前染付、国産陶磁、瓦質甕、瓦、土鍋、土師器坏
SK04	円形土坑	G・H-1・2	12C後半	東側上部、攪乱を受ける。残存部で径1.7m、深さ0.7m。SD23に切られる。SK46を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅴ・Ⅵ、白磁皿、中国陶器A群盤・B群四耳壺、陶器、瓦器椀、土鍋、鋳型、取瓶、炉壁、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK05	円形土坑	I・J-1	12C後半	西側発掘区外に伸びる。深さ0.8m。SK63に切られる。SK07、SK71を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、同安青磁皿Ⅲ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、白磁皿Ⅲ、陶器、土鍋、炉壁、青銅製品、土師器坏・皿（糸切り）
SK06	楕円形土坑	H・I-2・3	12C後半	北側上部攪乱を受ける。残存部で長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.9m。SK01に切られる。SK02、SK16、SK56を切る。SK07、SK52、SK68、SK69、SK71より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、中国陶器A群盤、陶器、東播系捏鉢、瓦器椀、鋳型、取瓶、羽口、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）、滑石製品、砥石、土錘
SK07	楕円形土坑	H・I-1	12C後半	西側発掘区外に伸びる。長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.6m。SK02、SK05に切られる。SK71を切る。SK01、SK06、SK63、SK67より古。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ、陶器、須恵器甕、土師器坏・皿（糸切り）
SK08	円形土坑	F・G-1・2	12C後半	径1.1m、深さ0.7m。西側発掘区外に伸びる。SD23に切られる。SK09を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、龍泉青磁皿Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅶ、白磁合子蓋、中国陶器A群盤・B群四耳壺・C群捏鉢、陶器水注、陶器、土鍋、鋳型、取瓶、坩堝、土師器坏・皿（糸切り）、滑石製品、土錘、銭
SK09	楕円形土坑	F・G-1・2	12C後半	長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.5m。SK08に切られる。SD23より古。	龍泉青磁碗Ⅰ、龍泉青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、白磁皿、中国陶器C群捏鉢、陶器、須恵質捏鉢、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK10	不整円形土坑	D・E-3	12C後半	長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.4m。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅴ、白磁皿、中国陶器A群盤・C群捏鉢、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK11	不整円形土坑	C・D-2	12C後半	長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.9m。SK14に切られる。SK28より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、青磁水注、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK12	楕円形土坑	C-2・3	12C	攪乱により底部のみ残存。残存部で、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.4m。	瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK13	楕円形土坑	C-3	12C後半	長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.7m。	同安青磁皿Ⅰ、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK14	楕円形土坑	C-2・3	12C後半	長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.6m。SK11を切る。	土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK15	円形土坑	H-1・2	12C後半	径0.7m。SK52を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、天目碗、中国陶器C群捏鉢、陶器、取瓶、羽口、土師器坏・皿（糸切り）
SK16	円形？土坑	H-2・3	12C後半	SK01、SK06に切られる。残存部で長軸0.5m、短軸0.4m、深さ0.3m。	鋳型
SK17	楕円形土坑	G-3	12C後半	SD23に切られる。長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.4m。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ、陶器、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK18	円形土坑	F・G-2・3	12C後半	径0.8m、深さ0.6m。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、同安青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅵ、中国陶器C群捏鉢、陶器、瓦器椀、土鍋、鋳型、取瓶、羽口、土師器坏・皿（糸切り）
SK19	円形土坑	F-1	12C	径0.7m、深さ0.2m。西側発掘区外に伸びる。SK57を切る。	白磁皿、土師器坏・皿（糸切り）
SK20	円形土坑	D・E-4・5	13C前半	径1.5m、深さ0.9m。北側上部攪乱を受ける。SE03に切られる。SK38を切る。	龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁皿Ⅱ、越州青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、白磁皿、中国陶器A群盤・C群捏鉢、東播系捏鉢、土鍋、鋳型、羽口、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）、土錘
SK21	楕円形土坑	G-3	12C後半	SD23に切られる。長軸0.7m、短軸は残存部で0.5m、深さ0.5m。	同安青磁碗、白磁碗、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK22	楕円形土坑	H-3	12C	SK01に切られる。長軸0.6m、短軸は残存部で0.4m、深さ0.3m。	瓦器皿
SD23	東西溝	G-1～6、H-6・7	16C	西側発掘区外に伸びる。確認した長さ12m、幅0.3m、深さ0.2m。一部攪乱を受ける。SK04、SK08、SK17、SK21、SK25、SK27、SK46、SK49、SK62を切る。SK75と切り合い不明。	龍泉青磁碗Ⅲ、同安青磁碗、白磁碗、中国陶器C群壺、瓦器椀、土鍋、羽口、土師器坏（糸切り）
SK24	円形土坑	D-6	12C	径1.0m、深さ0.2m。北側発掘区外に伸びる。	白磁碗Ⅸ、土師器坏（糸切り）、石錘
SK25	円形土坑	G-2	12C後半	径1.0m、深さ0.5m。SD23に切られる。	青磁碗、白磁碗、白磁皿、土師器坏・皿（糸切り）
SK26	隅丸方形土坑	G-4・5	12C後半	東側攪乱を受ける。長軸1.5m以上、短軸0.8m、深さ0.3m。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅸ、陶器、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK27	楕円形土坑	G・H-4・5	12C後半	長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.6m。SD23に切られる。	同安青磁碗Ⅱ、同安青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅳ、青白磁、陶器、瓦器椀、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK28	楕円形土坑	D-2	12C	長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.4m。SK11より古。	白磁高台付皿Ⅱ、白磁平底皿Ⅲ、瓦器椀・土師器坏・皿（糸切り）
SK29	楕円形土坑	D-1	12C後半	西側発掘区外に伸びる。長軸0.7m、短軸0.3m以上、深さ0.2m。SK30、SK32を切る。SK31より新。	白磁碗Ⅵ、土師器坏・皿（糸切り）
SK30	円形土坑	D-1・2	12C後半	径0.7m、深さ0.3m。西側発掘区外に伸びる。SK29に切られる。SK31を切る。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅸ、白磁皿Ⅲ、土師器坏・皿（糸切り）
SK31	楕円形土坑	D-1・2	12C	長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.4m。SK30に切られる。SK29より古	白磁碗Ⅴ、天目碗、土師器坏・皿（糸切り）
SK32	円形土坑	D・E-1・2	12C後半	径1.0m、深さ0.6m。SK29に切られる。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅴ、高麗青磁、天目碗、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK33	楕円形土坑	E-1	12C後半	西側発掘区外に伸びる。長軸0.6m以上、短軸0.5m、深さ0.2m。SK34を切る。	

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SK34	楕円形土坑	E・F-1・2	12C後半	西側発掘区外に伸びる。東側攪乱を受ける。長軸1.5m以上、短軸1.4m、深さ0.9m。SK33、SK39、SK40に切られる。SK57を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ、白磁皿、陶器、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）、銭
SK35	楕円形土坑	G-5・6	12C後半	長軸0.6m、短軸0.4m、深さ2cm。SK64に切られる。	白磁碗Ⅳ、白磁皿、白磁平底皿Ⅲ、鉄刀
SK36	楕円形土坑	E・F-3	12C	SD53に上部を切られる。長軸0.8m以上、、短軸0.6m、残存部深さ0.2m。SE03、SK42、SK47、SD50、SK59より古。	
SK37	楕円形土坑	F-4	12C	長軸0.7m以上、短軸0.8m以上、深さ0.4m。SE03、SD53に切られる。SK42、SK47、SD50、SK59より古。	白磁碗、瓦器椀、土師器皿（糸切り）
SK38	円形？土坑	E-5	12C	SE03、SK20に切られる。残存部径0.9m、深さ0.2m。	瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK39	円形土坑	E・F-2	12C後半	径0.6m、深さ0.2m。SK34、SK40、SK57を切る。	土師器坏（糸切り）
SK40	楕円形土坑	E・F-1・2	12C後半	長軸0.5m以上、短軸0.5m。SK39に切られる。SK34、SK57を切る。	白磁碗、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK41	不整円形土坑	F-2・3	12C	径0.7m、深さ0.4m。	瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK42	楕円形土坑	F-3・4		長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.2m。SD53を切る。	瓦質鉢
SK43	隅丸方形土坑	G-4・5	12C	長軸0.9m、短軸0.4m、深さ0.3m。	白磁皿、取瓶
SK44	長楕円形土坑	I-3・4	12C	長軸1.2m、短軸0.3m、深さ0.1m。	白磁皿Ⅲ、陶器
SK45	隅丸方形土坑	I-4	12C後半	南側攪乱を受ける。長軸1.3m以上、短軸0.3m、深さ0.2m。	龍泉青磁碗Ⅰ、青磁皿、白磁碗Ⅴ、陶器、平瓦、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK46	楕円形？土坑	G・H-1	12C前半	長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.4m。西側発掘区外に伸びる。SK04、SD23に切られる。	龍泉青磁0、白磁碗、白磁皿、白磁皿Ⅲ、中国陶器C群捏鉢、土師器坏・皿（糸切り）
SK47	円形土坑	F・G-6・7		径0.5m、深さ0.6m。SD53を切る。	同安青磁碗、白磁碗、瓦、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK48	楕円形土坑	G-6・7	12C前半	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.7m。	白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ、四耳壺、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK49	円形？土坑	G・H-5	12C後半	径0.9m、深さ0.3m。東側攪乱を受ける。SD23に切られる。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ、白磁皿Ⅲ、陶器、土師器坏・皿（糸切り）
SD50	東西溝	E・F-3～12	16C	幅0.5～1.7m、深さ0.2m。一部攪乱を受ける。東側発掘区外に伸び、SD84と接続か。SE03に切られる。SD53、SK251、SK254、SK256を切る。SK36、SK37、SK58、SK65、SK246、SK247、SK250、SK252、SK253、SK255、SK257、SK265より新。	龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ、同安青磁碗Ⅱ、青磁皿、口禿白磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ、白磁水注、中国陶器B群壺・C群捏鉢、陶器、天目碗、須恵器甕、東播系捏鉢、瓦質擂鉢、瓦、瓦器椀、土鍋、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）・皿（糸切り）、石球、土錘
SB51	掘立柱建物	F・G-2～4	12C	1×2間分確認。SD23に切られる。	
SK52	楕円形土坑	H-2	12C後半	長軸0.6m以上、短軸0.8m、深さ0.7m。SK02、SK15に切られる。SK01、SK06、SK67より古。	
SD53	東西溝	F-3～7	13C	幅1.6～2.5m、深さ0.3m。SE03、SK42、SK47、SD50、SK59に切られる。SK36、SK37、SK58、SK65を切る。	青磁碗、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁皿、陶器、瓦、丸瓦、土師器坏（糸切り）
SK54	不整円形土坑	C-1・2	12C後半	長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2m。	龍泉青磁碗Ⅰ、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK55	楕円形土坑	B・C-1・2	12C	長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.1m。西側発掘区外に伸びる。	瓦器椀
SK56	楕円形土坑	H・I-3	12C前半	長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.3m。SK06に切られる。SK01より古。	白磁碗、土師器皿（糸切り）
SK57	円形？土坑	F-1・2	12C前半	西側発掘区外に伸び、北側は他の遺構に切られ形態不明。深さ0.3m。SK19、SK34、SK39、SK40に切られる。SK33より古。	白磁碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK58	楕円形土坑	E-6	12C前半	長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.6m。SD53に切られる。SE03、SK42、SK47、SD50、SK59より古。	白磁碗、白磁碗Ⅳ、白磁平底皿Ⅳ、中国陶器A群盤、瓦器椀、土師器皿（糸切り）
SK59	楕円形土坑	F-5・6		東側プランは確認できなかった。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.3m。SD53、SK64、SK65を切る。SK35、SK36、SK37、SK58、SD50、SK251、SK254、SK256より新。	青白磁合子蓋、瓦
SK60	不整円形土坑	I-5	12C	長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.2m。	中国陶器C群捏鉢、土師器坏・皿（糸切り）
SK61	楕円形土坑	H-6・7	12C後半	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.7m。	青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅸ、高麗青磁碗、陶器、平瓦、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK62	不整円形？土坑	G・H-5・6	12C後半	攪乱を受け、形態不明。径1.9m、深さ0.3m。SD23に切られる。SK66を切る。	中国陶器C群捏鉢、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）
SK63	円形？土坑	I・J-1・2	12C後半	上部攪乱を受け、形態不明。径0.9m、深さ0.5m。南側発掘区外に伸びる。SK05、SK71を切る。SK07より新。	陶器、土師器坏（糸切り）、石錘
SK64	円形？土坑	F・G-5・6	12C後半	径0.6m、深さ0.5m。SK59に切られる。SK35を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁鉢、白磁碗白磁碗Ⅴ・Ⅸ、白磁皿、中国陶器C群捏鉢、瓦器椀
SK65	円形土坑	F-6		径0.7m、深さ0.6m。SD53、SK59に切られる。SE03、SK42、SK47、SD50より古。	土師器坏・皿（糸切り）
SK66	楕円形？土坑	G・H-5	12C	攪乱とSK62に切られ、形態不明。残存部で長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.4m。SD23より古。	瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK67	楕円形土坑	I-2	12C後半	長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.4m。SK02、SK68を切る。SK07、SK52、SK69、SK71より新。	白磁碗、陶器、土師器坏（糸切り）
SK68	円形？土坑	I-2	12C前半	残存径0.4m、深さ0.3m。SK02、SK67に切られる。SK01、SK06より古。	白磁碗Ⅳ・Ⅴ、土師器坏（糸切り）
SK69	円形土坑	I-2・3	12C後半	径1.1m、深さ0.2m。SK02に切られる。SK01、SK06、SK67より古。	龍泉青磁碗、同安青磁碗Ⅱ、龍泉青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ、陶器、瓦器椀、土鍋、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）
SK70	不整円形土坑	I・J-2・3	12C後半	長軸1.6m、短軸1.0m以上、深さ0.6m。南側発掘区外に伸びる。	同安青磁碗Ⅱ、同安青磁皿Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅷ・Ⅸ、陶器、瓦器椀、土鍋、鋳型、土師器坏・皿（糸切り）、石球
SK71	楕円形土坑	I-1・2	12C後半	長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.4m。SK05、SK07、SK63に切られる。SK01、SK02、SK06、SK67より古。	白磁碗、瓦器椀、取瓶、土師器坏（糸切り）
SK72	円形？土坑	H・I-5	12C	径0.7m、深さ0.3m。東側攪乱を受ける。	土師器坏（糸切り）

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SE73	円形井戸	I・J-7・8	13C後半	堀方径2.6m。南側発掘区外に伸びる。北側攪乱を受ける。井筒は確認されなかった。SE77を切る。SK87、SK125より新。	井筒　白磁碗、白磁碗Ⅵ、白磁Ⅲ、須恵器甕、取瓶、土師器坏・皿（糸切り）、土錘　堀方　龍泉青磁碗Ⅰ・小碗Ⅲ、龍泉青磁皿、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、白磁水注、中国陶器A群盤、陶器、瓦器椀、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）
SD74	東西溝	H-8～13	15C	長さ9.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.1m。SK78、SK87、SE107、SE108、SE109、SK258、SK262を切る。SK125、SE260、SK261、SE263、SK259より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、中国陶器C群捏鉢、丸瓦、平瓦、土鍋、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK75	隅丸方形？土坑	H・I-7・8	13C後半	南側攪乱を受ける。長軸2.0m以上、短軸1.6m、深さ0.6m。SK83に切られる。SK76を切る。SD23と切り合い不明。北側に骨片集中。	龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ・Ⅸ、白磁皿、陶器、東播系捏鉢、丸瓦、平瓦、火舎、瓦質擂鉢、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK76	楕円形？土坑	H・I-8	12C	長軸0.7m。SK75に切られる。	白磁碗、白磁碗Ⅵ、土師器坏（糸切り）
SE77	円形桶組井戸	H～J-8・9	13C前半	径3.0mの堀方に径0.5mの木桶を据える。南側発掘区外に伸びる。西側攪乱を受ける。SE73に切られる。SK87、SK125を切る。	井筒　鋳型、炉壁、土師器高台付皿・坏（糸切り）　堀方　龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁碗、同安青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ、白磁皿、青白磁合子、瓦器椀、青銅未製品、土師器坏・皿（糸切り）
SK78	楕円形？土坑	H-9	12C	長軸1.3m、短軸0.4m残存、深さ0.2m。SD74に切られる。	白磁碗、土師器
SK79	楕円形土坑	H・I-13	12C後半	長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.3m。SK81、SK117を切る。	白磁碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK80	隅丸方形土坑	H・I-14・15	12C後半	長軸2.5m、短軸1.6m、深さ0.2m。SK128、SK129を切る。	同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅱ、白磁皿、瓦、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK81	隅丸方形土坑	H-13・14	12C後半	長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.3m。SK79、SD82に切られる。SK90、SK136より古。	同安青磁碗、白磁碗、陶器、瓦、土師器坏（糸切り）
SD82	東西溝	H-13～28	16C	東側発掘区外に伸びる。30m確認。幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3m。SD84と平行SK90、SK136に切られる。SK81、SK88、SK89、SK129を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、白磁皿、瓦、平瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK83	円形土坑	H・I-7	13C後半	径0.6m、深さ0.7m。SK75を切る。	鋳型、滑石製品
SD84	東西溝	F-15～23	16C	西側発掘区外に伸びる。SD50と接続か。16m確認。幅0.4～0.8m、深さ0.1m。SD82と平行。	龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁碗Ⅱ、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、白磁皿、青白磁合子蓋、中国陶器C群捏鉢、瓦器椀、陶器、須恵器甕、土師器高台付坏・坏（ヘラ切り・糸切り）・皿（糸切り）
SE85	円形瓦組井戸	C・D-16・17	近世	径1.3mの堀方に、瓦を径0.7mの円形に組んで井筒とする。、北側発掘区外に伸びる。SK110、SK124を切る。	肥前染付、七輪、瓦、土師器坏（糸切り）
SK86	楕円形土坑	D・E-16	12C後半	長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.3m。SD104を切る。SK112より新。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ、白磁皿、緑釉陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK87	円形？土坑	H-8・9	12C前半	径0.8m、深さ0.5m。SD74、SE77、SE109に切られる。SE73より古。	白磁碗Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅸ、白磁皿Ⅱ、中国陶器A群盤、瓦器椀、土師器皿（糸切り）、銭
SK88	楕円形？土坑	H-15・16	12C後半	長軸1.7m、短軸1.2m、深さ0.7m。北側発掘区外に伸びる。SD82に切られる。SK90、SK136より古。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ、白磁皿、須恵器甕、瓦器椀・土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK89	円形？土坑	H-16	12C後半	径1.2m、深さ0.6m。SD82に切られる。SK90、SK136より古。	青磁、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ、白磁皿Ⅵ、中国陶器C群捏鉢、陶器、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK90	長楕円形土坑	H-17	近世	長軸0.9m、短軸0.3m、深さ0.1m。SD82を切る。SK81、SK88、SK89、SK129より新。	陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SD91	東西溝	F・G-17・18	12C後半	長さ2.9m以上、幅0.7m、深さ0.4m。長楕円形土坑か。SD84に切られる。SK92を切る。	青磁碗、白磁碗、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK92	円形？土坑	F・G-17・18	12C	径0.1m、深さ0.3m。SD91に切られる。SK131を切る。	陶器、瓦、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK93	楕円形土坑	F-17	12C後半	長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.5m。SD84に切られる。	同安青磁碗Ⅰ、白磁碗Ⅴ、陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK94	楕円形土坑	F-17・18	12C	長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.6m。SD84に切られる。SD104を切る。	須恵器甕、陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）、土錘
SK95	円形土坑	E-17	12C	径0.8m、深さ0.7m。SK96、SK130を切る。	土師器坏（糸切り）
SK96	楕円形土坑	E-17	12C	長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.3m。SK95に切られる。SD104を切る。	土師器坏（糸切り）
SK97	楕円形土坑	D・E-17	12C後半	長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.5m。SK111に切られる。SK98を切る。	白磁碗、白磁碗Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK98	円形土坑	D・E-17・18	12C後半	径1.0m、深さ0.8m。SK97、SK99、SK111に切られる。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK99	楕円形土坑	E-18	12C後半	長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.2m。SK98、SK100を切る。SK101、SK102より新。	白磁碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK100	楕円形土坑	D・E-18	12C後半	長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.2m。SK99に切られる。SK101を切る。SK102より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ、白磁皿、陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）、石錘
SK101	楕円形土坑	D・E-18	12C	長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.4m。SK100に切られる。SK102を切る。SK99より古。	東播系捏鉢、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK102	円形土坑	E-18・19	12C	径0.8m、深さ0.4m。SK101に切られる。	中国陶器B群四耳壺、瓦器椀、土師器皿（糸切り）
SK103	円形土坑	C・D-18・19	12C前半	径1.5m、深さ0.3m。	白磁碗、白磁碗Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SD104	溝	E・F-16～18	12C前半	4.8m確認。幅0.5m～0.8m。深さ0.1m。SD84、SK86、SK94、SK96に切られる。SK112、SK131を切る。SK95より古。	瓦器椀、土師器甕、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK105	楕円形土坑	I-17・18	16C	長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.3m。SK106、SK127を切る。	白磁、須恵器甕、陶器、染付、土鍋、土師器坏（糸切り）
SK106	楕円形土坑	H・I-17・18	12C後半	長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.4m。SK105に切られる。	同安青磁碗Ⅱ、青磁、白磁碗、陶器、土鍋、土師器坏（糸切り）
SE107	円形桶組井戸	G・H-9・10	13C後半	径3.0mの堀方に径0.6mの木桶を据える。SD74、SK78に切られる。SE108、SE109を切る。	井筒　同安青磁碗、鋳型、取瓶　堀方　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、同安青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、高麗青磁碗、越州青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ、白磁皿、白磁水注、中国陶器C群捏鉢、陶器、瓦器椀、土鍋、鋳型、取瓶、土師器坏・皿（糸切り）、石鍋、土錘
SE108	円形桶組井戸	G・H-9～11	12C末～13C初	径3.5mの堀方に径0.5mの木桶を据える。SD74、SE107に切られる。SE109を切る。	井筒　龍泉青磁碗Ⅰ、青磁碗、土鍋、炉壁、土師器坏（糸切り）　堀方　龍泉青磁碗Ⅰ、龍泉青磁皿Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、天目碗、東播系捏鉢、須恵器甕、火舎、瓦器椀、土鍋、取瓶、炉壁、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）、銭

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SE109	円形桶組井戸	G･H-8･9	12C後半	径3.0～3.6mの堀方に径0.7mの木桶を据える。SD74、SK78、SE107、SE108、SE239に切られる。	井筒　龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ、陶器、須恵器甕、鋳型、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）、土錘　堀方　同安青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、高麗青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、陶器甕、須恵器甕、東播系捏鉢、須恵器、瓦器椀、鋳型、取瓶、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK110	円形土坑	D-16	12C後半	径1.1m、深さ0.5m。北側攪乱を受ける。SE85に切られる。	龍泉青磁碗、同安青磁碗、青白磁、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ、白磁皿、陶器、中国陶器Ｂ群四耳壺、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK111	円形土坑	D・E-17		径0.6m、深さ0.5m。SK97、SK98を切る。	
SK112	楕円形？土坑	F-18	12C前半	長軸0.6m以上、短軸0.7m、深さ0.2m。SD84、SD104に切られる。SK131を切る。	土鍋、土師器坏（糸切り）
SK113	円形土坑	E・F-19	12C後半	径0.6m、深さ0.3m。	同安青磁碗、同安青磁皿、白磁碗、土師器坏（糸切り）、土錘
SK114	円形？土坑	F・G-19	12C後半	径1.8m、深さ0.8m。南側攪乱を受ける。	同安青磁碗、瓦、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、石錘
115	欠番				
SK116	楕円形土坑	H・I-18・19	12C後半	長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.7m。SK120に切られる。SK126、SK127を切る。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅸ、瓦、軒平瓦、土師器坏・皿（糸切り）、銭
SK117	楕円形土坑	I-13	12C後半	径2.1m、深さ0.4m。SK79に切られる。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ、白磁皿、陶器、須恵器甕、土師器坏（糸切り）、七錘
SK118	楕円形土坑	H・I-12		長軸1.0m。短軸0.7m、深さ0.3m。	土師器坏（糸切り）
SK119	楕円形土坑	I・J-11	12C後半	南側発掘区外に伸びる。長軸1.6m、短軸0.9m以上、深さ0.5m。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅸ、中国陶器Ａ群盤、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK120	円形土坑	H・I-18	12C	径0.6m、深さ0.4m。SK116、SK126を切る。SK127より新。	陶器、土師器坏（糸切り）
SK121	楕円形土坑	H-18	12C	長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.5m。SK126を切る。	白磁碗、土師器坏（糸切り）
SK122	土坑	F-19・20	12C	径1.0m以上。深さ0.4m。SK114、SK150に切られる。	白磁、丸瓦、平瓦、土師器坏（糸切り）
SK123	円形？土坑	I・J-17	12C後半	径1.0m、深さ0.5m。南側発掘区外に伸びる。	同安青磁碗、青白磁合子蓋、白磁碗、須恵器甕、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK124	円形？土坑	C・D-17	12C	径1.1m、深さ0.7m。北側発掘区外に伸びる。SE85に切られる。	白磁碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK125	楕円形？土坑	H-9	12C	径0.8m、深さ0.3m残存。SE77、SE109に切られる。SE73、SD74、SK78より古。	瓦器椀
SK126	楕円形土坑	H-18	12C	長軸1.1m、短軸0.6m以上、深さ0.1m。SK116、SK120、SK121に切られる。	
SK127	楕円形土坑	I-18	12C	長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.3m。SK105、SK116に切られる。SK120より古。	
SK128	円形土坑	H-14	12C	径1.0m、深さ0.3m。SK80に切られる。	
SK129	円形？土坑	H-14	12C	径0.9m、深さ0.1m。SK80、SD82に切られる。SK90、SK136より古。	
SK130	円形？土坑	E-17･18	12C	径0.7m、深さ0.1m。SK95に切られる。	
SK131	不整円形土坑	F-18	12C	長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.9m。SD84、SK92に切られる。	瓦器椀、土師器坏（糸切り）
132	欠番				
SK133	不整円形土坑	C-25･26	12C後半	長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.3m。東側攪乱を受ける。	同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅵ、白磁皿、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK134	円形？土坑	B・C-24～26	12C後半	北側発掘区外に伸びる。径2.5m以上、深さ0.6m。	龍泉青磁碗Ⅰ、龍泉青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SE135	円形瓦組井戸	B・C-22～24	近世	径4.5mの堀方に瓦を径0.8mの円形に組む。北側発掘区外に伸びる。SK143、SE156を切る。	堀方　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ、同安青磁碗Ⅱ、越州青磁水注、白磁碗、肥前染付、越州青磁碗、瓦質土器、火舎、瓦、土師器高台付坏・坏（糸切り）、石鍋
SK136	円形土坑	G・H-27・28	近世	径2.3m、深さ0.5m。西側攪乱を受ける。覆土中に貝層あり。SD82を切る。SK81、SK88、SK89、SK129より新。	龍泉青磁碗Ⅱ、青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ、青白磁碗、肥前染付、唐津陶器、硯、土鍋、瓦、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）
SK137	円形？土坑	B-26･27	近世	径1.9m、深さ0.4m。北側発掘区外に伸びる。南側攪乱を受ける。	白磁碗、肥前染付、土師器坏・皿（糸切り）
SK138	円形土坑	C・D-27	16C	径1.2m、深さ0.4m。南側攪乱を受ける。	青磁碗、白磁碗、明染付、瓦、羽口
SK139	楕円形土坑	D～F-26～28	近世	長軸3.4m、短軸2.5m、深さ0.7m。東側発掘区外に伸びる。SK173、SK174を切る。	青磁碗、越州青磁水注、白磁碗、肥前染付、瓦器椀、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK140	楕円形土坑	F・G-24・25	16C	長軸2.2m、短軸1.8m、深さ0.7m。東側攪乱を受ける。SK141、SD158を切る。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ、青白磁、中国陶器Ａ群盤、瓦器椀、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK141	楕円形？土坑	E・F-25	12C後半	長軸1.0m以上。短軸1.1m。SK140に切られる。	青磁皿、白磁碗Ⅳ、土師器坏・皿（糸切り）
SK142	楕円形土坑	E-23		長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.6m。	土師器坏・皿（糸切り）
SK143	楕円形？土坑	C-22･23	近世	長軸1.7m以上、短軸1.2m、深さ0.9m。SE135に切られる。SE156を切る。	青磁、白磁碗、肥前染付、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK144	不整円形土坑	C-22		径0.8m、深さ0.2m。	
SK145	長楕円形土坑	C-21	13C前半	長軸1.1m、短軸0.4m、深さ0.3m。南側攪乱を受ける。	龍泉青磁碗Ⅱ、白磁碗、瓦、土師器坏（糸切り）
SK146	楕円形土坑	D・E-21		長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.2m。東側攪乱を受ける。	土師器坏（糸切り）
SK147	楕円形土坑	E・F-21	12C	長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.4m。SK148を切る。	中国陶器Ａ群盤、天目碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK148	楕円形？土坑	E-21	12C	長軸1.0m以上、短軸0.9m、深さ0.3m。SK147、SK149に切られる。	土師器坏（糸切り）
SK149	楕円形土坑	E・F-20・21	12C後半	長軸2.1m、短軸1.6m、深さ0.4m。SK150に切られる。SK148を切る。	同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、土師器坏（糸切り）
SK150	楕円形土坑	F・G-20	12C後半	長軸1.6m、短軸1.4m、深さ0.8m。SK122、SK149、SK151を切る。SK170、SK171より新。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ、陶器、土師器坏・皿（糸切り）
SK151	楕円形土坑	F・G-20・21	12C後半	長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.5m。SK150に切られる。SK170、SK171を切る。	青磁、陶器、瓦器椀、瓦、土師器坏（糸切り）
SK152	不整円形土坑	F・G-22		長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.3m。SD84を切る。	瓦器椀、土鍋、土師器坏（糸切り）

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SK153	楕円形土坑	G-24		長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.2m。	瓦器椀、土師器高台付坏・坏（糸切り）
SK154	円形？土坑	G-26	12C	径0.8m、深さ0.3m。東側、西側攪乱を受ける。深さ0.3m。	白磁碗、白磁碗Ⅳ、陶器、土師器皿（糸切り）
SK155	隅丸方形土坑	D・E-22	近世	長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.3m。SK157を切る。	白磁碗、白磁碗Ⅶ、肥前染付、火鉢、土鍋、土師器坏（糸切り）
SE156	円形桶組井戸	C・D-22～24	12C後半	SE135に切られる。堀方径0.3m。径0.7mの木桶を井筒に据える。	井筒　龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗Ⅳ、中国陶器、瓦器椀、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）堀方龍泉青磁碗Ⅰ、白磁碗・皿、青白磁合子、瓦器椀、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK157	円形土坑	D・E-22・23		径1.5m、深さ0.3m。SK155に切られる。SK165を切る。	土師器坏（糸切り）
SD158	東西溝	F-23～28	16C	東側発掘区外に伸びる。長さ10m確認。幅1.0m、深さ0.3m。	龍泉青磁碗Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅳ、陶器、瓦質擂鉢、火舎、土鍋、瓦、土師器坏・皿（糸切り）、銭
SK159	円形？土坑	F-27		径0.6m。SD158に切られる。	土師器坏（糸切り）
SK160	楕円形土坑	F・G-25・26		長軸0.8m以上、短軸0.6m。SD158に切られる。	土師器坏（糸切り）
SK161	楕円形？土坑	H～J-27・28	12C後半	東側発掘区外に伸びる。長軸2.1m、短軸1.3m以上。発掘区壁の崩落で底まで出せなかった。深いので井戸かもしれない。SK168に切られる。	龍泉青磁碗Ⅰ、中国陶器Ａ群盤、丸瓦、平瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK162	楕円形土坑	I-26		西側攪乱を受ける。長軸0.8m以上。短軸0.7m、深さ0.3m。SK168を切る。	土師器坏（糸切り）
SK163	楕円形土坑	H・I-24・25	12C後半	東側、西側攪乱を受ける。長軸1.1m、短軸0.6m残存、深さ0.7m。	龍泉青磁皿、白磁碗、陶器、土師器坏（糸切り）
SK164	楕円形土坑	E-22		長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.4m。西側攪乱を受ける。SK165を切る。	天目碗、瓦、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK165	楕円形土坑	E-22・23	12C	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.5m。SK157、SK164に切られる。	白磁碗、瓦器椀、土鍋、土師器坏（糸切り）
SK166	楕円形土坑	I-22	近世	長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.4m。西側攪乱を受ける。SK167を切る。	陶器、土師器坏・皿（糸切り）
SK167	楕円形土坑	I-22	近世	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.5m。西側攪乱を受ける。SK166に切られる。	白磁碗、白磁碗Ⅳ、中国陶器Ａ群盤・Ｃ群捏鉢、国産陶磁器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK168	楕円形？土坑	I-26・27	近世	南側発掘区外に伸びる。長軸3.6m、短軸1.4m以上、深さ1.0m。SK162に切られる。SK161を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅳ、口禿白磁、国産陶磁器、土鍋、瓦、土師器坏・皿（糸切り）、石鍋、土錘、銭
SK169	方形？土坑	I-25・26		南側発掘区外に伸びる。長軸1.6m、短軸0.9m以上、深さ0.7m。上部に攪乱を受ける。底部に石組がある。	
SK170	楕円形？土坑	G-20・21	12C後半	長軸1.4m、短軸0.8m以上、深さ0.5m。SD84、SK151に切られる。SK171を切る。SK150より古。	瓦器椀、瓦、羽口、土師器坏・皿（糸切り）
SK171	楕円形土坑	F・G-21	12C	長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.8m。SD84、SK151、SK170に切られる。SK150より古。	白磁碗、陶器、瓦、土師器坏（糸切り）
SK172	楕円形土坑	F-27		上部攪乱を受ける。SD158に切られる。残存部で長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.4m。	瓦、土師器坏（糸切り）
SK173	楕円形土坑	E・F-27・28		東側攪乱を受ける。SK139、SD158に切られる。残存部で長軸1.5m、短軸1.1m、深さ0.4m。	白磁、瓦、土師器坏（糸切り）、土錘
SK174	円形？土坑	E-26		南側攪乱を受ける。SK138に切られる。残存部で径0.7m、深さ0.2m。	土師器皿（糸切り）
SE175	円形瓦組井戸	B・C-42	近代	長軸3.7m、短軸2.4mの楕円形の堀方に瓦を径0.8mの円形に組む。SE176、SK177、SE187、SE196、SE202、SE203を切る。	井筒　陶器、瓦、砥石　堀方　龍泉青磁碗、白磁碗Ⅳ、肥前染付、型紙絵付、国産陶磁器、七輪、瓦、軒平瓦、イイダコ壺
SE176	円形瓦組井戸	B・C-41	近代	長軸3.7m、短軸2.4mの楕円形の堀方に径0.7mの円形の井筒の痕跡。瓦２枚残存。SE175に切られる。SK177、SE187、SE196、SE202、SE203を切る。	井筒　火舎、土師器坏（糸切り）　堀方　白磁碗Ⅳ・Ⅵ、中国陶器Ｃ群捏鉢、肥前染付、国産陶磁器、火鉢、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK177	円形土坑	B-41	近代	径6.5m、深さ0.2m。SE176に切られる。	肥前染付、国産陶磁器、土師質深鉢
SK178	円形？土坑	C-43	近世	北側発掘区外に伸びる。径1.4m以上、深さ0.3m。SE175に切られる。SK179を切る。	青磁
SK179	円形？土坑	C-43・44	近世	北側発掘区外に伸びる。径1.5m以上、深さ0.7m。SK178に切られる。SE175より古。	同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、陶器、肥前染付、土師器坏（糸切り）
SE180	円形桶組井戸	C・D-43・44	12C後半	南側攪乱を受ける。堀方径2.1m残存。径0.7mの木桶を井筒にする。	堀方　青磁碗、白磁碗、白磁皿、陶器、須恵器甕、土鍋、瓦器椀、平瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK181	円形土坑	D-41	近代	径0.7m、深さ0.4m。SK182、SE196、SE202、SE203を切る。SD193より新。	国産陶磁器、須恵器甕、丸瓦
SK182	円形土坑	D・E-41・42	近代	径1.7m、深さ0.8m。試掘トレンチ、SK181に切られる。SD193を切る。	同安青磁皿Ⅰ、肥前染付、国産陶磁器、瓦、丸瓦、七輪、土師器坏・皿（糸切り）、銭
SK183	円形土坑	E-41	近世	径0.6m、深さ0.4m。SD193を切る。	陶器椀、瓦、土師器坏（糸切り）
SK184	円形？土坑	C・D-45・46	近世	北側発掘区外に伸びる。残存部径2.5m。東側攪乱を受ける。SK186、SK267に切られる。SK201を切る。	同安青磁碗Ⅰ・Ⅱ、同安青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ、陶器甕、擂鉢、火舎、土鍋、平瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK185	楕円形土坑	D・E-46	13C前半	長軸1.6m、短軸1.4m、深さ0.3m。SD194、SK267に切られる。	龍泉青磁碗Ⅱ、青磁碗、陶器、中国陶器Ｃ群捏鉢、瓦、軒丸瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK186	隅丸方形土坑	D・E-45	近世	長軸1.6m、短軸0.9m。SK267に切られる。SK184を切る。SK201より新。	青磁碗、龍泉青磁碗Ⅰ、白磁碗、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SE187	円形井戸	C・D-41・42	近世	長軸3.7m、短軸2.4mの楕円形の堀方に径0.6mの円形の井筒の痕跡。瓦の抜き取りか。SE175、SE176に切られる。SK177、SE196、SE202、SE203を切る。	井筒　火鉢、瓦　堀方　須恵器甕、唐津陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK188	楕円形土坑	G・H-42・43	近世	長軸3.5m、短軸2.3m、深さ1.1m。SE198、SE205を切る。	青磁碗・皿、同安青磁碗、瓦器椀、土鍋、肥前染付、唐津陶器、火舎、丸瓦、平瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK189	楕円形土坑	F-41	近代	長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.3m。SD195を切る。	肥前染付、土瓶、国産陶磁器、瓦、銭
SK190	楕円形土坑	F-43・44		東側攪乱を受ける。長軸1.8m、短軸1.0m、深さ0.5m。馬の埋葬土壙。	イイダコ壺、土師器坏・皿（糸切り）
SK191	楕円形土坑	G-43		長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.3m。SK192、SK199を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、瓦器椀、火舎、土師器坏・皿（糸切り）
SK192	楕円形土坑	F・G-42・43		長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.5m。SK191に切られる。SK199を切る。	陶器甕、土師器坏

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SD193	東西溝	D～F-33～44	16C	22m確認。東側攪乱を受ける。SD194に接続か。幅1.5～2.3m、深さ0.3～0.4m。SK182、SK183、SD221、SK229、SK230、SK231に切られる。SE197、SE204、SK222を切る。	龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁碗Ⅱ、青磁皿、白磁碗・皿、李朝粉青沙器、陶器、中国陶器A群盤、須恵器甕、瓦質擂鉢、備前擂鉢、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、土鍋、イイダコ壺、土師器坏・皿（糸切り）、石鍋、石球
SD194	東西溝	D・E-46・47	16C	東側発掘区外に伸びる。SK185に切られる。2.0m確認。幅0.7m、深さ0.2m。	陶器甕、瓦
SD195	東西溝	F-41・42		長さ3.3m、幅0.4～0.5m、深さ0.1m。	土師器坏（糸切り）
SE196	円形桶組井戸	C・D-42	12C前半	北側SE175、SE176、SE187に切られる。堀方長軸4.2m以上、短軸3.0m残存。径0.5mの木桶をSE202、SE203とともに据える。	井筒　土鍋、瓦器椀、土師器皿（糸切り）　堀方　白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、中国陶器A群盤、須恵器甕、土師器坏・皿（糸切り）、砥石
SE197	円形桶組井戸	D・E-43・44	12C後半	東側攪乱を受ける。堀方径3.3m。径0.7mの木桶をSE204とともに据える。	井筒　龍泉青磁碗Ⅱ、同安青磁碗、土鍋、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）　堀方　龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、石球
SE198	円形桶組井戸	G・H-42・43	13C後半	SK188に切られる。SE205を切る。径2.8mの堀方に径0.6mの木桶を据える。	井筒　青磁皿、白磁碗Ⅳ、口禿白磁　堀方　青磁皿、白磁碗Ⅳ、口禿白磁、陶器甕、土鍋、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK199	楕円形土坑	F・G-43		長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.3m。SK190、SK191、SK192に切られる。	龍泉青磁碗、同安青磁碗、土師器高台付坏、陶器
SX200	遺物集中部	F～H-46～48	12C前半	標高0.8m～1.2mの2.3×2.6mに広がる骨の集中部。	白磁碗Ⅵ、中国陶器四耳壺、瓦器椀
SK201	不整円形土坑	C・D-45・46	近世	北側発掘区外に伸びる。長軸1.2m以上、短軸1.1m、深さ0.5m。SK184に切られる。SK186、SK267より古。	青磁碗、陶器、火舎、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SE202	円形桶組井戸	C・D-41・42	12C後半	北側SE175、SE176、SE187に切られる。堀方長軸4.2m以上、短軸3.0m残存。径0.6mの木桶をSE196、SE203とともに据える。	井筒　白磁碗、白磁碗Ⅳ、陶器甕、土鍋、瓦、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）　堀方　瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SE203	円形桶組井戸	C・D-40・41	12C後半	北側SE175、SE176、SE187に切られる。堀方長軸4.2m以上、短軸3.0m残存。径0.6mの木桶をSE196、SE202とともに据える。	井筒　瓦器椀
SE204	円形桶組井戸	D・E-42・43	12C後半	東側攪乱を受ける。堀方径3.3m。径0.6mの木桶をSE197とともに据える。	井筒　白磁碗、白磁水注、陶器甕、須恵器甕、土鍋、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、石球
SE205	円形桶組井戸	G・H-41・42	12C後半	SK188、SE198に切られる。径0.5mの木桶を据える。	井筒　土師器高台付坏・坏（糸切り）　堀方　龍泉青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、陶器甕、須恵器甕、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK206	楕円形土坑	H・I-39・40	近世	長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.6m。SK207、SK210を切る。SK237より新。	肥前染付、国産陶磁器、火舎、土製人形、瓦、銭
SK207	隅丸方形土坑	I-39・40	近代	長軸1.8m、短軸1.3m、深さ0.6m。東側と西側の壁際に板材を立てる。SK206に切られる。	肥前染付、唐津陶器、国産陶磁器、瓦器椀、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK208	楕円形土坑	G・H-39・40	12C後半	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.5m。SK210、SK237を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁皿Ⅱ、陶器、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK209	楕円形土坑	G-40	12C後半	長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.2m。SK210を切る。	土鍋、土師器坏（糸切り）
SK210	楕円形土坑	G・H-39・40	12C後半	長軸2.5m、短軸2.2m、深さ0.3m。SK206、SK208、SK209に切られる。SK237を切る。東側攪乱を受ける。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、白磁碗、瓦器椀、土鍋、土師器坏（糸切り）
SK211	楕円形土坑	H・I-38・39		長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2m。	
SK212	楕円形土坑	G・H-38・39	12C後半	長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.3m。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁皿Ⅱ、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、瓦、土師器高台付坏・坏・皿（糸切り）
SK213	円形土坑	D・E-39・40	近代	径1.4m、深さ0.7m。	肥前染付、国産陶磁器、火舎、擂鉢、瓦、土師器坏、石球
SK214	円形？土坑	D-38	近世	径0.7m、深さ0.2m。SK215を切る。	瓦
SK215	円形？土坑	D-38・39	近世	北側発掘区外に伸びる。径1.8m以上。深さ1.6m。西側攪乱を受ける。SK214に切られる。	白磁碗Ⅳ、火舎、瓦、土鍋
SK216	土坑	D・E-37・38		北側発掘区外に伸びる。東側攪乱を受ける。径1.5m以上、深さ1.3m。SK238に切られる。SK217より古。	瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK217	円形土坑	E-37	近代	径0.9m、深さ0.4m。西側攪乱を受ける。SK238を切る。SK216より新。	陶器、国産陶磁器、瓦
SK218	方形？土坑	E-36		南側攪乱を受ける。残存部で径0.8m、深さ0.2m。	土師器
SK219	長楕円形土坑	D-34・35	近世	北側発掘区外に伸びる。東側攪乱を受ける。長軸1.2m以上、短軸0.3m以上、深さ0.5m。SD220を切る。	青磁、肥前染付、陶器、丸瓦
SD220	南北溝	D・E-34	12C後半	北側発掘区外に伸びる。南側攪乱を受ける。長さ2.2m確認。幅0.4m、深さ0.1m。SK219に切られる。	青磁碗、白磁碗、土師器坏（糸切り）
SD221	南北溝	D～J-32・33	近代	南北発掘区外に伸びる。攪乱を受ける。長さ11m確認、幅2.2m～2.5m、深さ0.4m。SK234に切られる。SD193、SE235を切る。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗Ⅱ、同安青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ、国産陶器、天目碗、須恵質鉢、瓦、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SK222	楕円形土坑	F・G-35・36	13C前半	長軸3.0m、短軸1.6m、深さ0.9m。SD193に切られる。	龍泉青磁碗Ⅰ、Ⅱ、白磁碗、陶器、土師質鉢、丸瓦、平瓦、瓦器椀・土師器高台付坏・坏・皿（ヘラ切り・糸切り）
SK223	楕円形土坑	G-36	近代	南側攪乱を受ける。長軸1.3m、短軸7.7m残存、深さ0.7m。	銭
SK224	楕円形土坑	H-36	近世	東側攪乱を受ける。長軸0.8m残存、短軸0.7m、深さ0.4m。SK232を切る。	瓦
SK225	円形？土坑	I-37・38	近世	南側発掘区外に伸びる。東側攪乱を受ける。残存部で径0.6m、深さ0.2m。	瓦
SK226	楕円形土坑	I-37	近世	長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.4m。	瓦
SK227	円形？土坑	I-36・37	近世	南側発掘区外に伸びる。径1.2m、深さ0.5m。	肥前染付、唐津陶器、瓦、土師器坏（糸切り）
SK228	楕円形土坑	I-36	近世	南側発掘区外に伸びる。長軸0.8m以上、短軸0.6m、深さ0.2m。	瓦
SK229	楕円形土坑	E・F-37・38	近世	東側、北側攪乱を受ける。残存部で長軸1.9m、短軸1.5m、深さ0.8m。SD193、SK230を切る。	青磁碗、陶器、瓦、土師器坏（糸切り）
SK230	楕円形土坑	F-36・37	近世	北側攪乱を受ける。長軸0.9m残存、短軸1.0m、深さ0.3m。SK229に切られる。SD193を切る。	瓦、土錘

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SK231	楕円形土坑	F-34	近代	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.6m。SD193を切る。	国産陶磁器、青磁碗、白磁碗、瓦
SK232	楕円形土坑	H・I-35・36	近代	南側攪乱を受ける。長軸1.6m残存、短軸1.3m、深さ0.7m。SK224に切られる。	龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ、国産陶磁器、瓦
SD233	東西溝	G-34・35	近世	東側攪乱を受ける。長さ3.9m確認。幅0.7～0.8m、深さ0.1～0.2m。	瓦、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK234	楕円形土坑	E・F-32	近世	東側攪乱を受ける。長軸1.6m、短軸0.4m残存、深さ0.2m。SD221を切る。	青磁碗、同安青磁碗、青磁皿、肥前染付、陶器、唐津陶器、土師器坏・皿（糸切り）
SE235	円形井戸	I-33・34	12C後半	南側発掘区外に伸びる。配水管のため途中までしか調査できなかった。堀方径3.3m。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ、土師器皿（糸切り）
SK236	楕円形？土坑	H・I-31・32	近世	南側、西側発掘区外に伸びる。長軸2.3m以上、短軸1.8m以上、深さ0.8m。	龍泉青磁碗Ⅰ、陶器甕、瓦質擂鉢、瓦器椀、瓦、土師器坏・皿（糸切り）
SK237	楕円形土坑	H-39		長軸0.7m残存、短軸0.7m、深さ0.2m。SK208、SK210に切られる。SK206、SK209より古。	
SK238	円形？土坑	E-37		径0.8m、深さ0.2m。SK217に切られる。SK216を切る。	
SE239	円形桶組井戸	F・G-8・9	12C後半	長軸2.9m、短軸2.2m以上の楕円形の堀方に径0.6mの木桶を据える。SE109、SE260を切る。SD74、SK78より古。SE263より新。	井筒　土鍋、土師器坏・皿（糸切り）　堀方　龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、越州青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ、白磁皿、白磁平底皿Ⅶ、陶器、中国陶器Ａ群盤、瓦器椀、須恵器甕、鋳型、取瓶、羽口、炉壁、土師器坏・皿（糸切り）
SK240	円形土坑	E-8・9	12C後半	径0.9m、深さ0.7m。	陶器、瓦器椀、取瓶、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK241	不整形土坑	E-9	12C	長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.3m。	白磁碗、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK242	円形土坑	E-9・10	12C後半	径0.8m、深さ0.3m。SK243を切る。	青磁碗、白磁碗、陶器、瓦器椀
SK243	円形土坑	E-9	12C後半	径1.0m、深さ0.4m。SK242に切られる。	青磁碗、同安青磁碗、白磁碗Ⅳ、青白磁合子身、陶器、須恵器甕、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK244	円形？土坑	D-10・11	12C後半	径0.2m、深さ0.4m。北側発掘区外に伸びる。SK245を切る。	青磁碗、同安青磁碗、青磁皿、土師器坏・皿（糸切り）
SK245	円形？土坑	D-11	12C後半	径1.3m、深さ0.2m。北側発掘区外に伸びる。SK244に切られる。SK247を切る。	同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅵ、陶器、土鍋、土師器坏・皿（糸切り）
SK246	円形土坑	D・E-11	12C後半	径0.8m、深さ0.2m。SK247、SK250を切る。SE03、SD50、SK251、SK252、SK253より古。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅷ、陶器、土鍋、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK247	不整形土坑	D-10・11	12C後半	長軸1.4m、短軸0.8m残存、深さ0.4m。SK244、SK245、SK246に切られる。SE03、SD50、SK251、SK252、SK253より古。	同安青磁碗、土師器坏（糸切り）
248	欠番				
249	欠番				
SK250	不整円形土坑	D・E-11	12C	径0.9m、深さ0.3m。SK246に切られる。SE03、SD50、SK251、SK252、SK253より古。	白磁碗Ⅳ、陶器
SK251	楕円形土坑	E・F-10・11	12C後半	長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.8m。SD50に切られる。SK252、SK253を切る。SE03より古。SK246、SK247、SK250より新。	青磁碗、同安青磁碗、越州青磁、高麗青磁、白磁碗、白磁碗Ⅳ、白磁皿、中国陶器Ａ群盤、陶器、瓦器椀、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）・皿（糸切り）、土錘
SK252	円形土坑	E-10・11	12C後半	径0.7m、深さ0.4m。SK251に切られる。SK253を切る。SE03、SD50より古。SK246、SK247、SK250より新。	瓦器皿、土鍋、鋳型、土師器坏・皿（糸切り）
SK253	楕円形土坑	E-10・11	12C後半	長軸1.1m残存、短軸0.9m、深さ0.4m。SK251、SK252に切られる。SE03、SD50より古。SK246、SK247、SK250より新。	龍泉青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗、白磁水注、土鍋、鋳型、取瓶、土師器坏・皿（糸切り）、土錘
SK254	楕円形土坑	F-10	12C後半	長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.7m。SD50に切られる。SK255を切る。SE03より古。	青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、中国陶器Ａ群盤、須恵器甕、瓦器椀、土師器坏（ヘラ切り・糸切り）
SK255	楕円形土坑	F・G-10	12C前半	長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.5m。SK254に切られる。SE03、SD50より古。	白磁碗、中国陶器Ａ群盤・Ｃ群壺・捏鉢、陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK256	楕円形土坑	F-10・11	12C前半	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.4m。SD50に切られる。SK257を切る。SE03より古。SK265より新。	白磁、土師器坏・皿（糸切り）
SK257	不整円形土坑	F・G-10・11	12C前半	長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.4m。SK256に切られる。SK265を切る。SE03、SD50より古。	白磁、須恵器甕、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK258	楕円形土坑	G・H-12	12C後半	東側発掘区外に伸びる。長軸1.0m、短軸0.5m以上、深さ0.5m。SD74に切られる。SK259を切る。	青磁、白磁碗Ⅳ、白磁皿、中国陶器Ｃ群捏鉢、陶器、瓦器椀
SK259	円形土坑	G-12	12C後半	径1.2m、深さ0.7m。東側発掘区外に伸びる。SK258に切られる。SD74より古。	青磁碗、同安青磁碗、越州青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ、中国陶器Ａ群盤・Ｃ群捏鉢、陶器、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り）
SE260	円形桶組井戸	F・G-9	12C後半	径0.6mの木桶を井筒とする。SE107、SE239に切られる。SE263を切る。SD74、SK78より古。	堀方　同安青磁碗、同安青磁皿Ⅰ、白磁碗、白磁碗Ⅳ、須恵器甕、土鍋、瓦器椀、土師器坏・皿（糸切り） 井筒　瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK261	円形土坑	G-10・11	12C前半	径0.6m、深さ0.2m。SD74、SE108に切られる。SE107より古。	白磁碗、土師器坏（糸切り）
SK262	楕円形？土坑	G・H-11	12C後半	長軸0.8m残存、短軸1.0m、深さ0.4m。SD74、SE108に切られる。SE107より古。	青磁碗、青白磁
SE263	円形桶組井戸	G-9・10	12C	径0.7mの木桶を井筒とする。SE107、SE260に切られる。SD74、SK78、SE239より古。	井筒　陶器　堀方　陶器
SK264	円形土坑	D-11・12	12C	径1.0m、深さ0.3m。北側発掘区外に伸びる。	瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK265	楕円形土坑	F・G-10	12C前半	長軸0.7m、短軸0.4m残存、深さ0.2m。SK257に切られる。SE03、SD50、SK256より古。	
SK266	楕円形？土坑	E・F-46	12C後半	東側、西側攪乱を受ける。長軸1.1m残存、短軸1.2m、深さ0.3m。	青磁碗、白磁碗、陶器、瓦器椀、土師器坏（糸切り）
SK267	楕円形土坑	D-45・46	近世	長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.5m。SK184、SK185、SK186を切る。	陶器、須恵器甕、土師質深鉢、瓦、丸瓦、土師器皿（糸切り）

Ⅳ　福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体

鹿児島大学獣医学科解剖学教室
西中川駿・吉野文彦

1．はじめに

わが国のウマやウシがいつ頃渡来したかは明確な結論は出ていないが、おそらく弥生中期以降であろうとされている。また、ウマやウシが最も多く出土する時期は中世で、次いで古墳時代であり、九州でも筆者らの調査でウマ73、ウシ53箇所からの出土をみる。福岡県内では近年、石田、高野、博多33次、博多37次、立花寺Ｂ、上唐原稲本屋敷遺跡など数多くの遺跡から出土例が報告され、また、埋葬例も検出されている。

箱崎遺跡群10次調査地点は、福岡市東区箱崎３丁目にあり、箱崎阿恵線道路整備事業のため、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成８年11月から平成９年３月まで発掘調査を行ったものである。時期は SK190が12世紀から13世紀、SX200は12世紀の前半のものと推定されている。今回調査を依頼された動物遺体は大半はウマのものであり、出土状況を確認した後、当教室に搬入されたものである。計測可能な骨や歯について測定を行い、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

2．出土状況

ウマの遺体の出土した SK190は、土坑に１頭が埋葬されており、発掘時の写真によると、左側を下にして、頸部を腹方に曲げて、頭を胸につけるようにした形で、前、後肢をそろえて埋葬されている。これらの状態から死後埋葬されたことがうかがえる（図版Ⅰ－１）。SX200は頭蓋のない２個体で、写真からみると、一応肢骨はつながっているが、位置がばらばらで、丁寧に埋葬したものではなく、投棄されたものか、また、肋骨など胴骨の位置と四肢骨の位置が少し離れていることから、流水により流された可能性も考えられる。また、この SX200にはウシが数点含まれている。ウシはこの他に SK86から１点、攪乱から１点が出土している。また、イヌ（SE107）、シカ（SX200）、クジラ（SD50）、イルカ（SK136）、カメ（スッポン)(SX200)、マグロ（SK136）などが検出されている。SK190の重量は1600.7ｇ、SX200からは4721.2ｇ、その他からは413.6ｇ、総重量6735.5ｇである。

3．出土遺体の概要

1）SK190出土の１号ウマ（図版Ⅰの１～20参照）

１号ウマは、前述のように左側を下にして横臥した状態で埋葬され、脊柱骨は頸椎のみで他の椎骨はみられないが、頸部を曲げた状態であり、頭蓋骨片や遊離した左右の上顎臼歯（P^2～M^3）、右の下顎臼歯（P_3～M_3）も検出されている。左下顎骨は臼歯（P_2～M_3）をもつ下顎体からなり、切歯部や筋突起などは欠如している。これら臼歯から筆者の方法で年齢を推定すると198.16±24.93月齢となり、16.5才と推定される。

前肢骨は表１に示すように肩甲骨、上腕骨、橈骨、中手骨、指骨などが、後肢骨は寛骨、大腿骨、脛骨、足根骨、中足骨、趾骨などが検出されているが、いずれも完形骨はない。これらの骨の計測可能な部位から筆者らの方法で骨長を推定し、林田らの方法で体高を推定すると、114.76±4.16となり、この推定値は現生のトカラ馬（115cm）とほぼ同じ高さで、小型馬に属する。

2）SX200出土の2号、3号ウマ（図版Ⅱの1～19参照）

2号、3号ウマは骨の大きさにより区別したが、2号が小さく、3号が大きい。両者共頭蓋はなく、表1に示すように頸椎、胸椎、肋骨など少ないが検出されている。前後肢骨は2号ウマは左右がそろっているが、3号ウマは多くの骨で右側が出土していない。しかし、四肢骨はほぼ完全な形で出土しており、橈骨、中手骨、基節骨、中節骨、脛骨、踵骨、距骨、中足骨、趾骨などの計測値を用いて、体高を推定すると、2号ウマは117.64±2.65cmで、1号ウマより少し大きく、3号ウマは125.13±3.72cmと2号ウマよりさらに大きく、御崎馬（130cm）より小さいが中型馬に属する。なお、2号、3号ウマ共に歯の出土がないので年齢の推定はできないが、長骨の骨端線の閉鎖などから成獣であることがわかる。

3）ウシ（図版Ⅱの20～23参照）

SX200から右側の尺側手根骨と第四手根骨、中節骨（右、趾）、右側の下顎骨（M_3を含む）が検出され、また、SK86からは左側中手骨が出土している。下顎骨の第三後臼歯から年齢を推定すると11才であり、また、歯冠長（36.8mm）から筆者らの方法で体高を推定すると122cmとなり、これは雄のものと推定される。中手骨中央幅や径（30.9×21.4mm）から体高を求めると117.86cmであり、これは雌のものと推測される。

4）イヌ（図版Ⅱの25、26参照）

イヌは SE107から左右の上顎骨、下顎骨が出土しており、不完全な骨のために計測値を示すことはできないが、現生の柴イヌとほぼ同じ大きさの小型犬である。

5）その他の動物遺体（図版Ⅱの24、27～29参照）

シカ（SX200）の右上腕骨、クジラ（SD50）の椎骨、イルカ（SK136）の椎骨、カメ（スッポン）（SX200）の腹甲、マグロ（SK136）の椎骨などが検出されている。

4．考　察

中世の遺跡からのウマ、ウシの出土例は、全国各地から報告され、特に神奈川県の千葉地東遺跡や蔵屋敷遺跡では大量に出土している。九州では北九州および熊本県を中心にその出土例が数多く報告され、福岡市でも近年博多33次、37次や立花寺B遺跡などからウマの遺体が検出されている。立花寺B遺跡からは2体が重なるようにして出土しており、明らかな埋葬例であった。本遺跡の1号ウマは、頸部を曲げて頭を胸につけるような形で埋葬されており、土坑が狭いためにこのように折り曲げた形で埋葬されたのであろう。2、3号ウマは、四肢骨の出土地点と肋骨などの出土地点が少し離れていることから流水により移動し、集積したかのようになっている（図版Ⅱの1）。これらのウマは投棄されたのか、埋葬されたのかよくわからない。しかし、刀痕などみられないことから食料としたものではないと思われる。

一般に中世のウマは体高128cm位であるが、本遺跡のものは1号ウマが114.7cm、2号が117.6cm、3号が125.13cmと低く、1号ウマは16.5才と老齢である。1、2号ウマのような小型馬は中世の遺跡でもしばしばみられるが、博多37次では128.26±1.98cm、立花寺B130cm、北九州市の高野遺跡のものは128.5cmと推定されており、いずれも現生の御崎馬とほぼ同じ体高を有している。

これらのウマの祖先が、いつ頃、どこから渡来してきたかは明確でないが、民族の移動により持ち込まれたと考えられ、今のところ C^{14}測定を行っている福江市の大浜遺跡の弥生中期が最も古いとされ、この時期に朝鮮半島経由で北部九州に入ったとされている。

一方、本遺跡からのウシの出土は極めて少なく、下顎骨、中手骨などであり、出土地点が異なるの

で少なくとも３個体のものと推定される。体高117.8cm（雌）、122.0cm（雄）のものとがあり、現生の口之島野生化牛とほぼ同じ大きさである。イヌは中世の遺跡からウシ、ウマと共によく出土する動物で、縄文時代の小型犬から中世には中型犬が移入して来るといわれている。本遺跡のイヌは小型犬であり、体高40cm以下であると推定される。

その他の動物であるシカ、クジラ、イルカ類がみられ、また、魚類も少量検出されているが、これらは食料とされたのであろう。

箱崎遺跡を遺した人々は、小型、中型のウマやウシを飼育し、交通、運搬、農耕用として使役していたのであろう。他の遺物は食料として利用していたのであろう。

５．まとめ

福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体について調査した。

１．出土した動物遺体はウマが大半であるが、少量のウシ、イヌ、シカ、クジラ、カメ(スッポン)、マグロなどで、総重量6735.5ｇである。

２．ウマはSK190から埋葬例で１個体（１号）、SX200から投棄されたような２個体（２、３号）が検出され、１号ウマは体高114.7cm、年齢16.5才、２号は117.6cm、３号は125.1cmと推定されたが、頭蓋や歯の出土がないために年齢不詳である。いずれも小～中型馬である。

３．ウシは、SX200などからわずか４点の出土であるが、下顎第三後臼歯や中手骨の計測値から11才、体高117.8cmと推定された。イヌは小型犬に属する。

表１　箱崎遺跡群10次調査地点のウマの出土骨片数

骨名 / トレンチ		頭蓋			胴骨							前肢骨								後肢骨								出土骨片数
		頭蓋骨	下顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨		寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
SK190 1号馬	L	6	2	7								1	2	2		4	1			1	1		2		4	1	3	78
					4																							
	R	5	5	9								1	1	1		2	1	3			1		1		3	1	3	
SX200 2号馬	L										12	1	1	2	2	7	7	5		3	2		3		9	1	4	124
					2	12	2		1																			
3号馬	R										17	1	1	1	1	4	4	3		1	1	1	2		5	3	3	
骨格別出土骨片数		34 (16.8%)			50 (24.8%)							59 (29.2%)								59 (29.2%)								202

L: 左側、R: 右側　　歯: 遊離した歯のみ

〔参考文献〕

１．林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究　p109～120、日本中央競馬会、東京（1978）

２．福岡県教育委員会：上唐原稲本屋敷遺跡　p103～105（1997）

３．福岡市教育委員会：立花寺Ｂ遺跡　p75～77（1997）

４．福岡市教育委員会：博多11　p35～38（1988）

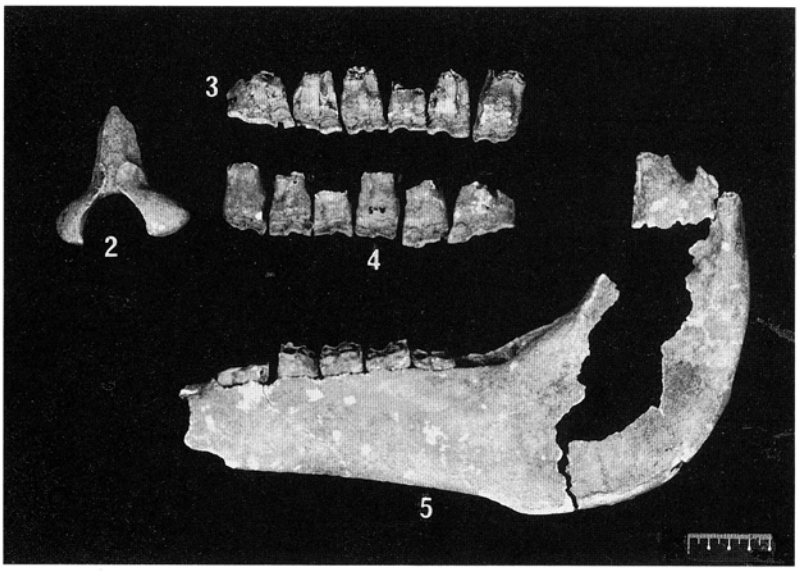
５．福岡市教育委員会：博多16　p173～176（1991）

６．北九州市教育文化事業団：高野遺跡　p129～132（1997）

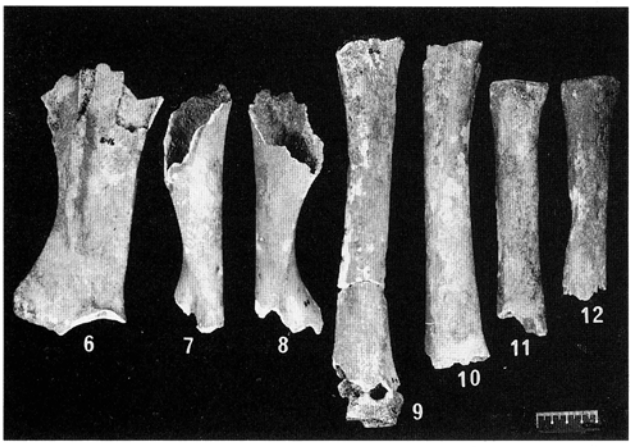
７．金子浩昌：中世遺跡における動物遺体－鎌倉市内の遺跡例を中心として－鎌木義昌先生古希記念論文集　p407～435（1988）

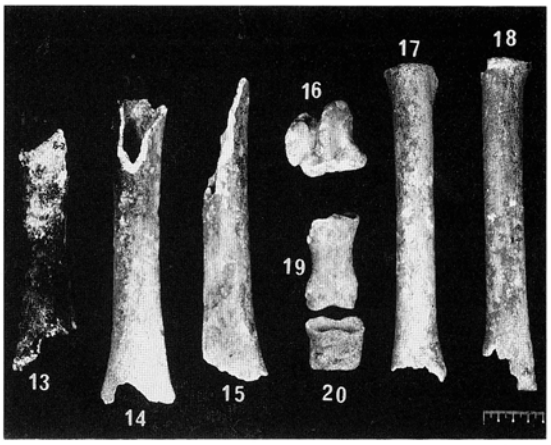
８．西中川駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究成果報告書　p１～95（1991）

図版Ⅰ

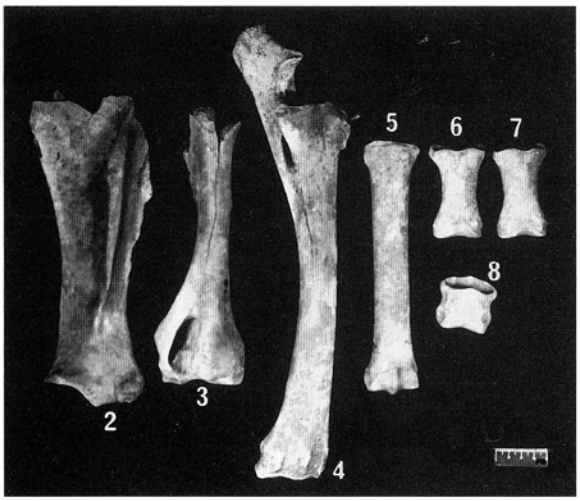


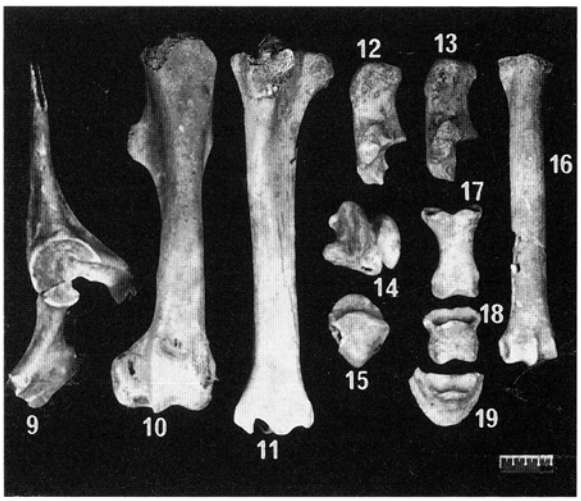
1：ウマ遺体出土状況(SK190、1号ウマ) 下方に脊柱がある。
2～20：1号ウマ (SK190)
L：左側　R：右側
2．後頭骨　3．上顎第二臼歯～第三臼歯(R、左から)　4．上顎第二臼歯～第三臼歯(L、右から)　5．下顎骨(L)　6．肩甲骨(L)　7．8．上腕骨(R、L)　9．10．橈骨(R、L)　11．12．中手骨(R、L)　13．大腿骨(R)　14．15．脛骨(L、R)　16．距骨(R)　17．18．中足骨(L、R)　19．基節骨(趾、L)　20．中節骨(趾、L)

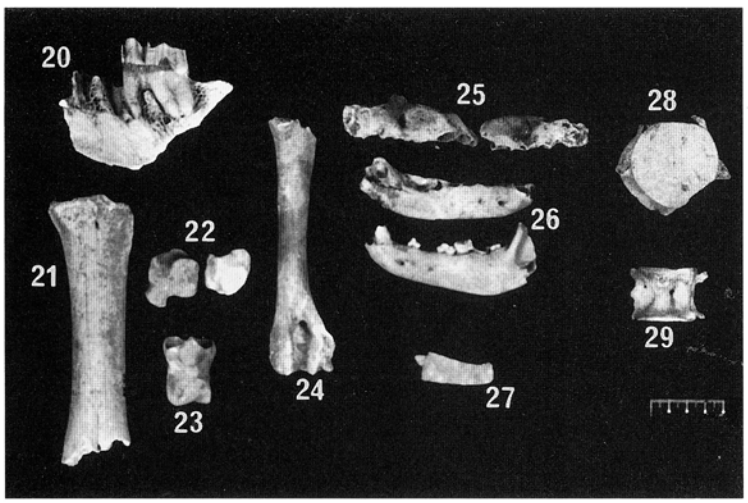




図版Ⅱ







1：ウマ遺体出土状況(SX200、3号ウマ)　右上方に肋骨などがある。
2～19：ウマ(SX200)　20：ウシ(攪乱)　21：ウシ(SK86)　22、23：ウシ(SX200)　24：シカ(SX200)　25、26：イヌ(SE107)　27：カメ(スッポン)(SX200)　28、29：イルカ、マグロ(SK136)

2．肩甲骨(R)　3．上腕骨(L)　4．前腕骨(R)　5．中手骨(R)　6、7．基節骨(指、L、R)　8．中節骨(R)　9．寛骨(R)　10．大腿骨(R)　11．脛骨(L)　12．13．踵骨(R)　14．距骨(L)　15．膝蓋骨(R)　16．中足骨(R)　17．基節骨(趾、R)　18．中節骨(趾、R)　19．蹄骨(趾、L)　20．下顎(第三後臼歯、L)　21．中手骨(L)　22．手根骨(R、尺側、第四)　23．第四趾中節骨(R)　24．上腕骨(R)　25．頭蓋骨(L、R)　26．下顎骨(L、R)　27．腹甲　28．29．椎骨

箱崎 6

－箱崎遺跡群第10次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書〈第551集〉

1998年３月31日

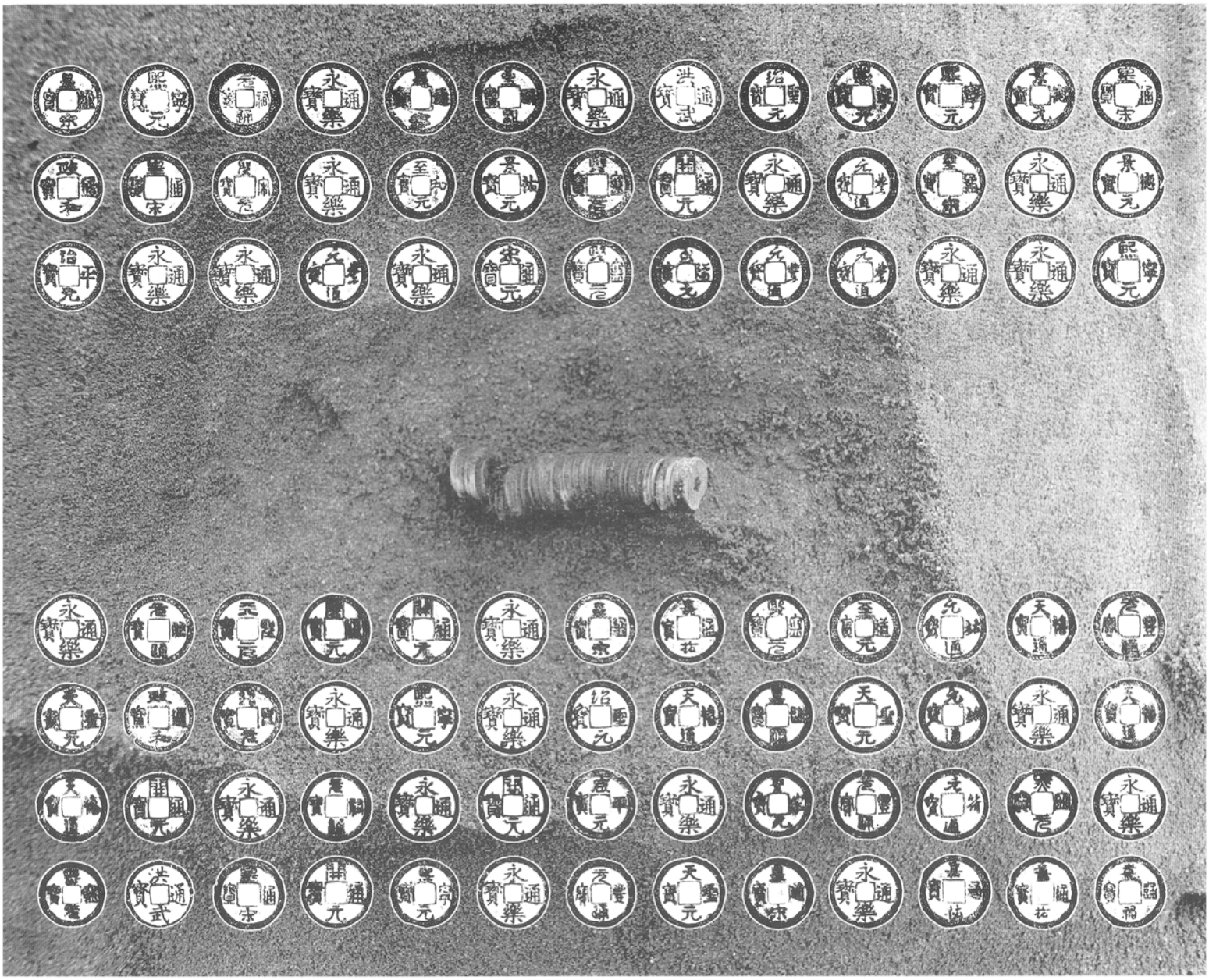
発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎092－711－4667

印　　刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目9-32
☎092－621－8711

HAKOZAKI 6

—Results of the 10th excavation of the Hakozaki sites—

Report of Archaeologicai Investigations of Fukuoka city, Vol. 551



1998

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY